

77-74

文學博士井上哲次郎
文學士姉崎正治著



印度宗教史全

東京 金港堂書籍株式會社

序言

宗教の歴史的研究は現時最急要にして又最興味ある研究の一なり、特に宗教問題紛起し來り又古より多く印度宗教の感化を受けし我邦にありては、印度宗教史知識の缺くべからざるは言ふ迄もなし、印度宗教史の研究は從來佛者にして其一部に指を染めしもあり、又輓近歐米東洋學者の研究は其事實的探求に於て驚くべき進歩をなし、其餘波我學界に此研究を誘起せし事少小にあらず、然れども其全體に就きて簡明に歴史的敘述をなせし者に至りては、不幸東西兩洋に好著あるなし、只獨逸にありてウルムの著と、佛蘭西にありてバルトの著とは稍、此缺を補ひ得べきも、尙未だ歴史の體に於て大に遺憾なき能はず、是れ著者が不肖を顧みず全力を注ぎて此著を公にしたる所以なり、若し印

度宗教史著作の隗として後來に完全なる者の緒を開くを得ば
著者の幸なり。

此書元、印度の宗教史に就きて貫通したる大體の知識を普及せ
ん爲、各宗學林の教科書并に自修用に供するを目的としたるが
故に、成るべく叙述を平易明晰にし、印度宗教史に固着せる多く
の暗黒疑問に就きては一々之を記せず、一に著者の斷定を以て
叙述したり、其詳細の疑問并に其研究は別に參考用の印度宗教
史補遺に於て之を著述したり、讀者常に彼の列冊を携へんには
便益尠なからざらん。

此書を著すに當りて、材料は現時我邦にて得らるるたけの者を
盡さん事を期し、東西の材料を涉獵したり、然れども著者の淺學
なる決して十全なる探求をなす能はず、今後漸次に深く探求増
訂せん事を期す。

此書を著すには著者が大學院に於ける指導教授たる博士井上
教授に負ふ所特に多く、又教授は親しく校閲の勞を執り著者に
多くの有益なる注意を與へられしを謝す、只本書著作の終に當
りて博士佛國へ向け出發せらるる事あり、尚詳細の指導を受く
る能はざりしを憾とす。

我邦に最も關係ある印度の宗教は佛教なり、然れども其歴史は
印度以外に於て發達せし者多く、本書は印度の宗教史として、只
印度の國內に於ける佛教のみを叙したり、然れども我邦の宗教
は佛教と離るべからざる關係ある婆羅門教及印度教の感化を
受けし事甚大なる者あり、讀者本書を閲すると共に常に本邦の
宗教と關聯して見んには、得る所尠なからざるべし。

書中固有名詞は其時代其方處に從て成るべく原音を用ひ、又梵名にして漢譯ある者は之を襲用し、其他は總て片假名を用ひたり、讀者卷尾の梵語字母表と書中挿入の羅馬字とを参照して、勉めて原音に離れざらん事に注意すべし、又年代は便宜に從て一に西洋曆紀元を用ひたり。

本書に於ける斷定叙述に就きては世の學者間に異議を招く者あるべく、又誤謬の發見せらるる事もあるべし、著者は今後世間と共に益す深く此研究を遂げ、續々從來の誤謬誤見を訂正し得べきを冀望す。

著者誌

明治三十年十月

目次

緒論

宗教と國民歴史、一—印度の宗教史、二—印度宗教史の特質、三—印度宗教史研究の價值、四—印度宗教の影響、四

印度の國土及人民

印度の國土、五—信度の平原、梵詩人地方、六—恒河の平原、中央地方、七—雪山、連山、七—南方高原地方、八—印度の人民、八—太古の住民、九—アーリヤ民族、一〇

印度宗教史の時代

印度宗教の時代と民族との關係、一一—第一期、一二—第二期、一二—第三期、一二—第四期、一三—第五期、一四—第六期、一四—第七期、一五

第一章 吠陀神話時代

第一節 當時の狀態并に吠陀の傳來

信度平原に於けるアーリヤ民族、一六—當時の宗教、一六—梨俱吠陀、一七—吠陀の集録、一七—婆馬吠陀、一八—耶柔吠陀、一八—阿他婆吠陀、一八—集録以外の吠陀聖典、一九—

目次

吠陀の傳來一九

第二節 吠陀神話の宗教……………二〇

吠陀の神格提婆二〇—提婆崇拜の宗教的意識二二—崇拜の動機と其變遷二二

第三節 吠陀神話……………二三

一、最古の讚歌、天上諸神……………二三

アテテ、二三—アテテの子、二四—アテトヤスの性質、二五—婆樓那、二五—天空階

神の歌、二六—兩アシツカン、二七—烏舍師、二八—太陽神、二八

二、空中諸神……………三〇

空中諸神の出現、三〇—因陀羅、三〇—婆由、三三—樓陀羅と其從屬、三三

三、地上諸神、後世の讚歌……………三四

地上の提婆、三四—阿姑尼、三四—蘇摩、三七—路神と供物、三七—祈禱の神、三八—河

神、三八—提婆の妻、三九—維多の提婆、三九

第四節 吠陀の世界觀及人生觀……………四二

吠陀に造化の觀念なし、四二—神我章の宇宙開發論、四二—犧牲と宇宙開發と、四三—冥

想と宇宙開發と、四四—死に關する觀念、四五—死と夜摩と、四五—死と阿姑尼と、四六—
輪廻及罪惡の觀念、四八

第五節 吠陀宗教の儀式并に教制……………四八

祭祀と火及酒、四九—祭祀に於ける僧侶、四九—犧牲、四九—教制、僧侶、五〇—吠陀の重要
五一

第二章 優波尼沙土の哲學考察時代……………五三

第一節 アーリヤの東漸、南下……………五三

中央地方に於けるアーリヤ民族、五三—アーリヤ民族と土人と其南下、五三—海上の交
通、五五

第二節 プラーハマナと優波尼沙土……………五六

プラーハマナの性質、五六—プラーハマナの世界觀、五六—阿闍若迦、五七—優波尼沙土
の性質、五七—優波尼沙土、五八—優波尼沙土の哲學的考察、五九

第三節 優波尼沙土の哲學思想……………六〇

梵、六〇—世界の開發、六一—世界は惡なり、厭世觀、六二—解脱、六三—個人精神と最上精

目次

神、六四—萬有一六六—智力は解脱の因、六七—優波尼沙土哲學の要領、六八—優波尼沙土の言語、六九

第四節 哲學諸派……………七〇

自由考察哲學の勃興、七〇—毘曼摩學派、七〇—聲常住論、七一—尼夜耶學派、七一—論理法、七一—宇宙論、七二—密世師學派、七二—六句義、七二—附徒學派、七三—神我と自性、七三—二十三隨、七四—吠檀多學派、七四—最上精神、七五—修多羅、七五

第三章 婆羅門教固成時代……………七七

第一節 民族及社會の發達……………七七

社會的制度の固成、七七—階級制度の起因、七七—人種の別、七七—首陀羅、七八—職業の別、七八—產業者、七八—統治者、七九—僧侶、七九—四姓の成立、八〇—婆羅門と刹帝利との争闘、八〇—雜種、八一—四姓外の劣等族、八一

第二節 家庭及社會制度、摩拏の法典……………八二

家經及家傳、八二—法典、八三—法典の内容、八三—再生族、八四—婆羅門の特權、八四—婆羅門に對する法施、八五—婆羅門の六正行、八六—婆羅門の生活、八七—梵志時期と拂淨

式、八七—生誕以後の拂淨式、八七—就學、八八—還家及婚姻、八八—家居と五種大祭祀、八九—婆羅門の食物、九〇—婆羅門の妻、九〇—出家、九〇—其外の再生族、九一—政治と神權と、九一—刑辟、九二

第三節 婆羅門教の宗教思想……………九三

婆羅門教の成立、九三

一、梵天と世界の成立……………九三

梵天、九三—唯、九四—世界の開發、九四—世界の四時期、九五—クリタ時代、九六—トクタ時代、九六—ドワーパラ時代、九六—カリ時代、九七—厭世觀、九七

二、罪障と輪廻……………九八

世界の惡、九八—宿命、九八—應報と罪障、九九—三徳と輪廻の境界、九九—輪廻説の由來、一〇一

三、世界の還没と解脱……………一〇二

大時期と劫波、一〇三—解脱と作法と、一〇三—眞の解脱と智識と、一〇四—國民的宗教としての婆羅門教、一〇四

第四節 懷疑と詭辨、順世學派……………一〇五

婆羅門の專權と社會の希望、一〇五—自由思想と懷疑論、一〇六—拘除黎、一〇七—富蘭那迦葉、一〇七—新婆迦學派、一〇七—新婆迦の感覺主義、一〇七—新婆迦の物質主義、一〇八—新婆迦の快樂主義、一〇八

第四章 佛教の革新時代……………一〇

第一節 宗教改革の氣運……………一〇

社會事物の不振、一一〇—宗教革新の真相、一一〇—遺世修行、一一一—教團生活と沙門、一一一—佛陀耆那、一一二—闍伊那派即耆那教、一一二—恒河地方と宗教革新、一一三

第二節 佛陀の一生……………一一三

迦比羅城及其城主、一一三—悉達太子、一一四—太子の悲哀觀、一一四—羅睺羅、一一五—太子の出家、一一五—釋迦族沙門の就學、一一六—沙門の獨立修行、一一六—樹下の成菩提佛陀、一一六

第三節 佛陀の傳道、佛教教團の成立……………一一七

鹿野苑の說法轉法輪、一一八—教團の成立、一一八—六十弟子派遺、一一八—事火外道の

誘化、一一九—竹林止住と其說法、一一九—舍利弗及目犍連、一二〇—王舍城民の不平、一

二〇—給孤獨長者と祇園精舍、一二〇—佛陀の歸郷、一二一—父王の死、一二一—教團の

膨脹と敎敵、一二一—佛陀の入滅、一二二—佛教興起の真相如何、一二二—佛陀の婆羅門

教に對する態度、一二三—佛陀が傳道の心事、一二三—菩提と達磨、一二四—平等の傳道、

一二五—佛陀と其門弟子、一二六

第四節 佛教の敎理……………一二七

四聖諦と悲壯の觀想、一二七

一、苦諦……………一二八

一切苦なり、一二八—一切無常なり、一二八—生死大海、一二八—佛教の向上的精神、一二九

二、集諦……………一二九

苦の成立、一二九—成立の順序、生、有、取、一三〇—渴愛、一三〇—受、觸、六入、一三〇—名色、一三〇—觸、一三〇—業、一三一—行、一三一—一切法、一三一—個人格無我、一三一—無明、一三二—無明論と迷妄論、一三二—無明の解脱、一三三

三、滅諦……………一三四

苦と熱と一三四—涅槃滅火一三四—阿羅漢一三四—聖者靜安の狀態一三四—
涅槃は彼岸にあらず一三五—涅槃の見解と後世の佛教一三五

四、道諦……………一三七

中道即八正道一三七—戒定慧一三八—戒の消極的命令一三八—殺生戒と慈悲一
三九—道徳修練の目的一三九—道徳修練の方法一四〇—辟支佛と佛陀一四〇—
過去の佛陀は止滯得善の師範一四一—七佛通例一四一

第五節 佛教教團の戒律……………一四二

戒律の性質一四二—佛教教團の組織一四二—入團一四二—沙彌戒一四三—具足戒沙
門比丘一四三—退團一四三—比丘には所有なし一四三—乞食一四四—比丘の居住遊
行一四四—日常の生活一四四—雨安居一四四—教團の儀禮一四四—比丘尼一四五—
在家の信者一四五

第六節 佛滅後の佛教教團……………一四六

佛法僧一四六—佛陀人格の崇拜一四七—遺法の纂集一四七—遺廢と毘奈耶一四七—
長老及上座と滅後教團の組織一四八—教團の外護と諸處の教團一四九—滅後百年戒
律に関する異論一四九—毘舍利の會議に於ける上座と大衆一四九—宗義確立の始一

五〇

第七節 佛滅後の印度と希臘文明……………一五一

印度の列國并其興廢一五一—歴山大王の侵入一五二—チャンドラグプタ王の摩利耶朝、
一五三—希臘人の交通と希臘の文明一五四—希臘彫刻の影響一五四—希臘使臣の肥
饒一五五—羅馬との交通一五五

第八節 阿育王と佛教……………一五六

阿育王の性情一五六—阿育王の大帝國一五六—阿育王の信仰其所謂達磨一五七—阿
育王と佛教一五八—阿育王の佛教に於ける感化一五九—佛教と宇內的宗教一六〇—
王の殺生禁一六一—王の博慈事業一六一—法臣一六二—阿育王と婆羅門教一六二—
阿育王の歸佛一六二—阿育王の結集事業一六三—阿育王の布教一六四—錫蘭の佛教
一六四—其他の南方佛教一六五—北方の佛教一六五—阿育王の事業進歩及其晩年一
六五

第九節 佛教の分派と阿毘達磨……………一六六

教團の分争と議論解釋一六七—阿毘達磨毘婆沙一六七—分派と宗義一六八—分派と
尼柯耶一六九—十八尼柯耶の異論一七〇

目次

第十節 耆那教派の發達……………一七一

耆那教と佛教との類似、一七一—耆那教と佛教との敵視對立、一七二—耆那教の教理、一七二—耆那教の佛教同化、一七三—開祖以後の沿革、一七三—空衣派と白衣派、一七四—佛教の影響、一七四—耆那教と印度教、一七四—耆那教經典の成立、一七五—耆那教の膨脹、一七五

第十一節 瑜伽派……………一七六

佛教興起後婆羅門の活動、一七六—瑜伽、一七六—波羅閣梨の開宗、一七七—瑜伽の目的、一七七—瑜伽の行法、一七七—悉地不思議力、一七八—一切智境、一七八

第五章 宗教混沌時代……………一八〇

第一節 概見……………一八〇

佛教後の婆羅門教劇振、一八〇—外來の勢力、一八〇—諸宗教の混淆、一八一

第二節 婆羅門族の新企圖、民間信仰の勃興……………一八二

下層民間の信仰、一八二—佛教の長所と婆羅門教の弱點、一八三—婆羅門教の世俗化、一八三—英雄崇拜、一八四—婆羅の崇拜、一八五—毘濕摩の崇拜、一八六—化現説の萌芽、一八六—三種現體説の萌芽、一八七

第三節 迦膩色迦王の佛教と馬鳴……………一八七

月氏族の侵入、一八八—迦膩色迦王の即位、一八八—佛教中の異論と上座部、一八八—迦膩色迦王の結集及佛教保護、一八九—馬鳴の傳記、一九〇—馬鳴の思想、一九一—真如と生滅、一九一—佛と衆生、一九二—願行と攝護、一九二—馬鳴の形而上論的教理、一九二—佛三身の説、一九三—馬鳴の宗教的意識、一九三—馬鳴の佛教史上の位置、一九四—馬鳴の著書と其歴史的意義、一九四—北方佛教傳播の源泉、一九五

第四節 三種現體説、化現説の發達、印度教……………一九五

新婆羅門教の成立と三種現體説、一九五—三種現體の人格的特立、一九七—三種現體に關する神話、一九七—毘濕摩に關する神話と英雄崇拜、一九八—毘濕摩化現の信仰、一九九—其他の神の神話、二〇〇—印度教の基本、二〇〇

第五節 印度教と其制度……………二〇一

婆羅門教根本の轉換、二〇一—印度教の包括的性質、二〇一—印度教の社會制度、二〇一—印度教の法典、二〇二—印度教の儀禮、二〇二—宗教的藝術、二〇三

第六節 富蘭那文學、印度教の神話……………二〇四

目次

宮闈那、二〇四—宮闈那の内容分類、二〇四—世界の創造、二〇五—世界の形態、二〇五—天上及地下、二〇六—世界成壞の歴史、二〇六—祭日聖地等の緣起、二〇六—附屬神話の成立、二〇七—少小諸神、二〇七—帝釋天、二〇八—緊那羅、二〇八—乾闥婆、二〇八—迦樓羅、二〇八—龍王等、二〇八—阿修羅、二〇九—惡鬼、二〇九—夜叉、二〇九—羅刹、二〇九—ダイトヤス等、二一〇—眷屬、二一〇—宮闈那神話佛教に入る、二一〇

第七節 動植物崇拜、陰陽崇拜、庶物崇拜、……………二一一

印度教に於けるチラン風、二一一—古來の動物尊重、二一一—佛教に於ける動物、二一一—神の乘物動物、二一二—龍蛇の崇拜、二一二—龍に関する神話、二一三—植物の崇拜并に其神話、二一四—佛教と庶物崇拜、二一五—男女根の崇拜、二一六—淫婆と隣伽、二一七—天然石器物等の崇拜、二一七—印度教の庶物崇拜、二一七

第八節 薄伽梵歌の折衷宗教……………二一八

折衷の流行、二一八—薄伽梵歌の折衷的學說、二一八—優波尼沙土の分子、二一九—數論的分子、二一九—瑜伽并に印度教的分子、二一九—信仰の觀念、二二〇—薄伽梵歌の効果、二二〇

第九節 龍樹の大乗佛教……………二二〇

大乗佛教の勃興、二二一—龍樹の出現、二二一—龍樹の無字宙論、二二一—六波羅蜜と般若波羅蜜、二二三—布施、二二三—持戒、二二三—忍辱、二二四—精進、二二四—禪定智慧、二二四—菩薩及願力、二二四—念佛修善と慈悲攝護、二二五—十住地、二二五—龍樹の密教的分子、二二六—龍樹の折衷分子、二二六—迦那提婆の破邪的運動、二二六—那爛陀寺の形勢、二二八

第十節 無著の中觀及世親の瑜伽佛教……………二二八

龍樹後の佛教、二二八—無著、二二八—無著の問題、二二九—無著の阿賴耶識說、二二九—三界唯一心、二二九—無著の宗教、二三〇—世親が俱舍唯識、二三〇—瑜伽の行、二三一—瑜伽師の十七地、二三一—無餘涅槃、二三二—中觀と瑜伽の發達、二三三—陳那等の論理、二三三—護法の唯識論、二三三—清辨等の空論、二三四—戒賢の中論、二三四—龍智の說密佛教、二三四—眞言佛教、二三五—法相眞言、中觀淨土、應機踏派の宣布、二三五

第十一節 中印度の文化……………二三六

カ日王、二三六—カ日王朝の九寶、二三六—宗教に對してのカ日王、二三七—踏教派の平和、二三七—新日王と無著、二三七—戒日王の法會、二三七—宗教信仰の衰運、二三八

第十二節 佛教の消滅……………二三八

佛敎と印度敎との接近、二三九—當時の寛容的風潮、二三九—佛敎の衰勢、二三九—毘溼
荼派對佛敎、二四〇—溼婆派對佛敎、二四一—佛敎の自滅、二四一

第六章 印度敎確立時代

第一節 クマーリヤと商羯羅

印度敎統合の要求、二四三—クマーリヤ、二四三—商羯羅の事業、二四四—商羯羅の繼承
者、二四五—商羯羅が事業の結果、二四五

第二節 印度敎の分派

印度敎分派の由來、二四六—商羯羅と印度敎の分派、二四六—萬有神の觀念と分派、二四
七—毘溼荼派と溼婆派、二四八—二派の外形差別、二四九—二派の趣味差別、二四九

第三節 溼婆崇拜派

溼婆の崇拜、二五〇—溼婆の性質、二五〇—破壊の威力としての溼婆、二五〇—再造の威
力としての溼婆、二五一—行者としての溼婆、二五一—知者としての溼婆、二五二—逸樂
の神としての溼婆、二五三—半男半女の溼婆、二五三—溼婆の功徳、二五三—溼婆の異方
面と名稱、二五三—溼婆の形相、二五四—溼婆崇拜の方面、二五五—溼婆派の類別、二五六
—溼婆派の内秘的性質、二五七

第四節 溼婆派附屬分派

溼婆派中の分派、二五七—復讐派、二五七—復讐派の教理、二五八—溼婆派の二極端、二五
九—波輪鉢多派、二五九—波輪鉢多派の教理習慣、二五九—水銀派と其教理、二六〇—水
銀派の現世主義、二六一

第五節 女神崇拜派

溼婆派の病的傾向、二六二—生殖力の崇拜、二六二—女神崇拜の起源、二六二—女神の二
方面、二六二—破壊の威力としての女神、二六三—溫和なる方面の女神、二六三—女神の
異方面、二六三—宇宙は女神なり、二六四—女神派の肉慾的儀禮、二六四—女神派の私利
的修法、二六四—六咒法、二六五—女神派修法の影響、二六五—女神派の經典、二六六

第六節 毘溼荼崇拜派

毘溼荼派の包括的態度、二六六—毘溼荼派に定形なし、二六七—毘溼荼の性質及形相、二
六八—毘溼荼の功徳と名稱、二六八—毘溼荼の化身と其に關する説話、二六九—毘溼荼
崇拜派の風趣と其信仰の觀念、二六九—信仰及愛情と恩寵、二七〇—信仰説の流弊と唱
名、二七一—教師の崇拜、二七一—新説提出の自由、二七二—毘溼荼派の主義と經典、二七
二

第七節 ラーマーメジャ派……………二七二

ラーマーメジャの局限唯一論二七三—主宰と世界二七三—主宰の慈悲と其顯現二七三—主宰の内面的信仰二七四—ラーマーメジャ派の感化と其二派二七四—信仰に關する二派の争點二七四—女神に關する二派の異議二七五—ラーマーメジャ派の習慣二七六—二元的唯一主義二七七

第八節 マドワ派とラーマーナンダ派……………二七七

マドワの二元主義二七七—其信仰及儀禮二七八—マドワ派の分派二七八—ラーマーナンダの通俗的教化二七九—其崇拜の風趣二七九

第九節 毘溼拏派の腐敗……………二八〇

ブラバミナイタマヤ二八〇—チャイタマヤ二八〇—信仰と戀愛との合一二八一—信仰と戀愛の階段二八一—淫靡の儀禮二八一—チャイタマヤ死後の同派二八二—アラバ二八二—非苦行主義二八三—幼キリンナの崇拜二八三—法主大王と其放逸二八三—アラバ派の經典二八四—此二派の末流二八四—改革派二八五

第七章 西教輸入後の印度教改革時代……………二八七

第一節 概見……………二八七

印度教改革の刺激二八七—改革の運動二八七

第二節 回教の侵入……………二八八

モハンメド以後回教の侵入二八八—回教徒の印度占領二八八—回教徒の狂熱と其運動二八八—回教徒の正統派二八九—回教徒の異流と印度教二八九—蒙古族の侵入二九〇

第三節 カピールの回教的革新……………二九〇

印度教の革新と回教二九〇—カピールの唯一神教的革新二九一—道徳と理性二九二—カピール道者の運動二九三—カピール派の分派二九三—正名派の教理二九四—其他の回教的影響二九四

第四節 シク教……………二九五

ナーナク二九五—ナーナクの信仰二九五—ナーナク派の教師崇拜とシクの名稱二九六—師の金口二九六—シク教の傳統と其團結二九六—第四ケルの軍團的教練二九七—シク教團と帝王との衝突二九七—第十ケルの狂熱的運動二九八—シク軍團の末路二九八—九八

第五節 アクバル大帝の新宗教……………二九九

回教徒中革命の希望、二九九—鎌倉者運動、三〇〇—ムハラークと司法者、三〇〇—ア
ルフツル、三〇〇—司法者の服従、三〇一—アクバル帝が寛大包容の事業、三〇一—ア
バル帝の宗教的會合と其新宗教、三〇二—アクバルの「神一君主」説と太陽崇拜、三〇四
—アクバルの折衷的傾向、三〇四—アクバルが宗教の影響、三〇五

第六節 基督教の輸入と其事業……………三〇六

古代印度の基督教、三〇六—葡萄牙人の羅馬教とキリスト派、三〇七—メソイトの宣教、
三〇七—メソイト派と羅馬教、三〇八—ルーテル派の新教、三〇九—没禮派、三〇九—英
國の基督教、三〇九

第七節 印度教中の新運動……………三一〇

印度教徒の改革と其結果、三一〇—那羅延派、三一〇—後の那羅延派、三一〇—正名派の
復興、三一〇

第八節 ラームマフンロイの改革……………三一二

改革者ラームマフンロイ、三一二—ロイの幼時、三一二—ロイの宗教研究、三一二—ロイ
の唯一神の信仰、三一三—カルコマに於けるロイ、三一三—梵教會の成立、三一四—梵教
會の信條、三一四—ロイの基督教と婆羅門教とに對する態度、三一五—ロイの流英と其

死、三一五

第九節 梵教會の成立發達……………三一六

ロイの繼承者アヘンドラナートと其七信條、三一六—根本梵教會、三一七—吠陀に關す
る異論、三一七—七信條と四根本主義、三一七—梵教會内の社會的運動、三一八—宗教改
革と社會的運動の密接、三一八—社會改革の主動者、三一九—ロイが改革の實行、三
一九—婚姻制度の改革、三一九—ロイの分裂、三二〇—印度梵教會、三二〇

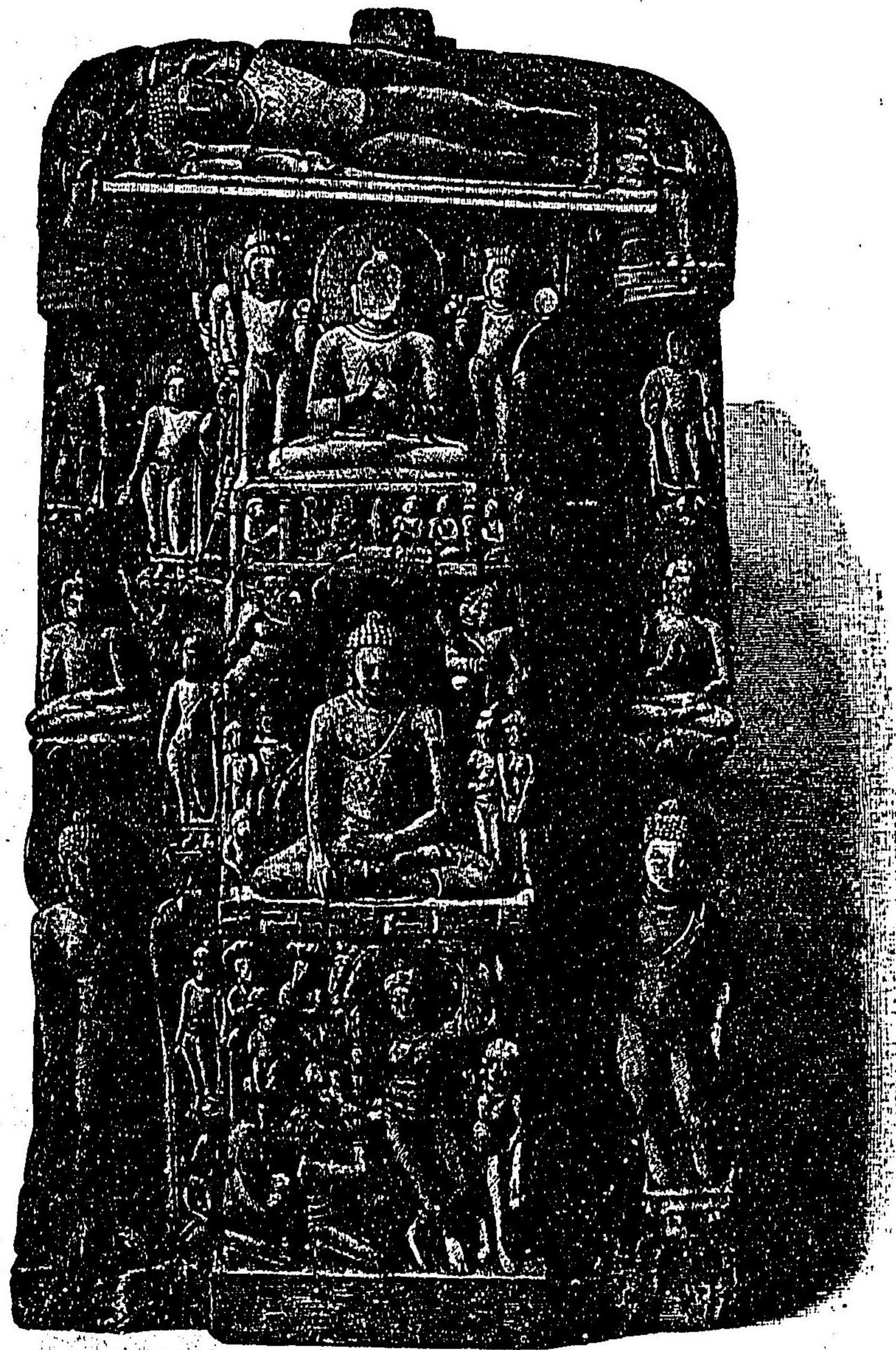
第十節 ケシャブチヤンダルセン以後の梵教會……………三二二

印度梵教會の大會、三二二—センの信條、三二二—センの運動と印度改革協會、三二三、
婚姻條例の發布、三二三—梵教會の濫溺的傾向、三二三—センの崇教、三二四—センの專
横と普及梵教會、三二四—センの嚮策、三二四—新包容、三二五—センの死、三二五—セン
ムネール、三二五

第十一節 印度宗教の現状……………三二六

四千年經過の結果、三二六—印度教の迷信、三二六—印度教の勢力、三二六—婆羅門の宗教、
三二七—回教の現状、三二八—其他諸教の現状、三二八—羅馬教及新教の現状、三二九—
梵教會の現状、三二九—アーリヤ教會、三三〇—印度人口の宗教別、三三〇—印度宗教の

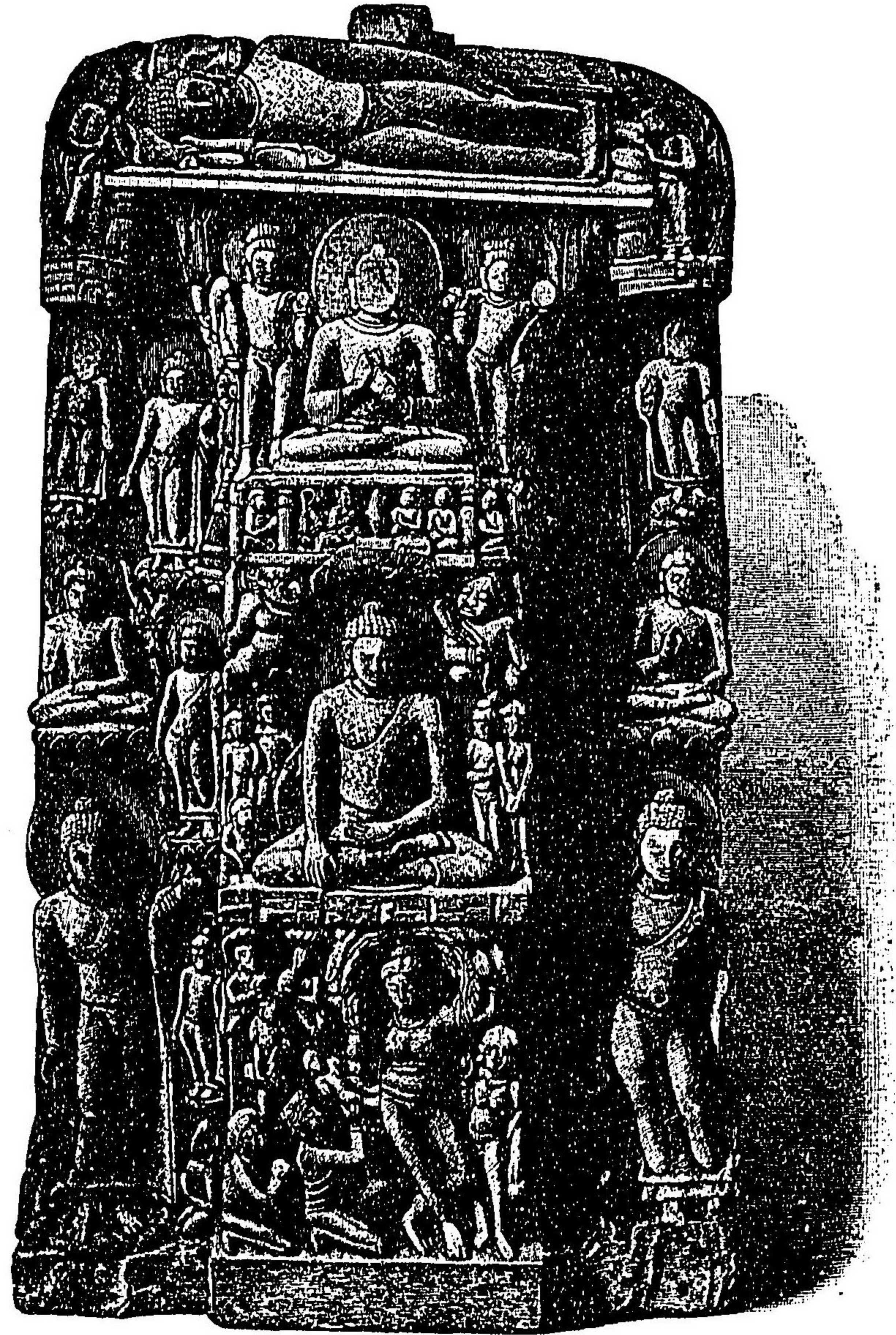
目次



目次終

梵語字母表

將來三三一



目次終

梵語字母表

將來三三一

此開卷に掲げし寫真より模刻したる圖は、近頃メナムの近傍サーナムに發見せられたる浮彫石碑なり其の表する所は釋迦佛の一生中の四大事にして最下の一段は其の藍毘尼園にて母后摩耶の右脇より生れしなり、次は其が魔王魔女の強迫誘惑に動かしして菩提樹下に端坐思惟終に成道せるなり、其次は佛が樹下成道の後鹿野園にて始めて法を説きしなり、最上は即其が跋提河畔入滅の相を示せり、此四回の出來事は佛者が夙に神聖として崇重せし所なり、故にハリー大般涅槃經に曰く

Imāni kho ānanda cattāri saddhassa kulaputtassa dassaṅgāni Samvajanīyaṅāni, āgamissanti kho ānanda saddhā bhikkhubhikkhuniyo upāsaka-upāsikāyo, idha Tathāgato jāto ti pi, idha Tathāgato anuttarāni sammāsambodhim abhi-ambuddho ti pi, idha Tathāgato anuttarāni dhammacakkam pavattitaṃ ti pi, idha Tathāgato anupāpīsesāya nibbāna-dhānyā parinibbuto ti pi. Ye hi keci ānanda cetiyacārikāni āhīndanta, pasannacittā kāmaṃ karissanti sabbe te kāyassa bhedaṃ pīṇaṃ maraṇā sugatim saḅgaṃ lokam uppijessanti.

方等泥洹經(明藏駒帙十卷一右亦いふ)

又族姓子族姓女所當追念爲有四事、一曰佛爲菩薩初下生時、二曰佛始得道妙正覺時、三曰上頂說經轉法輪時、四曰棄所受餘無爲之情般泥洹時、當瞻思此念、佛生時福徳如是、佛得道時神力如是、轉法輪時度人如是、將滅度時遺法如是、次中末時有思念此、起意行者皆生天上、

長阿含經卷四(明藏習帙四卷九右亦云ふ)

諸族姓子常有四念、何等四、一曰念佛得生處歡喜欲見憶念不忘生戀愛心、二曰念佛初得道處歡喜欲見憶念不忘生戀愛心、三曰念佛轉法輪處歡喜欲見憶念不忘生戀愛心、四曰念佛般泥洹處歡喜欲見憶念不忘生戀愛心、阿耨我般泥洹後、族姓男女念佛生時功徳如是、佛得道時神力如是、轉法輪時度人如是、佛臨滅度時遺法如是、各詣其處遊行禮敬諸塔寺、已死皆得生天、

蓋し佛徒の信仰は始此四時に於ける佛を憶念するに止まりしに、後漸く此四處を巡拜するの功徳を信し、終には一々此聖地を拜するの功徳を一に蒐めて、此の如き浮彫を生ずるに至りしなり。(一五六頁挿繪後照)

印度宗教史

文學博士 井上哲次郎 閱
文學士 姊崎正治 著

宗教と國民歴史

緒論

宗教は有限なる人類が自己よりも一層偉大なる若くは無限なる者を憧憬する天性に出づ、此故に世界の民族一として宗教を有せざるなく、何れの國民も多少宗教の發達を遂げざりしはなし、然れども國民の賦性、歴史の境遇異なるに從て、或者は美術に長し、或者は特に文學を開發し、又或者は主として工業的となりしが如く、或者は偏に宗教の發達に於て其國民歴史の活動をなせり、吾人若し世界の中に此最宗教的なる國民を求むれば、先づ指を印度と猶太とに屈せざるべからず、此二國民の歴史は殆ど宗教の歴史にして、其社會的政治的活動一として宗教に出で宗教と密接の關係を有せざるなし、猶太人の宗教は天然崇拜の原狀より起りて國民的最

緒論

上神の信仰となり、律法的宗教の道徳を開發し、正義の觀念と不安悲慘の境遇とは、其間に基督教主の大宗教を出だし、其宗教史は盡きざるの趣味を有せり、而して此宗教的たる猶太國民は分散流寓の今日にも、尙其律法的宗教に依りて結合せり、猶太の宗教史は亭々雲を衝く巨柏の如し、大幹茂葉他の群草木をして其風を仰瞻せしむるに足れり、然れども若し之を印度の宗教史に比し來らば、彼のセム民族住地の平沙沙漠として崇高偉大なるも、而も單調冷索の憾なき能はざるに、印度。ア。リ。ヤの宗教史は、其國土が高岳峻峰あり、長江大河あり、草木花卉鬱蒼蓊々、奇獸怪禽其間に馳驅飛翔して、人の耳目と興味とをして應接に暇なからしむるに似たり。印度の宗教史は端を豊富なる構想の天然崇拜に發し、哲學的考察出で、虛形儀式出で、嚴厲慘烈の苦行に解脱の道を求むるあり、放逸の肉欲淫荒に快樂の天界を得んとするあり、陰鬱の沈思冥想は沈痛なる無宇宙論的世界觀となり、疎懶の考察希望は神怪なる神秘説となり、此くの如くにして上下三千餘年廣袤數萬里の印度宗教史は、其中に宗教の形として具らざるなく、説としてなきはなし、印度の宗教史は印度の國土が暖熱豊穰動植物の産に富むよりも一層豊富なり、蓋し印度ア。リ。ヤ民

族の性質元來宗教的にして、又何事をも極端に及ぼすの風あり、其宗教史上の境遇事情に應じて一旦發生せし傾向は、飽くまで之を發達追及して其極端の弊に及ぼさずんば止まず、此故に最も古典の教權を重んぜし印度人は、却て其宗教に於てあらゆる變化を盡したり、最も極端なる禁欲苦行を法としたる彼等は、一方にて肉欲を放恣し、最も師主を尊重したる彼等は、他方にて唯我獨尊的思想を獎勵せり、内には婆羅門教の偉大なる思想系統を養成し、外には佛教の鴻大なる慈光を放ちし彼等は、又一方にては偶像庶物の崇拜、禁厭咒咀の迷信に沈溺して出路を知らず、印度の宗教史は宗教の一切の種類形式の最も完全なる陳列場なり、偉大なる者あり、卑下なる者あり、健全なる者は病的なる者と相連り、如何なる信仰、如何なる儀式も殆ど其中に發見せられざるなし、印度宗教の研究は一切宗教研究の端緒概論となすべく、又其終極歸着と見るべし。

印度宗教は其れ自身にて儼然たる一科の研究なり、其れ自らの中に極大なる價值を有せり、而して眼を轉じて其外國宗教との交渉、及他國に及ぼしたる影響感化を考へ來れば、其須要價值の甚少にあらざるを見ん。

印度言語の研究が言語學の基本となりしと同しく、印度宗教の研究は基督教のみを宗教とする偏見を捨てて、博く深く一般に宗教を研究するの興味を起さしめぬ、即比較言語學の結果は印度人と波斯即イラン民族との親縁を明にし、延びて印度ゲルマン民族間の親縁を發明したると共に、彼等が原始宗教の狀態をも髣髴の間に認むる事を得たり、特に希臘羅馬の神話并に古獨逸民族民間の崇拜の如きは、一々其太古印度ゲルマン時代よりの發生を明にする事を得、印度宗教の研究は殆どアーリヤ民族宗教を研究する中軸となれり。

印度宗教の外國に及ぼせし影響亦甚廣大なる者あり、其希臘初期の哲學との關係は多く學者の豫想する所なれども、今日にては未だ事實的證明を得ざる事なれば、暫く之を措き、希臘後期の哲學、即新プラト^ン派、^山府^哲學の如きは印度宗教の感化を受くる事多く、其分出論、輪廻論の如き皆印度風に養成せられたる者なり、初期の基督教も亦此範圍を脱するを得ず、耶穌其人の厭世的觀念、約翰^の出世間的苦行、皆印度的の形跡を止むる者と見るを得ん、羅馬正教の儀式、例せば珠數、剃髮の如きは、到底印度の外に其源泉を求むるに由なかるべし、歐洲の近世思想と印度との

交渉はシヨベンハウエル一派の思想に於て特に明なり、翻て東方に於ける印度宗教の感化に至りては何人も之を看過する能はざる者あり、佛教の潮流は滔々として西域、西藏、蒙古、支那、朝鮮、日本、南洋、暹羅、緬甸、安南の野を蔽ひて今日尙東方數億の人心を支配せり、佛教と共に若しくは其名の下に印度教的思想習慣は此等諸國に浸潤し、此等諸國の宗教は印度宗教史の知識を缺きては關鑰を失せるに同じき者あり。

宗教研究は印度宗教史を其中軸となさざるべからず、況や千年來佛教の感化に長したる吾邦の宗教研究者に於てをや。

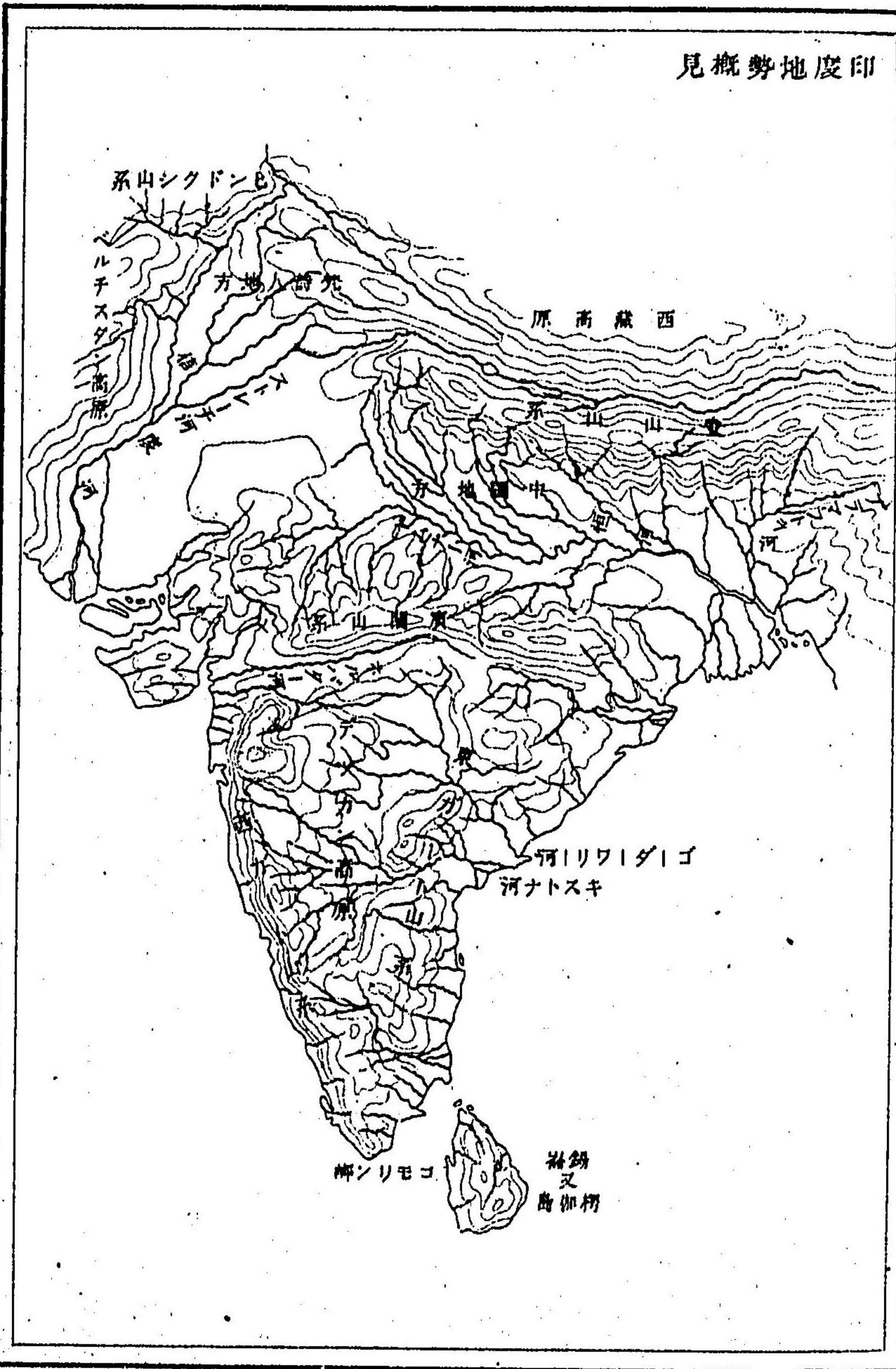
印度の國土及人民

亞細亞の大陸、南の方印度洋に斗出して三大半島をなす、東印度、印度及亞利比亞とす、古來此三半島を總稱して印度と稱したる事なきにあらざるも、今吾人の稱して印度といふは其中央の半島印度なり。

印度半島は恰も舌狀をなして南海に斗出し、北は雪山^{ヒマラヤ}の高峻なる連山を限りて熱

信度の平
原、梵詩
人地方

見概勢地度印



新設の地

六
 帯の豊穰多雨なる廣大の域に擴がる、其地勢自ら四に分れ、之を信度河の平原、恒河の平原、雪山の山地、及デツカン高原と稱すべし、此四區の地方は其位置地勢の異なるに從て、歴史上に各異なる結果を呈し、異時異種なる活動の舞臺をなせり。
 信度河は源をガフル、迦濕彌羅の山中より發し、西部の平原を流れて、其幾多の深流支流と共に沙地を灌溉し、此大なる平原をして不毛ならざらしめ、爲に西方諸國の人民をして此地の豊穰に垂涎せしめ、多くの民族が印度に入り來るの端緒を開けり、即最初のアーリヤ民族も先づ此地に入りて、其最初吠陀時代の舞臺をなし、幾多の吠陀讚歌は主として此地に成りき、此故に婆羅門は此地を稱して梵詩人地方、*ahmarshi-desh*と云へり、印度宗教史の始は此地方にあり、而して印度なる國名も元此河名信度より轉せしものにして、印度アーリヤ民族が此國にありて始めて會せし大河は、即此國全體の名稱となりしなり、加之希臘文化輸入の媒介となりし歴山大王の侵入も、亦回教徒の侵入も、此地の豊穰なりしに因れり、而して後世シク教の起りて一方に雄たりしも、此平原にあり、信度河の印度史に重要なるは云ふを要せず。

信度の平原を限れる東方一帯の丘陵地方を越れば、即恒河の上流にして、此大江が無数の深流を集めて滔々五百里、雪山と賓蘭連山の間を流るる區域は即恒河の平原なり、恒河々畔は即印度の心髓にして、其歴史上の活動は此地方を主として起れり、此故に婆羅門は此地方を中央地方、Madhyadeshaと稱し、婆羅門教は此地方にて其隆盛の極を盡し、哲學起り、佛教興り、阿育王出で、力日王出で、幾多の宗教的活動は主として此地に起れり、恒河は即印度中の印度なり、有名なる寺院重要な聖地は今尙多く此地に存せり、後世の印度教徒は恒河を以て神聖なりとして、此水に投して死するを以て天上に生るるの道と信するに至れり。

雪山連山は印度半島北面の屏障なり、三千米突より九千餘米突の高岳峻峯は、東經七十五度より九十五度の間に蜿蜒兀立し、北は西藏の高原を隔てて遙に崑崙阿爾泰の連山と相對し、南は崢嶸兀突恒河平原を瞰下せり、此一帯の連山地方は峻嶮互塞到底人類の棲息し得る處にあらずと雖も、此連山ありて南印度洋より送り來る水蒸氣を凝結して注ぎ下すを以て、恒河の平原は爲に多雨豊饒なり、然れども此連山の山腰山麓人の住すべき地は恰も他界と遮絶せるを以て、逃亡者の隠蔽所とな

り、一種特異の宗教を發生せり、迦濕彌羅、尼波羅の佛教の如きは即是なり。

恒河平野の南を限れる一帯の山脈は賓。圖。なり、此山脈より南は一般に高原をなし西は西ガート(Ghat)山脈の急斜を以て直に亞利比亞海に迫り、東は東ガートの山腰遠く延びてベンゴル灣に及べり、此高原地方はデツカン即南方地方と稱する者にして、此南印度は一般に三百乃至一千米突の高地をなし、山地森林の風趣自ら北方の平原に異なり、山岳起伏森林密茂の地自ら他より侵入するに難きか故に、印度アーリヤに追はれし原土人は此地方に逃れ來り、幾百年の間アーリヤ的文化及宗教に特立して其信仰習俗を保存したり、印度アーリヤが此地を稱して茂林に埋れりといふも此が爲なり、其後アーリヤの文化南に波及するに及びて、此地は印度教に新分子を注入するの原因となり、近古宗教的活動は多く此地に出でたり、即龍樹が佛教に變化を興へしも、商羯羅が印度教の復興を唱導したるも皆此地方にあり、信度及恒河の平原はアーリヤ文化が根據地にして、雪山并に南地の山地はアーリヤ以外なる文化の發源となりき。

温帯の緩和なる信度平原、熱帯の多雨豊饒なる恒河の平原は、雪山及南地の山岳地

方と共に印度宗教史上の異彩を彩りぬ、而して此舞台に立ちて其歴史的活動をなせし人民は、亦單純なる一民族にならず、印度の宗教史は印度アーリヤ民族を中心とせざるも、亦其變遷は人種的勢力の移動に因れるもの多し。

太古印度の人民は東北の方西藏緬甸より入り來りし黄色人種にして、其支那蒙古的言語尙今日に散在せるものあり、之に次てコラリア種亦東北より入り來り、夙に印度の地に彌蔓したり、其後ドラウダ民族強勢なる團體をなしてパンジブの野より印度に侵入し來るや、先に此國にありし民族を諸方に追ひ退け、豊饒の國を占領し、酋長の下に團結し、鞏固なる農業牧畜的社會を作り、又幾分か貿易建築等の文明を發達しけり、コラリア種は多く森林の靈より幽鬼等を畏怖崇拜し、ドラウダは生産力の大地を蛇として崇拜し、或は生産の威力を表象して男根即リングを崇拜したり、ドラウダはコラリアを壓倒せしも必しも之を敵視せず、相共に印度の地に雜居したり、コラリアは今日に至りては北方の山中及賓圖の東に散在するのみなれども、ドラウダは今日尙至る所に存し、其勢力影響は又展印度アーリヤに及ぼし、行政收税の組織には彼等の遺風存するあり、特に佛教後の新婆羅門教は彼等が宗教

に負ふ所決して少なからず、彼等は決して微力なる一蠻族として看過すべき者にあらざるなり。

紀元前二千餘年の古コラリアとドラウダと印度の國土に住せしに當りて、有して優等なる民族中央亞細亞よりヒンドクシ山頸を踰えて、印度の西北信度河の上流バンジャアの地に入り來りぬ、此民族は今日の歐洲人波斯人等と祖先を共にして、元中央亞細亞オクリスの河邊に居を占め、此頃及びて何故か四方に移住し始めしなり、吾人は此民族を總稱してアーリヤと稱す、アーリヤ民族の未だ分離せずして共に中央亞細亞にあるや、農業牧畜の産業を營み、紡績裁縫鍛鐵の業を知り、家族的關係に於ては既に完全なる者ありき、而して彼等の宗教は即天然の光明現象を神格として拜したる者にして、此等諸神に就きて幾何かの説話を信したり。

此太古に於て既に此く文化を開發したるアーリヤ民族移住の一部は東南に向て進み來り、其一部分は途中西南に接して波斯の地に住してイラン民族をなし、他の一部は益東南に向て今印度の西北隅に現はれぬ、印度宗教史の舞臺は即此に開かれぬ。

印度宗教史の時代

四千年の古印度に侵入し來りしアーリヤ民族の天然崇拜は、印度宗教の端緒にして、爾來奇現變出幾多の變遷を経て今日に至りぬ、其變遷の原因は或は宗教的發達自然の經過に因りしもあり、或は外部の刺激輸入に出でしありて異種異様なり、而して其宗教觀念自身の外に其變遷の因をなせしは他國の如く政治社會の關係に出でし者甚くして、多くは民族の變遷興敗に因て起れり、印度の風土に化せられし印度アーリヤの宗教は婆羅門教となり、釋迦族の中には佛教出で、土人の勢力は終に新婆羅門教を出だせしが如き是なり、今其大勢の遷移に従て印度宗教史の時代を區分せんか左の如くすべし。

- 第一期 吠陀の神話時代 大凡紀元前千年以前
- 第二期 優波尼沙土の哲學考察時代 紀元前千年より八百年の頃迄
- 第三期 婆羅門教固成時代 紀元前八百年より五百年の頃迄
- 第四期 佛教の革新時代 紀元前五百年より紀元の頃迄

第二期

- 第五期 宗教混亂時代紀元より紀元後九百年の頃迄
- 第六期 印度教確立時代紀元九百年より千二百の頃迄
- 第七期 西教輸入後印度教改革時代千二百年より現今迄

吠陀の神話は即印度アーリヤ太古の天然崇拜的信仰にして其信度の上流に在りし時代に出づ單純に天然の光明現象及物素を神格として崇拜し之を祭祀し之に犠牲を供し諸神の歡心を買て其助力を仰がんとしたるのみ然れども此中既に僧侶制度あり従て彼等の思辨考説が人民の信仰を支配せしは明なり。

第二期

第二期に至りては此思辨的傾向大に開發し來りて僧侶の一族は深遠なる考察に耽りて幽玄なる哲學組織をなしぬ其神秘的萬有神の哲學は優波尼沙土なる典籍に依りて今日に存す此時代に紛起したる諸哲學派は實に印度に於ける哲學思想の高潮をなしき。

第三期

一方にては哲學的の諸説此の如く競起したると同時に他方にありては所謂婆羅門教は太古の宗教より脱化して漸次其教權を固め宗教の司管者僧侶たる婆羅門族は民族中最高の位地を占めたり彼の社會的の制度を確立したる摩拏Manu法典は

第四期

此時代に成りし者にして此第三期は婆羅門の階級制度を基としたる社會的宗教道德の時代なりき而して此の如きの宗教道德か益鞏固に成立せし後は一切の者皆化石的となり信仰にも精神なく道德には背人情の他律のみ出で實際に民衆を教化し之に安立を興ふる能はずなりぬ。

第四期は即佛教が婆羅門教を革新し其他闍伊那瑜伽等の諸派出でし時代とす蓋し社會的の腐敗、宗教上の偏見は終に一大偉人の洗滌を要し刹帝利族より出でし偉人釋迦牟尼名はガウタマは此時勢の必要に迫られて立ち新に無我の大道を宣布し戒律的清淨の佛教を興しぬ此新宗教は忽にして淨行士の團結となり大に王者の尊信を受け平民の歸依を買ひ獨り自ら三族の上に超然たりし婆羅門族をして顔色なからしめ摩揭陀國を中心として五印度に傳播せり此教の起りしは實に西曆紀元前五世紀の中葉にあり此より佛教の教勢は駁々として進み紀元前三世紀の頃阿育王が之を保護し四方に傳教師を派し又其有名なる宗教的法令を出したる時は實に佛教隆盛の頂點なりき佛教隆盛の間には婆羅門は屏息したるも決して全く其餘勢を失ふに至らず機あらば其古に復せんとて陰に陽に勉むる所あり

第五期

りき者那教は佛教と傾向を同じうして同時に出でし新運動にして、後世其勢力の及びし處少しとなさず、瑜伽派亦此期に出でし婆羅門的精神の新運動なりとす。第五期には諸種の宗教相對峙し相混淆し、信仰思想界は紛々擾々の態を呈しぬ、佛教は稍衰へ婆羅門教は漸く復古の勢に向ひしも、數百年の間は兩者とも大なる隆替なかりき、而して此間兩教對立の結果は各其特質を維持擴張する能はずして、相混淆抱容するの傾向を生し來り、加之ドラウダ等土人の信仰慣行はアーリヤ人の中に潜潤し來り、又西北に侵入し來りし月氏族の勢力も之に加はり、教界混沌の極を極めぬ混沌の中にも佛教は漸次其立脚地を失ひ、新時代の婆羅門教は漸次之を攝容して新しき印度教となりぬ。

第六期

第六期の始をなしたるは八世紀のクマールラと商羯羅たる二人の婆羅門なり、彼等の熱心なる破邪顯正の運動は、一方にては吠檀多の宏大なる哲學を大成し、一方にては外道に痛切なる打撃を與へて印度教の面目を一振したり、商羯羅が印度教刷新の結果は又印度教の中に存在せし異種異様の傾向に各定形を具えて分化せしめ、印度教の諸分派は茲に明白に成立しぬ、印度教の分派成立して定形固成する

第七期

や、印度人の性、極端に馳せ易き其弊害病態亦百出して止る處を知らず、腐敗爛壞復收むべからざらんとせり、改革の要は再び印度教の頭上に落ち來りぬ。

第七期は即印度教改革の企圖が處々に起りし時なり、而して其革新の勢力は内部より湧出せし者なきにあらざるも、主として外部即西來の回教及基督教に促されて起りぬ、回教の精神を以て印度教を洗滌せんとする者にカビール、ナーナクあり、新時代の阿育としてはアクバル大帝あり、基督教の心髓を咀嚼して印度教真正の精神を復興せんとせし者に梵教會あり、現時に至れり、然れども印度の宗教は肥大にして病毒を含める老人の如く、病既に膏肓に入て容易に治すべくもあらず、迷信雜行は滔々として其宗教界に洽し、其狀恰も我國の宗教界が疲癯煩悶手を揚げ足を動かすも、全身の建康容易に刷新し難くして新鮮の光明路何れの時に到達せらるるやを知らざるに似たり、偉大なる宗教洗滌者を待つ事印度も我邦も少しも異なる事なし、讀者須く其太古よりの宗教發達に注目して病根の救治を講して可なり。



信度平原
に於ける
アイリヤ
民族

第一章 吠陀神話時代 第一節 當時の状態并に吠陀の傳來

オケリスの河畔を漂ひ出でて東南に向ひしアイリヤは、今やヒンドクツシを越えてカフル地方に其新住所を占めぬ、吠陀の最古の歌は彼等がカフルの北カイバル峠にあるを示せり、彼等は此より東に進みて大河に遭ひ其大にして海の如きを以て之を信度。Sindhu 即海と稱し、東に延びて其深流の間に住し、此等河流に潤はさるる沃地に家畜を放ち、又農業を營みぬ、吠陀の讃歌の古きものは多く此地にて歌はれしを以て、彼等は後此地を稱して梵詩人地方といへり、彼等は此等河流の恩徳を讃嘆感謝しては、「富を興ふなる榮譽の信度河を歌ひ或は深流滔々此大河に注ぎ洋々たる大河か母牛が犢子を率ふるに似たるを見ては、七河。流。Sapta-sindhavaを讃誦せり、彼等は此時に當りては、天然の恩恵に浴して其高恩を感謝し、時々の不運は天神に祭りて之が解除を求めしのみ、純朴の樂天は彼等の状態なりき。

七河地方より延びて彼等は雪山の西麓に出で、終に恒河の上流に及びぬ、吠陀の最

當時の宗教

古なる梨俱吠陀。Rgveda は主として此間温帯清和の天地に天然光明現象を崇拜せし和樂暢達なるアイリヤの觀想信念を歌ひし者なり、而して吠陀の宗教的觀念は多く此梨俱吠陀に依りて代表せらる、梨俱吠陀は世界宗教史上最も古く又最も純粹に天然崇拜の原始宗教を吾人に傳へたる者なり。

梨俱吠陀

梨俱吠陀とはリク。Rik 即讃歌の聖典にして、アイリヤ民族太古の詩人等の其信念に動かされて其崇拜する諸神を讃嘆したる讃歌を集めし者なり、其讃歌を稱して曼特羅。Mantra 即讃誦と稱し、梨俱は即千二十八の讃誦を編集したるものにして、又梨俱集録。Riksamhitā と稱す、此多數の梨俱讃誦を集録したるは一時の事業にあらずして、漸次數百年の星霜を経て成りしものなり、其十卷 Daga-Mandala の順序は即其か漸次に集録せられし前後を示せり、此を以て其第一卷より十卷を順次研究すればアイリヤ民族がヒンドクツシより七河地方恒河の上流に及びし跡を追求するを得べし。

吠陀の集録

吠陀聖典は數多しと雖も其最も根源的價值あるは梨俱吠陀の集録に若くはなし、之に次て編輯せられし集録三あり、薩馬。Saman 耶柔。Yajus 及阿他婆。Atharvan 是な

第一章 吠陀神話時代 當時の状態并に吠陀の傳來

り、通常此四集録を總稱して四吠陀 Caturveda と稱す、四吠陀は印度聖典の最貴重なる根本となりき。

倭馬吠陀

倭馬とは唱歌の義にして、梨俱集録中の蘇摩 Soma 祭祀に關したる讚誦を集録したる者なり、此故に此集録は祭祀儀式の便宜の爲に集めし者にして、自ら梨俱集録と趣を異にし儀式の關係以外には特別に研究の價値ある者にあらず、

耶柔吠陀

耶柔集録は犠牲儀式に用ふべき歌詞を集め、又之に關して儀式に關する解釋を施せし者にして、耶柔とは犠牲の義なり、此集録は供犠に關して多くの家傳を集めしを以て名あり、此集録に黑白二種あり、二者其材料に於ては同種類に屬すれども、其編輯の體裁を異にし、黑耶柔にては歌詞に次て直に儀式上の解釋を施し、白耶柔には解釋は全く別冊のフラーマナに譲れり、蓋し黒は白に次て集録せられし者にして特に儀式に當りて歌を誦讀する僧侶の爲にせし者なり。

阿他婆吠陀

阿他婆とは咒詞なり、阿他婆集録は梨俱集録に次て集録せられし者にして、彼には甚稀なる咒詞、即善神の助を呼び、悪鬼病魔を退け、其他一切日常の幸を招き禍を拂ふべき咒詞を集めたり、中には血止めの詞あり、嘔止めの詞あり、又は博奕に勝利を占むる詞、戀を成功する詞等あり、此類の歌は梨俱の中に存せざるにあらざるも、特に咒詞としてあるにあらず、只其第十卷には此類の歌稍多くして其時代の阿他婆と相近きを示せり、阿他婆は清淨雄大なる梨俱讚誦の天然觀の裏面に入りて、吠陀時代の俗間の慣行及僧侶の辨説を集録したる者にして、梨俱に次ぎて研究すべき者なり。

集録以外
の吠陀聖
典

吠陀には四の集録に附録して、儀式の楽として僧侶の爲に諸の傳説解釋を記したるフラーマナ Brahmana 及フラーマナに就きて諸規則を指定したる修多羅 Sutra あり、然れども此等は純粹に吠陀の神話に附屬したる者にあらざるを以て、神話時代の宗教を見るには暫く之を措く。

吠陀の傳
來

吠陀の讚誦歌詞は、始諸の詩人 Rishi 之を作り若くは宣布し諸家の僧侶之を集録せしより、常に口々相承けて今日に傳はりき、彼等は此等の讚誦歌詞を非常に神聖なりと思惟せしが故に、之を記憶誦するを以て無上の義務又正行なりとし、父子師弟相承くるに當りて一言一句を忽にせず、其一をも誤り傳ふるは彼等の大罪と信せし所なり、梨俱集録のみにても一萬句十五萬言の大部を誦せしは、今日にあ

りては寧ろ驚くべきに似たれども、婆羅門の徒は、筆録の術ある今日すら之を筆録するは、却て正確と神聖を害する者なりとして、之を誦するを見れば古代の信者が、此大部の誦に一生を委ね、一字一句を遺さずして數千年の永き口々之を傳承せしは少しも怪むを要せざるなり、吠陀以外の聖典に於ても亦皆然り彼等が筆録以外に此聖典を口傳せしは、却て熱氣と水氣の侵害多き印度に此古典を無難に保存するを得たり。

第二節 吠陀神話の宗教

吠陀の神話はアーリヤ祖先の宗教と同しく、一切の光明ある天然現象及物素の中に何が偉大優秀の存するを認め之を神として拜せり、即彼等は直に天然を拜するにわらず、その中に存在する光明が普照炫燿無限の空間を照らすの莊偉なるを驚嘆し、又其が人類に恩恵を下だして或は忌むべき冥暗を驅り、或は人を照らして之を快潤ならしめ、或は人に温熱を與へて嚴冬の苦を和らぐるを感謝して之を崇拜し、惡を退け善を來さん事を祈りしなり、此を以て彼等は此神格を稱するに炫くな

吠陀の神格提婆

るデーヴ Div なる動詞より來りし名詞提婆 Deva を以てしたり、即日本人が上を神格とし、支那人が天を神格とし、セム民族が強力なるエルを神格とせしが如く、アーリヤ民族は光明を神格とせしなり、希臘のテオス、羅甸のデウス、佛語のデユ皆印度人の提婆に同じ。

提婆の宗教的意識

印度アーリヤの光明を神格として崇拜するや其究竟の動機は單一なる光明を拜するにあれど、光明の發表する所には其如何なる現象たるど如何なる物素たるどを問はずして、各其發表の方法方面に従て之を崇拜し、敢て一現象一物素のみに固着せず、彼等は光輝充滿せる大空をも拜し、空中の電光をも提婆とし、人の體內に入りて熱を與ふる興奮劑にも祈禱せり、彼等の眼には天然は盡く活動し、此活動光明は即神格として拜すべき者なり、其宗教的意識は單一の崇高雄大なる神格を憧憬しつつも、直に此至大なる神を把持する事能はずして、其諸の現象物素に發表するを拜せり、即唯一神を多方面より拜せるなり、故に之を稱して單一神教 Henotheismus とすべく、天然の中に神格を認むるを以て天然の單一神教 とすべし、彼等は諸の光明現象物を各提婆として拜せり、然れども彼等の拜する所は單一の神格な

り、一現象一物素に神格の存在を認めて之を拜する時は、此一現象一物素に全神格を拜せるなり、敢て他の現象物素を顧慮するを要せず、又他の現象物素に神格を拜せば其他は之を忘れ去れり、此故に彼等が依て以て神格の發現を認むる所の現象物素は時々の状態に依りて變轉し、變轉すると共に異なる現象物素は其時の提婆となり、最も崇拜し祈請すべき提婆となるなり、拜する所以は一にして、拜する者は變轉交替す、此故に彼等の宗教的意識を稱して交替神教 Kathenotheismus と稱すべし、光明か唯一の神格なる點より云へば單一神教なり、其崇拜する物象が多數にして時々變換する點より云へば交替神教なり。

崇拜の動機と其變

吠陀時代人民の信仰は此の如くなりき、而して其崇拜の動機を尋ねれば、一に自己の幸福を求め災禍を退くるにあり、供物を捧げ歌詞を誦すれば、偉大にして恩惠威嚴ある提婆は、我を助けて福を與へ禍を退くべしと信したり、此を以て彼等の主として尊信する提婆は時と共に變し、此民族が住せし土地の氣候風土の必要に従て變遷したり、彼等が中央亞細亞の温帶地に在りし時は光明清和雲霧なきの大空を仰きて提婆となし、寒威を防ぎ食を調理する火を拜したりき、其後彼等が印度に下

りて熱帶酷熱の天を戴き、黒雲油然として起り雷雨一時に炎熱を洗ひ去るを徳とするや、彼等は驟雨を提婆として最も之を尊重したり、後儀式漸く複雑に、僧侶制度益開發するに及びては、彼等は提婆を祭る祭器を提婆とし、終には祭祀を司る僧侶其物をも提婆となすに至りぬ。

吠陀時代の崇拜は人民の住地を移すと共に變遷しぬ、而して此變化は其第一卷より十卷を漸次追求して之を見るを得べし。

第三節 吠陀神話

一、最古の讚歌、天上諸神

アデテ

吠陀の神話中最も根本的の神格として吾人の注意すべきは天空の無限を表したるアデテ Aditi なり、空に限り地を蔽ひ雲霧を藏し星辰を養へる無限茫洋の大空は、太古印度人の感を刺激して一種茫漠たる無限として讚嘆せられたり、彼等は抽象的思考に依りて無限を崇拜せしにあらすして有形眼前の茫乎たる無限を拜せしなり、此を以て或は之を太陽の母と呼び、梨俱八卷四七の九、或は之を以て一切に

均しとせり。

アデテは天なり、アデテは空氣なり、アデテは母、父、子なり、アデテは一切の神、五の種族なり、アデテは一切の生れたる者なり、アデテは一切の生れん者なり。(梨俱一

卷八九の一〇)

天空の中には光明出で暗黒來り、日月行き星辰輝き、一切天上の光明現象は此中に生滅す、即是れ此神が一切の母と稱せられし所以にして、印度人は後に此神に多くの子ありとして之をアーデトヤス Adityas と稱したり、而して之に對して、光明なき下界の地をデテ Diti 即有限と稱し、其子にダイトヤス Daityas ありとせり、蒼空の普曜無限が如何に此太古人民の崇拜心を起さしめしかを知るべし。

アデテは一切の母なり、然れども此は人格的一神獨存して一切の物を創造せりと思想に非ず、諸の光明現象此中に起伏するを以て之を母と稱せしのみ、故に印度人はアデテと同じき大空を、時にはドヤウス Dyaus なる天とし、時には婆樓那 Varuna なる夜の大空を稱せり、ドヤウスは地なるプリチツ Pritvi と夫婦として稱せられ、婆樓那は晝の大空なる密多羅 Mitra と雙生兒なりといふ。

アデテの子

アデテの性質

婆樓那と密多羅は共に大空なれども、婆樓那は特に夜中一切を蔽ふ大空にして、密多羅は晝間に光明輝ける大空を仰き稱せし者の如し、而して此二者は共にアデテの子にしてアーデトヤスの中に屬す、印度人はアーデトヤスを讚して曰く、

彼等には右もなく左もなし、前も後もなし、彼等は點頭せず眠らず、彼等は一切に普く、遍一切の光明なり、彼等は人の心に於ける善をも惡をも知り、正直の人と欺騙の人とを分つ、彼等は罪過を嫌ひて之を罰し、惡魔を防ぐ。(梨俱二卷二七)

所謂アーデトヤスの數は或は六或は七、八、十二と稱して一定せず、然れども彼等は皆大空の光明現象にして空漠の中に光を放ちて人間を照臨せる者なるは右の讚歌にて明なり、アーデトヤスは即波斯のアンシヤスバンドと同じき神にして、元は一天空を表したるが後に種々の方面よりして種々の名稱性質を得て斯くは分化せし者ならんのみ、而して婆樓那、密多羅の如きは其重要なる者なりき。

婆樓那に關する讚歌を見るも、吠陀の宗教思想が交替神教なる事は愈明なり、其密多羅と伴侶たるや、婆樓那は天地の主、世界の監視にして、又雨を下界に注ぐ神なり、其アーデトヤスたるや、光明と真理の主にして、惡害の排除者たり、又時としては婆

婆樓那

鳥舍師

者 Nasatyan と稱して尊崇せり、黒耶柔吠陀六卷四九には、此神か病を醫する爲に一度は不淨に陥りしも、後再ひ之を脱却したる事を載す、然れども、此は末世婆羅門教の信仰を混交したる者にして、太古の信仰にはあらず。

二、鳥舍師 Dshas は美少婦なり、天の戸を開き、夜を追ひて人畜を新鮮快活にす、又此女神は紅色の牛若くは馬車に乘し、諸神を蘇摩會飲に伴ふと、鳥舍師は希臘の紅色の指を有すと呼ばるるヘオス女神と同じく、朝暾の美色を表したる女神なり、鳥舍師は老ゆるも亦直に其壯年に復し、常に其美色を保つと、多くは富を得ん爲に此神を祈る。

太陽神

三、太陽には數名あり、通常は蘇利耶 Surya なり、太陽の莊麗を表せんには多くサツ井タル Savitar の名を用ふ、此は育成する語源より出でたる名なり、又は天上の運動者の義なりともいふ、サツ井タルは金色の神にして、眼、手、舌皆金より成り、金甲を着し、金車に乘し、白褐色の脚を有する光輝ある馬に之を引かしむ、サツ井タルは此車にて諸處を馳せ、生物に生氣を與ふ、又悪行を惡み、羅刹、惡鬼の類を逐ふ、ガイヤトリ Gayatri と稱して此サツ井タルを拜する短歌あり、其文に云ふ。

我等は神聖なるサツ井タルの莊麗なる光輝を沈思す、彼は我等の知力を増進せよかし。

と僅に十語の短歌なるも、此ガイヤトリは後世婆羅門教の重要な祈禱となり、又之を一切吠陀の母なりと稱するに至れり、此句は蓋し梨俱三卷六二の三に出でし者ならん、然らば其作者は一刹帝利なるウ井シワミトラ Vignamitra なり。

太陽の光輝育成の力は此の如く蘇利耶及サツ井タルにて表するも、一方にて日光の溫和なる慈愛的動作はプーシヤン Pushan にて表せらる、此神は家畜其他人の財産を保護し増殖し、又旅人を導き、竊盜強盜を遠け、又死者の行路をも嚮導す、プーシヤンは又善く牛羊を御して車を馳す、此神は時には因陀羅と共に祈らるるか故に空中の神とも見るべく、其司る所は確乎たるには非ず。

太陽に尙一の名あり、毘溼拏 Vishnu 是なり、毘溼拏は吠陀にては重要な神ならざるも、後世の婆羅門教にては非常に重要な位置を占むるに至れり、此神三步を以て全宇宙を涉り、其中にて天上を選び因陀羅と共に之に居る、又摩拏 Manu の子孫なる人類に地を與へて安住せしむるは即此神なり、日光を以て時を正し、天時の進歩を

調ふる亦此神の業なりと、後世毘溼拏か維持保存の神となりしは此が爲ならん。

二、空中諸神

空中諸神の出現

中空は天上と異なり、悪魔羅刹 Rakshasas 阿修羅 Asura の類ありて徘徊せり、諸神は之と闘て之を驅逐せざるべからず、而して諸神は人類の捧くる供物に依りて自己の力を充實し、依て此健闘に従事す、其奏効悪鬼を追ふや供犠の人に恩恵を下し財寶を賜ふと、是れ皆空中水蒸氣に關する現象より出でたる觀想なり。

抑印度人の恒河河邊に居を占むるや、日光炳烈炎熱燒くが如き氣候に住するが故に、雲霓雷電は其最も鶴首希望する所にして、沛然たる驟雨の如きは之を大恩恵と見るに至れり、此故に、太古に尊崇したる太陽等諸神は從來の如く之を渴仰せず、空中に聘馳して雷雨を下す諸神は特に之を尊敬禮拜するに至れり、而して此變化と共に神格は漸く人間に近く有形的の形象を有するに至れり。

因陀羅

空中諸神の中最多く渴仰を得たるは因陀羅 Indra なり、因陀羅といふ語義に就きては數説あり、或は有力者の義なりといひ、或は鳴響なりといひ、或は注雨者なり

といふ、或は之を蒼空なりと謂へども、其實は驟雨の神なれば、蒼空の義には非るべし。

因陀羅は毘溼拏と嵐の神なるマルツ Marut とを従ふと雖も、獨力を以て悪鬼を降伏し以て人類を保護す(梨俱一卷一六五)因陀羅が降伏する悪鬼とは即炎熱旱魃の謂にして、其一人なるウリトラ Urita は水を雲に包括して出さず、又パニ Pāni は此雲を巖中に隠蔽す、因陀羅は其電光を以て巖を碎き、水を人界に注ぐ、因陀羅は金鬘孔雀毛の赤馬に車を驅りて、隼鷹の如く空を馳す、人此赤馬を走らしめんと欲せば、宜しく祈禱をなすべし、因陀羅は弓矢を携へ、長槍を提げ、電棒を發射して悪魔と闘ひ、又大綱を張りて敵千人を一時に捕ふ(梨俱八卷八の七)其電光を驅り雷鳴をなすや、天地震動し、魑魅皆屏息し、其電棒を作りたるトワシトリすら尙戰慄すといふ(梨俱一卷八)

因陀羅は天地の主にして、山を高くし、水を流注し、地を支へ、天を撐げ(梨俱二卷一七の五)又諸神人類を導き、天地を濶歩す(六卷三〇の二)其體絶大なり。因陀羅は恒河の上流に移りし印度人に取りては最第一の神となれり、然れども其

性質全く國民的にして世界的性質を帯びず、印度國民の神なり、故に其善に與し惡を伏すといふも、**アーリヤ**を保護して非**アーリヤ**種族を敵とするのみ、因陀羅は健闘伏敵の神なり、然れども單に勇者たるに過ぎずして婆樓那が有する如き精神的に傑出し道徳的に偉大なる神には非ず。

因陀羅は其生れたるときに蘇摩を飲みしと、而して其惡鬼と闘ふには必ず人の供する蘇摩を飲みて自己の力を養ふ、故に之を供すれば因陀羅は來りて渴せる牛鹿の如く之を飲む、梨俱十卷一一九に依れば、因陀羅は蘇摩を飲み了りて左の言をなすと、

余は誠に牛馬を與へんと決心せり、余は蘇摩を飲みき、

余のなしたる飲酒は強力の風の如く、余を奮はしむ、余は蘇摩を飲みき、

余のなしたる飲酒は速なる馬か車を追ふ如く、余を奮はしむ、余は蘇摩を飲みき、

讚歌は牝牛が愛する憤に行くか如く、余を促す、余は蘇摩を飲みき、

余は、讚歌を心中にて、大工が木片を廻すが如く、廻はす(賞味)余は蘇摩を飲みき、

以て、如何に因陀羅を崇拜する人民が、其恩恵を渴仰し、又如何に蘇摩供物に依りて

委由

其歡心を買はんと勉めたるかを見るべし、又神格の大に人類に近けるも此に依て見るを得べし。

因陀羅の從屬に幾多の風神雷神あり。

婆由 **Vāyu** は風なり、因陀羅に從屬し、又時には獨立して他の車にて馳す、後世には

此神を **वीत** **Vata** と稱せり、**वीत**は諸神の精神にして世界の源泉なり、人は其

音を開くも其形を見ず(梨俱十卷一六八の四)。

風神の中最猛烈なるは樓陀羅 **Rudra** 即咆哮者にして暴風の神なり、能く人を害し

禽獸を傷ふ、故に人の最も恐怖する所なり(梨俱一卷一一四)然れども此神又千の醫

方を知り、知識あり賢明にして光明を與ふ、此神には常に供物を供して人に怒らざ

らん事を祈る。

樓陀羅は其妻 **प्रिन्धि** **Prithi** との間に數多の子 **मर्त** **Mart** 及樓陀羅等を生む

り、其數は二十七なりともいひ、又は六十の三倍なりともいふ、此數多の神は軍裝し

て一群をなし、因陀羅に從て戰鬪に従事す、

波樓闍尼耶 **पारिज्या** **Parjanya** は即雲なり又雨なり、此は蓋し因陀羅以前にありし神なる者

樓陀羅
其從屬

の如し。

三、地上諸神、後世の讃歌

堤婆は光明の義なり、故に神の本體は光明にて發現す、然らば地上にて人工にて發する光明、亦天上の光明と同じく神格ならざるべからず、此に於て人は神の者を發するの力あり、諸物體亦神のとならざるべからず、印度の神話が漸次天上より空中に、空中より地上に下りたると共に、其宗教思想は萬有神教に歩を進めたりといはざるべからず。

阿姑尼

火神を阿姑尼 Agni と云ふ、倭馬吠陀一卷一に云ふ、

阿姑尼を、僧侶は手にて擦りて、二つ合せたる木より生みたり、

兩つ木の中に、母の胎内にある如く、財寶成育者(火)は息ふ、

梨俱一卷一二に云ふ、

家の賢明なる守護者なる、壯年なる、其口にて供物を食ひ盡す神聖者なる阿姑尼は阿姑尼より燃さる。

是れ皆自然に火の燃ゆるを歌ひし者なり、又云ふ、ウヰ井ヴスプトの使者マータリシワム Matarivan 即風は阿姑尼を天より誘ひ來りしと、又傳ふ、諸神阿姑尼を人の祖なる摩拏に與へしと、又云ふ、アトハルヴなるリシ其木中に潜めるを見て摩擦して之を呼出せりと、因陀羅二個の石を取りて其間に阿姑尼を生したりと、梨俱二卷一二の三、又は阿姑尼はドヤウス(空)とプリトヒヰ井(地)の子なり、三卷二の二、朝暾より生れたり、七卷七八の三、又は因陀羅と毘溼拏より生れたり、七卷九九の四、阿姑尼は親を有すれども亦自ら數多の子を有す、二卷六九の二、阿姑尼には天、地、水の三源あり、十卷四五の二、阿姑尼は生れて直に其兩親を食ひ盡せり、十卷七九の四、彼を捕へんは甚難し、五卷九の四、彼は清淨なる乾酪を食とす彼の成長は甚速なり、十卷一五の一と、梨俱吠陀一卷五八に云ふ。

不斷に少壯なる、速に木を食ひ盡す阿姑尼は、其食を取て起てり、飄々たる馬の如く、彼の左往右往に馳するを見る、天の高處に彼の聲あるを聞く、風に煽動せらるれば、彼は焰を吐き、動き易き力を出し、高聲を發して容易く木を移り行く、阿姑尼よ、汝は牡牛の如くに森樹に突入せんには、汝が路は暗し、汝が紅焰を携ふる間の

みぞ汝は不斷に少壯なる立てる者、動く者は皆飛行する阿姑尼を怖る。阿姑尼は實に神人の間に立てる神なり。

蘇利那、密多羅皆阿姑尼の成生せる所なり、而して阿姑尼は又天上の光明を地上に管する神なり、故に夜間諸神(太陽等)が在らざる間、惡鬼横行すれば、阿姑尼は警戒を加へ、其矢を以て魑魅を驅逐す、故に阿姑尼は、人の間にては、竈に住して家を守り、財寶を附與する守護神にして、又家主。Grihaspatiなり、部落の守護嚮導Vigpati vigam go-patiなり、彼は人を惡より脱却せしむる者 Pavaka なり、此等は即阿姑尼が神の使者として人間の中にあるを表せる語なり。

阿姑尼は又、人の爲に諸神の間に周旋する報告者たり、犠牲を供へて其火燃ゆるや、諸神之を望て來降す、此諸神を呼集するは即阿姑尼なり、七河流か印度河に朝すると同じく、總ての食物は盡く阿姑尼に集り、梨俱一卷七二阿姑尼は之を自餘諸神に類つ、阿姑尼は最賢最惠の司祭なり、彼は祭祀に當りて事務僧、誦讀僧等の職を一人に併せなす、總ての宗教儀式を能くするは阿姑尼のみなり、阿姑尼は最初のリシにして、又僧侶たり、神のなす所は阿姑尼を介して人界を利し、人のなす所は阿姑尼に

蘇摩

依りて神に傳はる、因陀羅の功業も皆彼がなす所なり(梨俱一卷四七)。

蘇摩 Soma 亦阿姑尼と共に神の地上にある者なり、蘇摩とは元來一種の飲料にして、其興奮の作法あるより、其中に火の寓すと信じ、神的なりとなすに至りしなり、蘇摩は一羽が天より將來したりといひ、梨俱一卷八〇〇二、四卷二六の六、又婆樓那が某の山に植えたるを將來したりといふ(一卷九三の六、五卷八五の二)、蘇摩は神に供物たるのみならず、又人類を惠み、裸體の人には衣を被せ、病者を醫し、盲者に明を與へ、跛者を歩ましむ、梨俱八卷六八の二、之を飲めば神人共に不死を得、梨俱一卷九一、蘇摩は供物の精神にして(九卷二の一〇)、又因陀羅と車を共にして惡魔を伏す(一卷九五の五)、蘇摩は讚誦を生育し、諸神の父たり(六卷九六の五、四二の四)、即諸神は蘇摩を供物に受けて、始めて神力を有するの謂なり。

此の如く印度の宗教にては、神も人の供物を受けざれば其動作をなす能はざるなり、此思想に就きては尙一言せざるべからず。

神は信者が犠牲を己に供するに非んば神たる能はずとすれば、信者は又供犠に依りて諸神を利用するを得ん、印度の諸神は即人類の助に依り、其祈禱に聽きて、惡鬼

諸神と供物

と闢ふ、此思想は後世の宗教に至りて大に發達せり、吠陀の中にて、祈禱及供犠を非常に重要なりとし、又人は祈禱等を以て諸神を使用し得べしとの信仰は、當時には頗る簡單なる者なりしが、後世には發達し、婆羅門教にて、亦佛教にては益其思想を發達し終には、沈思冥想并に苦行は何れの神よりも優力にして、此に依りて、諸神をも、全世界の事物をも思ふ儘にすべしと信するに至れり、從て僧侶、苦行者、賢者は神に優ると信せらるるに至りしなり。

祈禱の神

吠陀の宗教にて祈禱供物に重きを置きたる事は、尙以下述ふる所にて明ならん。
フラハマナスバチ *Brahmanaspati* 又**フリハスバチ** *Brihaspati* は祈禱の神にして諸神の作者なり、又之を諸神の父とも呼べり、梨俱二卷二六の三、諸神の父なる神は又因陀羅に其業を成さしめ、羅刹を殺す、又其愛すべき舌は三界に充滿し、其力と其音聲に依りて地の四周を維持し、暗黒を破りて、人に財寶を與ふ、(梨俱四卷五〇)蓋し諸神の生れて其事業をなすと、天地の保存とは、一に此神の力に依ると信したるなり、吠陀の人民が祈禱に重きを置きしは愈炳然たり。

河神

サラスワチ *Saraswati* は元同名の河を崇拜するに起りし神なるが、天より供犠の

爲に降來し清淨を司る。

河神は一般に**アパス** *Apas* と稱す、中にも最巨大なるは信度 *Sindhu* にして、他の河は犢が牝牛に集まるが如く之に注入すと、(梨俱十卷七五の四)。

アプサラス *Apasaras* 即天女は、音樂の神なる禰陀婆の妻なり、此女神博奕を好み、運命を司る、然れども亦妖怪を現するを以て人の恐るる所なり。

吠陀諸神には又妻あるを記す、**インドラーニ** *Indrani* は因陀羅の妻、**アグナーニ** *Agnayi* は阿姑尼の妻、**ウルナーニ** *Varunani* は婆樓那の妻、等はなり、後世毘溼拏の妻として、美の神として多く崇拜せられたる**ラクシミ** *Lakshmi* は、梨俱吠陀十卷七一の二には幸運の女神たり、阿他婆吠陀には此女神は一人ならず、其中の一人は人に幸福を與へ、又詩人の祭るべき者なれども、他は皆此反對にして、不幸を與へ、詩人の特に嫌ふべき者なりと記す。

吠陀中人類の神位に上りし者**リアフ** *Rohu* あり、此等の人は特に敬虔にして犠牲を供し、又技藝に長して、**トワシトリ** が造りたる供物皿を多く造り、**アシヅ井ン** の爲に其車を造り、因陀羅の爲に其馬具を調へたるの功を以て、不死を賜はり神格に列

雑多の提婆

提婆の妻

したるなり(梨俱一卷二〇の一〇)。

此他吠陀の季世には幾多の奇妙なる神格を現したり。

阿他婆吠陀十一卷七に云ふ。

ウチヒシタ *Uchishita* (犠牲の殘物)には名形世界因陀羅と阿姑尼一切天地を包含す梵天一切諸物の創造者十人諸神は、恰も輻の轂に集るか如く、ウチヒシタの周邊に懸る。

犠牲用の匙 *Juhu* は天を造れり(阿他十八卷四の五)。

祈禱 *Namati* は天地を支へ諸神を管す(梨俱六卷五一の八)。

クシヤなる草亦祈禱と同じ神力あり(阿他十九卷三二の九)牝牛 *Vaga* も(阿他十卷

一〇の四)牡牛 *Anadu* も皆然り(阿他四卷一一の一)。

吠陀時代の末葉には、既に此の如く萬有神論の傾向を生じ、萬物特に犠牲に關する物は皆神格を有するが如くに信せられぬ、後世婆羅門教の盛時に、婆羅門即僧侶を以て即地上の神なりとなすに至りしも此に因す。

吠陀中には後世の所謂梵天 *Brahman* なる者未だ明ならず、只阿他縷婆吠陀十卷七

の三二、八の一に梵(中性)の神聖なるを説けるのみ、但し此外に祈禱の神なるアリハスバチある事は曾て述べたるが如し、此神は祈禱より轉じて萬物生成の萬有神論主義となり、終に哲學的意義にて宇宙の主義たるに至れり、梵天(男性)即是なり。

言語の女神なる *ヴァチ* *Vaci* 亦此に似たる位置を有す、此神、言て云く(梨俱十卷一五、同八卷八九)。

余か愛する者を強くせん、余は彼を強くせん、彼を婆羅門となさん、大豫言者となさん、彼を賢明にせん、余は婆羅門を仇とする仇敵を殄滅せん、余は樓陀羅の爲に弓を張り、國民の爲に戰爭に従ひ、余は天地を貫く、余は父を宇宙の頂點に捧げ、余の子孫は水中に海水にあり、余は水中より出てて天を衝く、余は萬物を包括するを以て風の如く呼吸す、余は天上地下に亘る程大なり。

是れ言語に萬能力を認めたる者に非ずや、

此外吠陀中創造開發の主義として尙、*プラーナ* *Prana* 即生命活氣、*カマ* *Kama* 即愛情慾望、*カロー* *Kala* 即時等あり。

ヒラヌヤガルフ *Hiranyagarbha* 即金身の義及 *プラジヤパチ* *Prajapati* 即庶物主の

二は元太陽サツタルの變名なりしならんも、後世には梵天の謂と化したり。

第四節 吠陀の世界觀及人生觀

吠陀最古の宗教は其根本思想にては光明無限の崇拜なり、故に之を自然崇拜の一種と見るも不可なかるべし、而して其季世に及びて、其自然崇拜が地上の諸物に對して行はるるや、神的性質、光明の主義を萬物の中に認め、其宗教は自然に一轉して萬有神教と化したりたり、此故に吠陀の宗教には徹頭徹尾創造化の思想なし、其諸神の中に萬物の母、諸神の成育者等あるも、其は創造の義に非ずして、萬有神的に萬物の生成を觀したるのみ。

吠陀は造化を信せず、然れども世界の成立開發を説く、是れ吾人の屢其神話中に見たる所なり、尙詳細に其成立に關する思想を伺はん。

神我章の
宇宙開發
論

有名なる神我章 Purusha-Sukta 即梨俱吠陀十卷九〇は犠牲に依りて世界の開發を説ける者なり、其歌に曰く。

ブルシヤには千頭、千眼、千足あり、彼は世界の周邊を包み收む、而も十指を以て地

犠牲と字
宙開發と

を撐ぐるに餘あり、ブルシヤ自らは此宇宙なり、存在せし者、存在せん者なり、彼は養分に依りて自ら擴がり、不死の主なり、彼は此の如く大なり、而もブルシヤは此に過ぐ、世界一切の物は彼の四分一なり、彼の四分三は天上にある不死なり、其四分三を以て彼は上に昇り、其四分一は此下界に現せり、彼は一切所に遍し、精神ある者の中にも、精神なき者の中にも、ウヰラージ Viraj は彼より生れ、ウヰラージよりブルシヤは生れき、此は此二者同一體なりとの意なり、彼の生るるや、彼は前後に地上に擴がりたり、諸神がブルシヤを犠牲として供犠を行ひしとき、春は清淨の牛酪となり、夏は燃火となり、秋は供物の惠與となりき、最初に生れたる此戰の供物なるブルシヤを諸神は供物草の上に置きたり、諸神は其惠與として彼と共に詩句と詩人とを供物としたり、此公共の供犠には、沈澱したる牛乳と清淨の牛酪を置きたり、ブルシヤは此等の空中の物と、野獸并に馴獸を形成したり、此公共の供犠よりリチ、倭馬、詩韻、耶柔と稱する諸の讚歌成りたり、又此犠牲より馬、總ての二列齒の動物、牝牛、山羊、羊生れたり、彼等がブルシヤを分割したるとき、彼等は幾部分に彼を分割したるか、彼の口は何物なりしか、彼の腕を彼の股及足を何

といひしか、婆羅門は彼の口なりき、王族は彼の腕より、昆虫は彼の股より、首陀は彼の足より成りき、月は彼の精神より成り、太陽は彼の目より、因陀羅と阿姑尼は彼の口より、婆由は彼の呼吸より成りき、空氣は彼の胸より、天は彼の頭より、地は彼の頭より、天の四方は彼の耳より成立したり、此の如くにして此等は世界を成したり、諸神犠牲を置き、ブルシヤを戦の供物と繋きしとき、七の木を用ひ、又七の三倍數なる木片を燃焼に用ひたり、諸神供物を以て供犠を行ひたり、是最古の方法なり、大なる者は諸神及詩句の住する天に達したり。

其文意神秘的に隱微にして解し難き者多しと雖も、其全體は世界の成立を犠牲に依りて説きたる事は明なり、而して其萬有神的思想は犠牲をなす諸神も、又ブルシヤを歌へる讃歌も、此ブルシヤより成れりとの循環的生成の説をなせるを見る。此神我章の外に、後世印度哲學の宇宙論に基礎となりし宇宙成立を歌へる讃誦あり、即梨俱吠陀十卷一二九に云ふ。

有に非す、非有に非す、世界もなく、虚空もなく、上に一物なく、晝夜の別もなかりき、此一切は冥暗に蔽はれてありき、而して無差別の水なりき、されど其れ *Ena* は息

冥想と宇宙開發

を吹かずして呼吸し、自ら靜止 *Stadha* に沈みき、存在は彼を支撐する空の中に息ひ、此世界は其が沈想の力に依りて成りたり、初に其が精神中に欲望 *Mana* 成り、而して此は最初の種子となりぬ。

是れ明に沈想を以て世界の因となし、欲望を以て生成の因と見たる者にして、其考察が神話の域を脱して、大に哲學的に赴けるを見るべし、只此讃歌にては實在なる精神と之を包圍せる無差別の水との二を立て、二元的に世界の根源を見たるか如し、然れども現象界の發生を精神の欲望に歸し、沈想を以て宇宙開發の主義となす事は、後世の哲學諸派に貫徹したる思想にして、此歌實に之か源をなせり。

要するに、吠陀の世界觀は萬有神の的にして、何れの者をも神の的と見る、而して現象世界の差別は無差別混沌の太原より出でたりと考ふるなり。

時々己に恩恵を下すと信する神を拜して、安慰を得たる太古吠陀時代の人民は、特に人類の運命に就きて沈思するの要なかりき、故に人の最も怖るべき死に就きて、言を發したるは實に梨俱吠陀の季世にして其十卷にあり。

彼等は思へらく、人間には死といふ事なかりき、此あるは夜摩 *Yama* に始まる、夜摩

死に關する観想

死と夜摩

は死後行くべき路を初めて發見して、吾人を導き天上に至らしめ、祖先と共に又諸神と共に綠樹の濃陰に蘇摩を飲みて樂しく日を送らしむと、彼等は死を以て祖先の居に歸るとなし、之を樂しき者と見たり、梨俱十卷一四に屍體に對して歌ふ讚誦あり、其歌に曰く。

行け、行け、我等が古の祖先が歩みし古の路を、彼處には供物にて歡樂せる二人の王夜摩と婆樓那を見ん、最高の天上にて祖先と共に居れ、夜摩と共に居れ、汝が供したる供物と共に居れ、總て世の耻と惡とを蟬脱して、汝の家郷に還れ、身體を得て、彼世にて輝ける衣を着けよ。

彼等が如何に快潤に樂天的に死を見たるかを知るべし、且此天國に至らん路には夜摩は、二疋の四眼犬を遣はして死人の此路を行く者を守護嚮導すといふ、阿他婆四卷三四の二には火神を死人の守護者として歌て曰く。

阿姑尼は死したる者の一族を消滅せしめず、彼等は(死人)天上にて捷陀婆音樂の神又は諸神と同じく、群居して交接の快樂を有す。

と、此天とは即三界中の最高天にして、死人は皆此處に集るなり。

死と阿姑尼と

死後の幸福を祈らん爲には夜摩を呼ぶは固よりなれど、又阿姑尼及蘇摩をも祈る、是れ阿姑尼即火は屍體を燒き、蘇摩は人に不死を附與するが故なり、梨俱吠陀十卷一六に阿姑尼を讚して曰く。

死人を全く消滅する勿れ、其皮膚と其身體とを解く勿れ、汝彼を熱せしめば、彼を祖先の下に送れ、彼をして祖先と同居せしめよ、彼の眼は太陽に、彼の呼吸は空氣に行かしめよ、各局部の性に從て、天に行け、地に行け、又は汝に適せば水中に行け、汝の四肢と共に植物に入れ。

と、是れ火葬すれば、魂は天に行き、其身體は各其元に還るを歌へるなり、又云ふ、彼の不生の局部(即心なり)は汝の熱を以て之を燒け、汝の火焰と汝の光輝をして彼を燒かしめよ、此幸福を與ふる現象(燃燒)に依りて、彼を正しき人々の世界に導け、彼を再び祖先と同居せしめよ。

此の如く死人の魂は天に上りて復祖先と同居するなり、既に、人は皆死後天に上りて神的生活をなすか故に、自ら諸神を祀ると共に祖先崇拜を行ひ、新月の時には之に供物を供したり。

輪廻及罪惡の觀念

吠陀の宗教にては光明を拜すると共に、火を神聖としたるを以て、屍體を焼けば、人は之に依て犠牲となりし者にして、以て神の天國に生るるに足ると信したり、而して火葬の後に天國に生れたる者は、火の爲に現世の汚垢を脱し、天國にて清淨の身を得、光明の國、正義の地に住す。

此の如く、吠陀の季世に至りて始めて死に關する觀想を有するに至りしも、其は靈魂不滅の觀念のみより成り、未だ後世の如く輪廻生死を信するには至らざりき。

吠陀の時代には罪惡といふ觀念甚深からず、火葬以て世の汚辱を一掃すべしと信したるが如きは、其樂天的にして、或國民の如く罪惡なる者に對して畏怖する事甚しく、此觀念を根據として其宗教を建てたるは、大に異なるを證するに足らん、是れアーリヤ族元來の特徴にして、之を希臘古代の宗教思想と對照すれば、益明なるべし、此樂天的に快濶嬉樂の人民も、後世風土の影響の爲に、沈思冥想に耽り、世を厭ひ生を惡むの人民となりしは、其變化の大なるに驚かざるべからず。

第五節 吠陀宗教の儀式并に教制

祭祀に於ける酒

祭祀に於ける酒

犠牲

吠陀の證誦を解するには其儀式を知るを要す、然れども儀式は之を傳へたる典籍なく、婆羅門教徒の口傳は時代混亂の甚しき者あるを以て、容易に信し難し。

太古には殿堂なし、故に供犠の式は草原又は家中竈邊に行ひたるならん、火を燃やせば阿姑尼降り來るを以て、牛酪を火に投して之を攫す、而して阿姑尼は又諸神を誘ひて此供犠を享けしむ、蘇摩液を作るには古より一定の法あり、月夜に山に入りて *Asclepias acida* 若くは *Sarcostema viminale* を抜き集め、葉を去りて、車に牡羊に引かしめ家に入れ、石の間に挿みて其液を搾取す、搾取の間祈禱唱歌す、而して其金黄色の液が皿に滴る香は、因陀羅の牡牛が鳴き、駟が嘶くなり。

供犠の式は太古より既に複雑に赴き、數日の間數人の僧之に従事するを常としたり、先づ三個の聖火を燃して、火邊誦讀僧 *Agnihotar* 日毎に其火に供物を供す、新月及満月の時に特に其式を鄭重にし、四人の僧之に従事す、蘇摩犠牲を行ふには少くも六日を費し十六人の僧之に従事す、刹帝利族には尙此外に特に行ふべき儀式あり。

印度の古代に人を犠牲としたる事は眞に近きが如し、シヤタバトハ *Gatapatha* フ

ラーハマナには、原初に諸神は人 Purusha を犠牲としたるが、後馬を用ひ、牛を用ひ、終には米麥等に移りし事を記せり。

吠陀にて供犠を行ふ事は、曾て述べたる如く、人より神を養ふを主義とする者なれば任意的の者なり、之に反して、神は之を享くれば、之が酬として信者に恩恵を下さざるべからざる者と信せられたり。

教制、僧

吠陀の時代には後世婆羅門教の如く確立したる教制なかりき、故に供犠に従事し讃誦を作為するは主として僧侶の職なりしも、亦王者が之に交りたる事もあり、現に曾て述べたるガイヤトリなる歌は王ウヰンシブミトウの作りし所なり、故に歌の作者を詩人即リシ Rishi と呼びしも此は必ずしも僧侶の義には非ざりき。

此の如く刹帝利族も時には僧侶の職を執りたる事なきにあらざるも、其種族上の別は既に彼の神我章の讃誦に萌芽し、特に婆羅門族は之を固定せんと勉めたるの跡を見るべし、而して血統の淨否を云ふこと既に耶柔中にあり、所謂婆羅門 Brahman 是は最高の僧侶にして儀式を監視する監督僧なり、此外に三種の僧侶あり、事務僧 Adhvaryu 誦歌僧 Udgatar 誦讀僧 Hotar 是なり、其事務僧は供犠の細務を處理

し、或は犠牲を調製し、又之を配置し、其間耶柔を低聲にて誦す、誦歌僧は後馬を歌誦するを職とし、誦讀僧は梨俱を歌ふ、而して監督僧は特に阿他婆に通し儀式全體を指揮監督す。

吠陀の重要

此等の僧侶が非常に尊ばれ、後世には終に婆羅門族となり、王者の上に位し、自ら地上の諸神を以て居るに至りしは、先にも述べたる如く、吠陀の宗教が過多に重きを犠牲の上に置きたるが爲に、之を執行する僧侶は益其位地を昇進したるに因らん、吠陀は印度思想の基本なり、萌芽なり、然れども讀者は此時代の觀念が大に後世に異なるものあるを忘るべからず、此期にありては、印度アーリヤ種の住居は未だ其南方に及ばず、梨俱吠陀の末葉にも未だ恒河の邊に出でざりき、此故に、年月と風土氣候は未だアーリヤ人種特有の快暢潤達の氣性を消磨せざりき、其神話の無邪氣なる者、信仰の樂天的なる者は之を證せり、然るに後世此人種が漸次東漸し南下して、其源熱濕潤の氣候に染まり、且其原始の状態を距る事遠きに從ひ、人心漸く沈痛となり幽鬱となりて、厭世觀を生み、無宇宙論を生ずるに至りき、此故に吠陀神話時代の思想と後世婆羅門教及印度教の間には、父子の聯絡あり、因果の關係ありて、氣

脈相通すると共に、他方にては兩者の間に顯著なる對立を有するなり。

第二章 優波尼沙土の哲學考察時代

第一節 アーリヤの東漸、南下

中央地方
に於ける
アーリヤ
民族

アーリヤ
民族と
其土
南人との
下

パンジヤアの野に殖民して土民を追ひたるアーリヤは、其人口の繁殖と新來の移民續々たるを以て、漸次東に膨脹し、恒河、ヤムナーの上流より益東に出でて今は恒河の下流に出で、今のアラハバツトに及べり、摩拏法典の所謂中國 Madhyadesha 是なり、彼等は尙此に満足せずして南方に出で、第二期の終には既に印度半島の南端コモリン岬に及べり、アーリヤ民族の南下蔓延に就きては確實なる載籍なし、只口碑傳説に依りて其大勢の變遷を推測するのみ。

印度アーリヤ民族は始より一國民を結合したるに非ず、牧畜的家族が漸次結合して部族をなしたる後、部族間には常に争闘したる者の如し、後世の敘事詩に記するクル族とバンド族との争の如きは其最大なる者なりけらし、彼等は中には互に争闘しつつも漸次其住地を膨脹したり。

印度アーリヤは其南下と共に、原來の土民を倒して其地を占めざるべからず、爲に

此と争闘せざるべからず、故にアイリヤ民族は此等土民を總稱して非アイリヤ種とし、或は之を悪魔と目し、羅刹と呼びたり。

ラーマ物語の傳説に據れば、此占領は干戈にのみ訴へずして、宗教の手段をも取りし者の如し、聖者アガスタヤ Agastya の事を記して云ふ。

彼が人類の幸福の爲に死を縛してより、南方の地開けたり、彼の力に依りて、羅刹は此南方の地を怖れ、之を棄つるに至れり、彼が此地方を領してより、夜鬼屏息し、害物なきに至れり、南方は彼が名を以て、三界に崇められ、魑魅之に近かざる處と賞賛せらるるに至りぬ。

蓋し此種の隠者は、其隠棲を南方の地に進め、依て土民を教化したる事もあるべく、又此に依て探偵の用をもなしたるなるべく、又叙事詩にてはラーマが其妻女の一羅刹王に奪はれて錫崙島に在るを復歸せんとしたる時、領地を失ひし一猿王の爲に其故地を復し、其勢援に依りて錫崙に侵入したりといふ、是に依て見れば、アイリヤ種は非アイリヤ種内部の紛争を利用して、其内應を得たる事あるを見るべし。叙事詩マハフハラタに至りては南下の勢大に進めるを見る、西海岸にては印度人は

海上の交通

ゴカルナに來往し、東海岸にては其勢力既にゴダーワリーの河口地方に及べり、而してデツカン地方錫崙島の住民も北方と交際往來したり。

吠陀にはアシウンを以て航路守護の神とせるを見れば、海路の交通亦夙に開け居たるならん、猶太聖書中なるオフル船は即印度河の河口なるアフヒラにして、此時既に西方と海路の交通ありしを證すべし、而してオフル船の印度より來りし事は言語上に他の微證なきに非ず、此頃には、デツカンの内地に先んじてマラバルの海岸地方は既に北方と親しかりし者の如し、マハフハラタ中にバンド王を助け其即位を祝せしといふバンドヤ民族は西南の海岸にありしなるべし、マラバル地方の傳説に依れば、其古紀元前一七六六年、バラシユラーマが刹帝利族を壓服して其地を占むるや、婆羅門族が人の殘物を有するは卑しとて、海神婆樓那の許可に依りて、ゴカルナより南カヌヤクマリー Kanya Kumāri 即今のコモリン岬に亘る地を占領したりと、兎に角西方海岸は早く既にアイリヤ種の有に歸したるを見るべし。此の如くアイリヤ民族南下の勢駭々として進みしは、大抵紀元前千年の後にあるべく、恰も思想上の一過渡期に相應せり。

第二節 ブラーハマナと優波尼沙土

ブラーハマナ
マナの性質

ブラーハマナ Brahmana とは吠陀宗教の儀式に關する典籍なり、其中に規則 Vidhi と其説明解釋 Arthavāda あり、僧侶が儀式を營むの方法、讚誦の用法を説き、又時には讚誦の意義効用等を述べ、其間間々此等に關する傳説事實を記し、又は爭議を叙せり、此故にブラーハマナは各讚誦の何れかを目的として述作したる者にして、各某集録に附屬せり、其數梨俱集録に二、黒耶柔には一、白耶柔には一、僂馬には八種、阿他婆には唯一あり。

此等が述作の年代は、正確ならず、其最古きは紀元前八世紀にあらん、マクスミューラー氏は同六百年乃至八百年を以てブラーハマナの時代となせり。

ブラーハマナ
マナの世
界觀

ブラーハマナは儀式に關する事多きが故に、哲學的の意義は多からず、然れども其中に自ら此期の思想を傳ふる者なきに非ず、此期に至りては、來世に關する觀念大に發達し、來世の賦運は現世の行爲に因して、其報を享けざるべからずとの信仰を生ぜり、此信仰は印度後來の思想道德上に大なる影響を及ぼしたる者なり、輪廻の

觀念も既に萌芽を出せり、即シヤタバトハフラーハマナ十一卷六の一に、人現世にて動植物を苦めんには、來世此等被害動植物は之が復報をなすと説けり、此故に死を怖るるの念慮亦増進せり、シヤタバト八十卷四に云ふ。

諸神は常に有力の滅盡者なる死を怖れたるを以て、彼等は勉めて儀式を以て禮拜し、其不死となる迄、宗教の儀式を行ひたり。

諸神すら死を怖れたりといふ、其感情見るべきのみ。

ブラーハマナにては、世界成生の因をブラジャーパーチに歸す、此より諸神出で、世界此に成りたりとす。

ブラーハマナ
ヤカ
優波尼沙
土の性質

ブラーハマナには各其中に阿蘭若迦 Aranyaka と稱する章ありしが、其説く所隱微森嚴なりしを以て、之を森林の中に誦讀したりと。

優波尼沙土は即此等諸阿蘭若迦の説明として出で、宇宙の原始、諸神の性質、精神の本性、精神物質の交渉等、哲學的問題を神秘的に又譬喩的に解釋したる者なり、優波尼沙土 Upanishad とは、印度の學者の説にては最上精神を知り無明を破するの謂なりとす、或は學者の側に侍して教を聽くの義なりといひ、或は此語は Sad (表面) に

優波尼沙
土の考察

ウバ及ニなる前置詞を加へたる者にして、表面下、即神秘の義なりといへり、未だ何れが是なるを知らず。

優波尼沙土は總數百四十五種の多きに上るといふ、其年代一も明確なる者なし、其或者は西曆紀元後に出でたる明證ある者もあれど、其古きは紀元前八百年以前ならんと推さるる者あり、其時代は大抵紀元前七八世紀と定めて大過なからん、今其主要なる者を列舉せん、梨俱吠陀に

Aitareya upanishad (アイトアレヤ)

Kaushitaki.....(カウシータキ)

黒耶柔縷集録に

Taittiriya.....(タイテリーヤ)

白耶柔縷集録のシヤタバトハフラーハマナに

Bṛhadāraṇyaka.....(ブリハダーラヌヤカ)

Iga.....(イシヤ、此は同フラーハマナの第四十章を成せり、短篇なり)

倭馬集録には

Chândogyā.....(チハインドギヤ)

Kena.....(ケナ、此は又他の名にて阿他縷婆に屬する事あり)

阿他縷婆集録には

Pragna.....(プラジナ)

Mundaka.....(ムンダカ)

Māṇḍūkya.....(マーンドウクヤ)

Kāṭha.....(カトハ)

等あり。

此等は皆神の啓示に出づと稱す、其作者の如きは一も傳はらず、

優波尼沙土は印度哲學思想の根本なり、吠陀の神話は固より印度思想の基本なれども、其包含する所未た哲學的考察の域に入らず、故に直接に之を印度哲學の地歩を作れりといひ難し、之に反して優波尼沙土に至りては、其語は譬喩にして其謂ふ所は幽玄なるも、其包蓄せる意見は明に哲學的考察なり、而して第二期哲學考察時代の諸派にして、婆羅門思想の正統なるものは盡く此神秘的文字が傳ふる哲學的

優波尼沙
土の考察

義理を解せんとして起りし者にして、中には其論する所の區域を異にせるあるも、其世界觀の根本思想に至りては、皆優波尼沙土に基ける者なり、優波尼沙土は正統哲學の根本なり、故に次節には正統哲學の概論として、之が神秘的哲學思想を叙せん。

第三節 優波尼沙土の哲學思想

抑吠陀季世の萬有神教は世界の太原を其考察の中心とし或は大自在天と稱し神我を目し、時には祈禱音聲を以て宇宙の原因を説かんとしたり、然るに思想の發達は漸次神話的の域を脱して、一箇の原體**ブラハマン** Brahman 即梵を計するに至れり、梵とは何ぞ、世界は如何にして梵より出でたるか、又如何に終極すべきか、此等は即優波尼沙土の哲學問題にして、諸派は種々に此解釋を試たる者なり、梵とは何ぞ、**チハンドギヤ** 六章二に云ふ。

太初には第二なき唯一 Ekameva-advitiam なる唯存在の態ありき、或は云ふ、太初には第二なき唯一非有の狀態ありき、此故に有の狀態は非有の狀態より出でたりと、然れども此の如き事あり得べきや、有は如何にして非有より出で得べきや、然らば太初には第二なき唯一存在のみの狀態ありしなり。

梵の中には差別もなかりき、只存在せるのみ、是れ梵の狀態なり、老子の無名も此なり、莊子の無も此なり、無別なり、又、一切なり、全なり、*Pa Iti* なり。

世界の開

世界は如何にして梵より出でしか、優波尼沙土は續て云ふ。

其^タ梵意ひき、余は繁殖し生れんと、其れ熱を造りたり、熱意ひき、余は繁殖し生れんと、其れ水を造りたり、水意ひき、余は繁殖し生れんと、其れ養分を造りたり、此故に雨れば多く養分を生ず、其神^タ養分意ひき、生ける形を以て是等三種の神位に入りて、余は名と形とを開發せんと。

アリハ **イダラニヤカ** に云ふ(二卷一の二〇)。

蜘蛛が蜘蛛より出づるが如く、小き火花が火より發するが如く、一切の感覺、一切の言、一切の諸神、及一切の物は彼の精神より出でたり。

世界は此の如くにして成立したり、即一より多となり、無差別差別を生したるなり、而して其動源は純一無差別なる梵が自ら繁殖せんと意志を發したるにあり、此意志萬物を生ぜり、此の如く宇宙は梵より分れ出でて發したり。

梵より分出したる世界は差別の世界なり、差別あるが故に悪毒の世界なり、苦痛の世界なり、慾望の世界なり、是れ虚妄に非ずして何ぞやと、印度的の無宇宙論と厭世観は既に鋒芒を顯せり、**マイトラーヤニーヤ** *Maitrāyaṇīya* 第一章に此感情を述べて云ふ。

骨、皮、鞞帶、膜、肉、血、唾液より成り穢物と、不淨を滿たしたる此朽つべき身體に於て、何の樂か眞の樂をなすに足らん、吾人の合するを惡み、離るるを最も喜ぶなる憤怒、野心、貪慾、迷誤、恐怖、悲哀、嫉妬、憎惡に常に陥り易く、又常に饑渴、疾病、老衰、虛弱、生長、衰弱、死に瀕せる此身體に於て、何の樂か眞の樂をなすに足らん、宇宙は衰滅に歩を進めり、草木、動物は勃興しては死す、然れども彼等は何物ぞ、地上の有力なる人は其歡喜と光榮とを跡にして逝きぬ、彼等は此世より精靈の世界に行けり、然れども彼等は何物ぞ、此等より尙貴きもの、諸神、半神、鬼神は皆逝きぬ、然れども彼等は何者ぞ、何となれば此等より尙貴きものは逝けり、大洋は乾きぬ、山は崩れぬ、極星は移りぬ、遊星を維ける綱は斷切しぬ、全地は涿水に浸され、最上の天使も其地より追はれぬ、此の如き世界にて何の樂か眞の樂をなすに足らん、余を救はん事

を容れ賜へ、爾のみ委托所なり、神聖なる主よ

と、其厭世の度又察すべきなり、蓋し此期の思想にては世界の成立は即惡の成立なり、梵を離るれば即差別愛着を生ずると考へたるなり、原一平等は善なり、末流差別は惡なり、故に現象界の事物は一として惡ならざるなく、其時に善と見ゆるも、畢竟迷妄中相對的の善にして、梵の絶對平等に歸らざるば眞樂に非るなり。

優波尼沙土の哲學は此の如く厭世的なり、故に現世ならざる原一の狀態、即眞樂妙樂の地を渴望する事甚大なり、現世を以て苦、カ 厭界と見世の事物を以て繫縛枷鎖と見るが故に、之を脱して無愛不羈の彼國に生れんと勉むる事大なり、是れ即平等と差別の對立觀にして、印度哲學問題の中軸となりし者なり、如何にして繫縛を解脱すべきや、是れ哲學諸派が盡く其考察の發足點とし、到着點としたる處なり、**ムンダカ** 三卷一章一以下に此對立と解脱の可能を説きて曰く。

二足の鳥あり、同じ名にして、常に離れず、同じき樹に息ふ、其一は樹上の甘果を味ひ、他の一は惰番をなせり、同じ樹に息ひながら、迷へる者は(世界に)迷溺して其力の乏しきを憂ふ、然れども彼れ主宰者を知覺し、世の繫縛と其光榮を離脱すれば

其嘆息は止まん、見者金色の創造者、主精神、梵の原泉を見たらんには賢明となり、徳をも悪をも掃ひ、一の汚點なきに至りて、彼は最高の合一を得ん。

此章は梨俱吠陀中の一讚誦（ゴウダ）に基きたる者なるが、其意は左の如くならん、原一の最上精神。Paramātmān と差別の生活精神。Jīvātman の二者は元來同一物にして、吾人の生活精神か身體（即樹）に入りて生活せる時にも、最上精神の性を失へるに非ず、只愛着差別が生活精神を迷惑し、世界の苦海に沈溺せしめたるのみ、此故に此個人精神も其自性を知り、最上精神を知らば、直に此苦を解脱して此最上精神即梵と合一するを得ん。

印度の哲學にては個人精神のみならず、萬物皆最上精神に非ざるなきなり、是れ其萬有神教の自然の結果なり、而して此思想亦既に優波尼沙土に明なり、カトハ二卷五の二に云ふ。

梵は人の中に住せり、諸神の中に住せり、犠牲の中に住せり、天空に住せり、彼は水中に生る、地上に生る、犠牲の中に生る、山上に生る、彼は實に一なり、大なり、梵は一切なり、一切は又梵なり、優波尼沙土時代の言語は十分に此思想を表する能

個人精神
最上精神

ざりき、此故に神秘的に梵を表するの語あり、ケナー一の三に云ふ。

眼も言語も理會力も之に到達する能はず、吾人は之を認識せず、吾人は人に之を教ふる能はず、彼は一切の知れる者にも異なり、知らざる者にも異なり。

故に之を表するに、不偏にして十分に抽象的の語を以てせんと勉めぬ、其れ Tat なる語は吠陀讚誦中にも宇宙の太原を表する語として用ひられしが、優波尼沙土にても屢之を用ひたり、終には唵。Om なる一音を以て此絶對を表するに至れり、此音はアウム三音を一にしたる者にして、何時の頃よりか之を神聖と見るに至りき、マンドクヤは此一音を説明して云ふ。

オーム（唵）其は不死なり、其開展は一切なり、ありし者、ある者、あらん者なり、實に一切は唵なり、三種現象の外にある者ありとするも、そも亦同じく唵なり、何となれば、此一切は梵なり、此精神は梵なり、精神には四種の状あり。

四種とは何ぞ、曰く一には覺醒、感覺にて外物と接する時はなり、二には夢、感覺を離るるも知覺したる對象が心中に留存する時はなり、三には熟睡、一切の欲望を離れ唯一の印象唯一の知識即幸福、歡喜のみ存する時はなり、四には絶對の靜止にして

萬有一

知に非ず、不知に非ず、全く不可説なり、第一はア、第二はウ、第三はムにして、此三を合したる唵は即第四絶對の精神なりといふ。
 此の如く梵とは世界の太原にして、又世界なり、一切萬有なり、萬有を合一したる者、萬有一、萬物の合一的基礎に外ならず、梵は自己内にては不定無別なる宇宙芽なり、未開展なり、宇宙の統一的根本なり、多の原なる一なり、梵と世界とは根本にては一なり、其別は形式の上にあり、梵は物にあらず、力なるを以て精神なり、但自覺を有し、考慮し、意志する精神に非ず、即人格にはあらず、差別の萬有を見て之が一原を探り、之が一原を知りて、差別の中に此一を認め、神と世界とを對立して、而も其間を阻隔せず、二者の合一を知悉せる事、是れ優波尼沙土、印度全體の萬有神教の特長なり。世界は梵より出でて差別を生したるが爲に惡なり、故に此梵と同一なる世界は、再び此差別を出でて其元に歸らざるべからず、其元に歸る之を解脱とす、ムンダカ三卷二の八及九に云ふ。

流るる河流が其名と其形とを失ひて海中に融合するか如く、名と形とを離れたる賢人は(世の)大なる者よりも尙大なる神聖的精神を知る、此最上精神を知る者

智力は解脫の因

は精神となる。

此の如く、差別を脱するは一に知識の力にあり、知即解脫とは優波尼沙土以來印度哲學諸派の擧て一致する所なり、優波尼沙土には尙此意を説く者多し。

フリハダーラヌヤカに云ふ(四卷四の一四)

彼(梵)を知る者は不死を獲。

又云ふ(同一五)

人若し自己の精神を誠に神なり、ありし者、あるべき者の主なりと知らば、彼は自ら其精神を隠蔽せず、自ら自らの本性を知る。

又云ふ(同一八)

彼(梵)を生命の生命、眼の眼、耳の耳、心の心なりと知る人は、無始の精神を知れり。

又云ふ(二卷四の一〇)

余は梵なり、何人にてても此余は梵なりを知る者は、一切を知る、諸神と雖も此人の梵となるを妨ぐを得ず。

チハンドギヤには梵を以て解脫の橋に比して云ふ(八卷四)

此橋を過ぎなば、盲も盲たるを止め、負傷者も負傷者たるを止め、悲哀に沈める者も悲哀者たるを止め、又此橋を過ぎなば夜は晝となる、何となれば宇宙精神の世界には常に光輝あればなり。

ムンダカにも亦之を橋に比して云ふ(二卷二の五)。

彼れを精神を唯一なりと知れ、此に反する一切の言説を止めよ、彼は不死の橋なり。

優波尼沙
土の哲學の
要領

此等は皆第二期の哲學諸派特に吠檀多派の解脱論の基本を作りたる者なり、之を要するに優波尼沙土の哲學は梵論の外に出でず、其思想は一元論なり、萬有神教なり、而して又絶對相對對立觀なり、從て現世差別界厭離主義なり、知識覺悟即解脱説なり、イシヤに云ふ。

此宇宙間にある者は何れも、衣服に收められたるか如くに、大なる主に包まれたりと見るべし、人々よ、世界を棄てて、他人の富を欲する勿れ、此くせば汝は汝の精神を救はん(中略)唯一の存在ありて動かす、而も心ココロよりも速に動く、彼は感覺が彼に達せんと勉むるも彼等の到る能はざる所なり、彼は静止しても他物の最速な

る飛翔に超ゆ、彼は空氣の如く一切の生活作用を維持す、彼は動く而も動かす、彼は遠し而も近し、彼は此宇宙にあり而も此宇宙の外にあり、何人にてても一切の生物を彼の中にありと見、又彼即宇宙精神を一切の中にありと見る、故に此人は何れの者をも輕侮せず、何れの物も只神の内に存するを理會して、存在の統一を知覺する人は、悲哀なく、迷誤なし、遍一切所なる彼は光輝あり、體なし、體なし、傷害すべからず、清淨にして罪惡の汚垢に染められず、彼は一切知なり、心の支配者なり、一切の物を超ゆる自存なり、彼は一切の物を恰も彼等が無始に存するが如くに創造せり。

優波尼沙
土の言説

以上優波尼沙土の哲學思想の一瞥見のみ、終に臨て尙一事の注意を要する事あり、優波尼沙土の哲學的考察は既に高尚の域に進み居たる事此の如し、然るに其言語に至りては深奥幽玄と贊すれば贊するを得れど、又之を幼稚未熟なりと云はざるべからず、後世に出でたる者は、故らに古に擬して特に此種の文字を駢列したる者あるべきも、此古代に出でたる原始の優波尼沙土籍に至りては、此の如き事ありとも思はれず、思ふに此時代の言語は尙未熟の域にあり、而も冥想的の人民には思想

のみ前進したるならん、未熟の言語を以て高尙の思想を表せんとす、勢譬喩を用ひざるべからず、言説糲糊ならざるべからず、而して後世の人之を見れば幽玄なるが如く、神秘なるが如く、又時には幼稚なるが如き観なかるべからず、故に優波尼沙土を研究する者は此心を以てせざるべからず。

第四節 哲學諸派

優波尼沙土の思想家は、深遠なる哲學考察の大本を立てぬ、當時の婆羅門は考察の上にては頗る活潑自由の氣象に富み、冥想の問題に於ては敢て自他の良心を制御する事なかりき、論議の風は當時一般に行はれ、之に勝を占むる事 *Brahmavarcasa* は諸學者の競て占めんと欲する所なりき、是に於て哲學の學說見解 *Darśana* を提出して一派の系統をなす者續々として出でぬ、即是れ諸哲學見解の奮起せし時代として、特に後世に有名なる時代なり。

諸派の中最も早く起りしは、紀元前八百年の頃 *ジャイミニ* *Jaimini* なる人が創めし *思惟即明曼薩* *Mīmāṃsā* 學派とす。

自由考察
與哲學の勃

哲學諸派

聲常住論

尼夜耶學派

論理法

弭曼薩の目的は吠陀を正しく解釋し其儀式を説明するにあり、此等の解釋説明をなすに *ジャイミニ* は一定の論方を始め、問題を解釋するには特に聖教即吠陀の教權に據るを主張しぬ、此に於て此派は吠陀を尊重して其が口々相傳ふる聲の不滅なるを主張せり、是れ後に幾多の爭論を惹起せし原因にして、此派の聲論派と稱せらるるも此が爲なり。

弭曼薩の聲常住論に對して起りは *喬答摩* *Gotama* 即 *目* *Akṣhapada* 仙人の論理學派 *尼夜耶* *Nyāya* とす、此學派の主とする所は分拆的論理にして、其方法を十六條に分ち、就中其が推理即比量の方式は後世印度一般の論理法となりき、而して足目の論理法は元聲論の聲常住を難駁せしを以て、聲論に關する論理は此派の特に多く用ふる所とす、其方法は宗、因、喩、合、結の五より成る。

宗。 *Pratijñā* 聲は無常なり、
因。 *Heṭu* 所作性なるが故に、

喩。Udāharana 譬へば瓶等の如し、
 合。Upanaya 瓶に所作あり、瓶は是れ無常なり、譬に所作あり、譬は是れ無常なり、
 結。Nigamana 是故に知る、譬は無常なり、
 尼夜耶學派は此分拆的論理法に就きて詳細の研究を遂げ、因の證明の當否に就きて九句因を分ち、及他人の自己を駁するに當りての誤論を指摘する爲に十四過類を立てたり。

尼夜耶は論理學派として其推理の對象たるべき客觀界を十二に分拆彙類して、精神身體の關係より行爲の善惡に依りて果報輪廻あり終に之を解脱せざるべからざるを説きたり。

尼夜耶論理の大本に立ち進て大に世界を説明せんとしたるは迦那陀 *Kaṇḍa* が創唱せし所の衛世師 *Vaiśeṣika* 即勝論哲學派なり、迦那陀は世界を六句に分類せり、
 即

實。Dravya 即本質

德。Guna 即性質

業。Karma 即作用

大有性。Sāmānya 即存在の主義

同異性。Viśeṣa 即差別特質の主義

和合性。Samavāya 即集合關係の主義

是なり、地、水、我、意等の本質は各其色、味、前後等の性質を帯びて、屈伸、行動の作用を呈し、而して此等の現象活動の大本主義なる存在、差別、關係に支配せられて此宇宙萬象を呈するなり、此現象界は即微細なる諸實の原子極微 *Atom* が活動する所にして、一切は原子の外に實あるなし。

尼夜耶及衛世師は現象世界を分拆説明する外に目的あるなし、其か時に上帝を説くが如きは其主要の目的にあらず。

尼夜耶及衛世師と殆ど同時に迦比羅 *Kapila* あり、同じく宇宙を分拆して、心なる神 *Puruṣa* と之を蔽ふ物質なる自性 *Prakṛti* とを并立し、二元を以て宇宙を説明せ

り、此學派を僧法。Sāṅkhya 即數論とす、然れども此派の學説は單に二元に分拆するのみにあらず、自立獨存の神我が自性に纏綿せられ、自性の開發なる意、我慢等二十三諦を附着し、物質に繫縛せられ、而して此等自性の開發に固着せる善、惡、闇の三性質に支配せらるる經過を説明せり、故に又之を二元組織の開發進化論と稱すべし、宇宙は即二元が纏綿開發の場なり、而して宇宙の究竟吾人の目的とする所は神我をして此自性三徳の繫縛を脱して其自存獨立の原狀に復歸せしむるにあり、一旦の纏綿は即吾人が此現象世界に苦惱する所以なるを以て、此纏綿繫縛を脱するは最上の状態なり、此外に理想あるにあらず、又超絶の境界本體あるにあらず、數論哲學は優波尼沙土の宇宙的解脱の論を局限して、個人精神の外に他の解脱の境界を否定したる者なり、彼は個人精神を離脱せんとし、此は個人精神をして物質を離脱せしむるを理想としたり。

諸哲學者は此の如く各自己の見解を以て宇宙を説明し解脱を説き、各多少優波尼沙土の哲學思想より獨立したる論理と見解を發達したる間に立ちて、吠檀の教權

に據り、優波尼沙土の思想を繼ぎ、彌曼薩學派の事業を哲學的に大成したるを婆達羅耶那。Bādarāyana とす、故に此人の學説を後。彌曼薩。Uttara-Mīmāṃsā 若くは吠檀多。Vedānta 即吠檀の究竟を明示する學派と稱せり。

吠檀檀は最上精神。Paramātmān 即宇宙精神たる梵の外に一も實在あるなく、現象世界は此最上精神の顯現としての外に實在あるなし、實在は一のみ二あるなしとす、此派の世界觀は既に優波尼沙土の哲學に叙述したるに同じきを以て特に此に叙せず、婆達羅耶那は實に諸の優波尼沙土に存在する非二唯一の實在論を輯成したる者にして、吠檀多經。Vedānta-Sūtra は其結果なり、此派の學説は吠檀思想の正統説として大に後世に尊重せられ、特に紀元後九世紀の復興家商羯羅に祖述せられて、堂々たる無宇宙論哲學を開發せり。

優波尼沙土の哲學出でてより、婆羅門の諸思想家は各其經典。Sūtra を出だし哲學的見解を提出して、隱然學派を形成して相拮抗せる間に、一方にて婆羅門の社會的實際的活動は其社會的道德の宗教を發達しつつありき、婆羅門の哲學發起は紀元

前六七世紀以前にありし者の如く、其宗教の完成して弊害百出の狀態に陥りしは五六世紀の間にあり。

第三章 婆羅門教固成時代

第一節 民族及社會の發達

社會的制
度の固成

信度の沃野より恒河の平野を占め、劣等民族を征服しつつ印度全半島を占領したる民族は、其占領したる土地に固着すると共に社會家族の制を固成し始めたり、印度民族の社會は鞏固なる統一的の政治組織をなしたることなきも其間全半島に通して社會的組織を同一様に發達固成したり、其固成の結果は即彼の有名なる四姓の階級制度なりとす、而して此階級制は國教の主要義となりて永く印度民族の宗教并に道德思想を支配せし者なり。

階級制度
の起因

人種の別

凡そ何れの國にありても階級制度の成るには種々の原因ありと雖も之を大別すれば三となるべし、人種上の原因、政治上の原因、職業上の原因是なり、而して印度にありては此三因相集りて其四姓を成すに至れり、然れども先づ之が誘因となりしは實に人種の別にして、階級といふ語 *Varna* は即色の義なり、印度アーリヤ民族が西方七河流域の地より東南を占領するに及びては、勢土地の原住民族を排して其

地に入らざるべからず、假令之を排撃せざるも其地に入りて之と同居するに及びては、第一に其皮膚色の異なるは之が區別をなし、文化の差、言語風習の異なる到底相容るべくもあらず、終に一は征服者として他を服従せしめ、之を劣等民族となさん、優等民族は劣等民族と伍するを好まず、況や之と婚を結ぶに於てをや、二者上下の別は益々顯著となり來れり、白色優等なる印度アーリヤは黒色劣等なる元來の民族を壓服し去りたり、是に於て一はアーリヤ Arya 優等の民と稱し、一はアナリヤ Anarya 劣等と卑められたり、此所謂アナリヤ民族中には種々の種族ありき、現今北方に住せるコラリア南方に墜在せるドラヴ井ダの如き是なり、而して此劣等民族は即首陀羅 Oudra として屠殺の賤業に従事し、四姓中最下の地を占むるに至れり。

職業の別

産業者

アーリヤ民族とアナリヤとの間に此の如き別を生ずるに先ちて、アーリヤ民族中には既に職業の別、政治上の關係よりして階級の別を生じつつありしなり、半は牧畜的なりしアーリヤは信度の沃野に移りてより農業民となり、恒河の豊饒なる平野に來りては耕さざるに穀自ら生じ、勞せずして日需に缺乏を告げず、從て全民

統治者

僧侶

族舉て産業に従事するを要せず、一部の人民のみ生産をなさんには優に幾倍の遊民を養ふを得しなり、此に於て社會に分業起り、僧侶は専ら讚誦を歌ひて神を祭るの事をなし、武士は武人として弓矢の勞を執ると共に、又社會の治者として政治の權柄を握り、其他一般人民は産業に従事して或は商をなし、或は耕作に従事せしなり。

然るに此間にありて僧侶は神人交通の媒介をなす事として、自ら人の禍福運命を左右する實力ある者と信せらるるに至り、自ら人民の尊重する所となれり、特に神に犠牲を供し又之に讚誦を供くるには其事に従ふ人は清淨ならざるべからずとの觀念よりして、僧侶は清淨なる一族となり、爰に血族的に僧侶なる一階級を固成し、埃及猶太の如き宗教的國民に見ると同しく、印度にては僧侶の階級最高貴なる者となれり、即是四姓中の婆羅門 Brahmana 族なりとす、此と相併て政治の執權者にして武夫なる刹帝利 Kshatriya 族となりて第二位に位し、一般の人民は毘舍 Vaishya 族として第三位となれり、此の如くにして婆羅門刹帝利毘舍首陀羅四姓の別は嚴然として成立し、各其職業範圍を越えず、互に婚嫁を通せず、非常なる懸隔差別を

なして一社會を成立したり、然れども此差別の成立したるは決して日一日の故にあらず、又必しも平和の間にも上となり下となりしにあらず、特に僧侶なる婆羅門と王族武人なる刹帝利との間には權力の消長一ならず、時には激しき争鬪を経、其極は終に婆羅門の勝利となり、刹帝利は社會に第二位を占めざるべからざるに至りしなり、此争鬪に關しては正史の傳ふる者なく、又婆羅門は自ら神聖にせんが爲に四姓の別を神より出でたりとなすを以て、此の如き發達の跡を湮滅せんとしたれども、其事跡は物語の中に傳はれる者なきにあらず。

アルジュナなる王曾て隱遁修行の婆羅門ジャマダグニを訪ひ、事に觸れて之に怒り其修法の牛を奪ひ去りしが、ジャマダグニの子なるバラシエラーマ(斧持ラーマ)の義其王を殺せり、アルジュナの子は又之を怒りてジャマダグニを殺せしより、ラーマは盟て刹帝利族を翦滅せんとし、五回の大戦を経て、二十一回刹帝利を掃蕩して餘燼なからしめしたり、其後刹帝利寡婦の請を允して之に子を與へ刹帝利族を回復せりと傳ふ。

此の如き傳説は婆羅門族と刹帝利族との間に權力關係の爲に激烈なる競争ありしを示すに足るべし、又他の傳説にては刹帝利滅盡の後毘舍、首陀の徒婆羅門の婦女を拐帶し、一切の所有は不安にして土地は漸次陥落して海に歸せんとせり、此に於て刹帝利の遺業を求めて一族を再興したりと、此傳説の如きは刹帝利敗類の後社會の秩序紊れ政治の統治滅し、婆羅門も自ら之を處理する能はざりし事實を明に示せり、幾多の變遷幾多の血戦は終に四姓の嚴制に依りて印度の社會を固成したり、婆羅門は神聖なり、祭祀智見を管す、刹帝利は武斷なり、戰鬪政治を職とし、首舍は財を産し、首陀羅は賤業に従事す、四姓各其血統を保存して他と婚せざるを常としたり。

然れども此間に雜婚なかりしにあらず、摩拏法典の語る所に依れば、十六の雜種階級ありしと、此等は各一定の職を執り、或は其職を以て姓の名とし、或は土地都府を以て名としたり、婆羅門と刹帝利の女との雜婚に成れる者は醫を業とし、**ヴィドヤ** Vaidya(醫)又知者の義と稱し、毘舍と刹帝利の女とに生れたるは皆音樂師となり、國土に依りて**マーガドハ** Magadhas と稱し、首陀を父とし、婆羅門の母に生れたる者

四姓外の
劣等族

は旃陀羅 Candala と稱し漁獵を業とたり、此等雜種は後世益増加して其優劣を定むるには父尊く母賤きを以て母貴く父賤きより上位に置きしといふ。首陀は劣等民族なるも、其がアイリヤの言語を用ひ其宗教を奉ずるに至りしを以て四姓の一に列せられたり、其他の劣等民族にして自己の言語を用ふる者は之をニシヤータ Nishada と稱し、又婆羅門の法規以外に立てるはダスヤ Dasya と稱して、特に之を卑めたり。此の如きの沿革を以て四姓を成立したるは蓋し紀元前八百年の頃より五六百年に至る間にありしならん。

第二節 家庭及社會制度、摩拏法典

家經及家傳

社會の組織定まり階級職業の別明なるに及びては、自ら之が規定の確立し來るあり、特に僧侶なる婆羅門族が最上位を占め、宗教が一切の中心歸着となれる社會にありては、此等の法規は宗教制度と相離れず、又其基本全く宗教の信仰に成りにき、此等法規にして先づ成れるを家庭の法規即家經 Gṛhya-Sūtra と稱す、是れ僧侶中

法典

法典の内
容

の諸家傳 Caraka が各其行ふべき祭祀供犠の方法を規定し、之と共に婚嫁、修法、葬祭等の規定を編したる者なり。此種法規の成るに次ぎて、社會全般に關する規律は漸次諸家の定むる所となれり、所謂法典 Dharmaśāstra 是なり、此種法典にして今日に存する者二十種あり、ヤジニヤワルキヤ法典の如きも勢力ありし者なりと雖も、中に最も重要にして又最も社會に勢力ありしは彼の摩拏 Manu の法典とす、此を吾人は法典と稱すれども、一定の立法者が制定して某の主權者が之を發布せし者にあらず、習慣法が諸處に編せられて、終に此一部に大成したる者なり、其源は僧侶に出て、其主意は宗教にあるも、宗教に成れる國民にとりては此の如き習慣法は、吾人今日の法律に於けるよりも遙に大なる勢力を有して、社會の規律は一に此標準に依りて立ちしなり、故に此法典の含有する所は宗教道德法律哲理に亘れる者にして、之を大別すれば六項となる。

- 一、聖知即宗教 Veda
- 二、哲學的見解 Vedānta 又 Atma-Vidyā

- 三、一切の習慣的正行。Acāra
- 四、行政司法一切の規定。Vyavahāra
- 五、刑辟及其賠償。Prāyaścitta
- 六、業果。Karmaphala 即輪廻に關する事項

其が宗教哲學道徳に關する事項は節を改めて之を敘述し、茲には摩拏法典として習慣正行、特に婆羅門族の正行を述べん。

再生族

婆羅門の特權

四姓中清淨にして生れて宗教的儀式を受けて眞に清淨となり第二の生即再生を受くべきは初三のみ、故に此三級を再生。Dvijaと稱す、中にも婆羅門は神の口より生れて神權を握り、最も貴く他の三姓の主。Prabhuなり、故に婆羅門は神聖の事に従事し、他は敢て之を犯さず、其職を守るは正行の第一なり。婆羅門族は現世に於ける神の代理者なり、故に之を侵害する者は即神を侵害するに同じ、王者も決して此一族に課税するを得ず、若し一婆羅門をも餓死せしめんには、其一國は舉て饑饉の厄に陥るべし、婆羅門は神力を有するが故に己を害する者

婆羅門に對する法

には直に怨を復すべく、又緋月を變して満月となすの力ありとさへ傳へたり、此故に他の三姓は畏懼婆羅門を尊敬し、之が意に悖らざらん事を勉めざるべからず、婆羅門に對してフムといふも罪あり、少しく粗漏の言を用ひんには之が謝罪として先づ水に身を淨め、斷食して恭敬畏怖の意を表せざるべからず。婆羅門は祭祀供犠の外一も産業を營まず、一に法捨に依りて生活したり、後世婆羅門族の數は甚しく増殖したるも、國土の豊沃は優に此遊民を養ふに足りしなり、然れども族衆多きに及びては自ら多く施物を貪らざるべからず、此を以て婆羅門は法捨の少しにても多きを勸め、此を以て天に生るるの最良法なりと教へたり、法典十一章四十に云ふ。
 僅少なる施物。Alpa-dakṣiṇāにてなしたる祭祀は感官、名譽、天國、生命、令名、後昏、家畜を破滅す、此故に優に法捨をなすに足るの金を有せざる人は祭祀をなす勿れ。又十一章六にいふ、
 何れの人も其力に應じて婆羅門に財を與へよ、此くすれば死後其人は天上に生るを得。

婆羅門が如何に貪戀にして、迷信に財を買ひしかを見るに足る者あり、地獄の沙汰も金次第とは實に此をいふ者なり。
 婆羅門族の増殖は一族盡く同一の業務を取るを得ざるに至らしめしを以て、時宜に依りては俗務をも執るを許し、婆羅門中にも種々の業をなし、幾分を分業の行はるるに至れり。

婆羅門の
六正行

婆羅門の正當に行ふべき職六あり、

Adhyayana 吠陀を誦讀す、

Adhyāpanam 吠陀を解説し又之が誦讀を人に教ふ、

Yajñam 犠牲を供す、

Yajñam 供犠式を助く、

Dānam 施與す、

Pratigrahaḥ 施與を受く、

之を婆羅門の六正行 *Ṣaṭ-karmāni* と稱し、特に始の三は他族の決してなす能はざる所なるを以て、之を三特權 *Tri-dharmāḥ* と稱す、後世には婆羅門にても刹帝利又

婆羅門の
生活

は混合の業を營みし者あり(法典十章八〇)。
 婆羅門は生れながらにして僧なり、然れども其修學修法各定法あり、其生活は四期の階段 *Āśrama* を經ざるべからず、幼時は父母の膝下にあるも、少しく長ずれば家を出でて師 *Guru* に従ひて吠陀聖教を學び、壯年に至れば家に歸りて妻を娶り家事を修す、年少しく老めれば山林に入りて修道し、終に成道して清淨なる乞食僧として生活す。

梵志時期
と拂淨式

師に就きて修學する間は即徒弟の身分にして、之を梵志 *Brahmacārin* と稱す、此間永きは三十餘年短きは八九年なり、梵志は一切の修業學習をなすと共に又誕生より此期を終る迄の間に所謂十二の拂淨式 *Saṃskāra* を行ふを要す、此に依りて惡業を滅せんが爲なり。

生誕以後
の拂淨式

婆羅門の生るるや其懷妊より此拂淨式を行ひ、誕生より以後或は太陽を見せしむるの式を行ひ、或は米を食はしむるの式を行ふ、三歳に至れば頭髪を剃す、八歳にして入門 *Upanayana* の式を行ふ、此式は懷妊以來第九の拂淨式にして最も肝要の式なり、三條より成れる繩 *Yajña-Upaniṭa* を左肩に掛け斜に身體を横ぎりて右の腕に

就學

及ぶ、此式に依りて誠の精神上の生命を得るとなす事、恰も基督教の洗禮の如し、此式は師の監督にて行ふが故に、同時に就學の式となり、此より後は吠陀を誦讀するを得るに至る。

師に就きて梵志として學習する間には一度雉髮の式を行ふ、梵志は日に水に浴して神に水を捧げ、又日に近村郊外に出でて施與を受く、梵志は一切の遊戲に遠ざかり肉欲に走らず、又何物にも害を加ふべからず、特に其師を尊重するは法典の命する所なり。

母を敬へば彼は地上の世界を得、父を敬へば彼は中空の世界を得、常に精神上的の師を尊重すれば梵の天界を得、(三章二三三)

梵志の修業を終れば、則師と共に家に歸る之を還家式 *Samavartana* と稱す、家に歸りて婦を撰びて之を娶る之を第十二拂淨式 *Vivaha* となす、婚姻は婆羅門がなすべき宗教上の義務なり、而して法典は此に就きて詳細の制限規定をなせり、赤毛の女、贅指を有する者、多病なる者、多毛若くは少毛なる者は娶るべからず、痔疾ある血族、勝疾、胃弱、癩病等の家よりは娶るべからずと、以て婆羅門族の血統をして清淨健

還家及婦
姻大祭祀

全ならしめんとしたる者の如し、婚姻の方法亦八種の規定あり。

婚姻を終れば則家居して婆羅門生活の第二期に入りて戸主 *Grihastha* となる、戸主なる者は日に家庭の祭祀正行 *Griham Karma* を行はざるべからず、特に五種の大祭祀 *Mahayajna* は時に應じて最鄭重に之を行ふを要す、五種とは

Brahma-yajna 吠陀を誦して聖人を祭る、

Pitri-y. ニンドハ式を以て祖先を祭る、

Deva-y. 阿姑尼、因陀羅等諸神を祭る、

Bhuta-y. 米粒を以て一切群類諸神、惡鬼を祭る、

Manushya-y. 人を厚遇す、

吠陀を誦して諸神を祭るの徳大なるは論ずる迄もなし、印度人は之に次ぎて特に祖先の祭祀を重んじ、其儀式の如き十二の多きあり、印度人は特に家門 *Gotra* の觀念に富みしを以て、此の如く祖先の祭を重んせしなり、其儀式の一を擧ぐれば、先づ葬送を終りし時より爾後十二月間は時々之を行ふ、此儀式には非常の費をなして厭はず、十分の誠意を盡さんとす、**フ井ラ** 氏のいふ所に依れば近頃ベルゴルの一

家居と五
種大祭祀

婆羅門の食物

婆羅門の妻

出家

富豪は此儀式の爲に五萬磅を費せしと、此後は毎年祥月を以て祖先を祭る。婆羅門は獸肉魚肉を食はず、又酒類を飲用するは其五罪の一なり、然れども祭祀の爲に殺したる者にして吠隨の讚誦にて清淨神聖となりし肉は之を食ふを得たり。婆羅門の妻女は徹頭徹尾其夫に服従從屬し其夫を神として *Devavat* 尊敬せざるべからず(法典五章一五四)夫と共に食ふ事を得ず、吠隨を誦せず、祭祀には夫を助くるのみ、自ら祭をなす能はず、婦女の位置は此の如く屈從的なりしも、其が家内にて子女に尊はるる事は甚大なりき。又後世の寡婦殉死の如き慘法は此時代には未だ生せず、寡婦の貞節は之を讚稱したるも、亦敢て其再婚を禁せざりき。婆羅門戸主として其職責を盡し、子女漸く長し頭上霜を戴くに及べば、則家を棄てて山林に入る、是れ祭祀を以て神に盡し、子女を生みて祖先に答へ、吠隨を誦して聖人に酬ひ、所謂三負債 *tri-bandhi* を消却したるを以てなり、山林に入りて業を修する森居 *vānaprastha* の時代には、一切の肉慾を禁じて草木花果に衣食す、此期の後には乞食として處々を徘徊し、第四期の乞食即 *Bhikshu* 生活をなす、第三期第四期に就きては詳細の規定嚴密の制限なかりし者の如く、又婆羅門の盡く此修行を

其外の再生族

政治と神權

なしたるや否やも甚疑はしとなす、但彼等は第四期の苦行生活を以て漸次世間の執着を脱し、依て以て解脱を遂ぐべしと信じたりしなり。此二期間に於ける所謂苦行 *tapas* は、其家居の時に比せば一種の苦行なりといへども、甚しき苦行にはあらず、然れども後世の慘烈なる苦行主義の端に既に此に成りしといはざるべからず。婆羅門以外の再生族にても拂淨式を行ひ、之を以て第二の生を得たりとなす、但其方法時期の如きは固より婆羅門と相同しからず。

摩拏法典の命する所の社會組織即正行は大畧右の如し、此より少しく政治組織を叙して當時社會の狀態を明にせん。政治の大本は王權にあり、王權は即神權なり(七章三、四等)、神權に依りて如何なる專制をもなすべしといへども、特に王者は範典として其祖先に則らざるべからず、祖先の如く民衆に對せよ *variete pitri-van nishu* とは王者の最大格言なりき、八大臣の中首坐大臣は必ず婆羅門たらざるべからず、一切政治の最要目的は婆羅門を保

護するにあるを以て、兵權を以て之に對するは固より、之に課税するを得ざりき、裁判は、王自ら之をなすも必ず婆羅門の陪審を要したり。刑辟に至りても階級に應じて輕重ある事、我國の封建時代に同じく、婆羅門に對するの罪は頗る重罰を被り、而して婆羅門は如何なる罪あるも之を死刑に處するを得ず、第一の重罪には婆羅門を殺したる者、婆羅門の金を盗みたる者、師の妻女と通じたる者を數へ、第二の重罪には自己より高き姓に屬すと僞稱したる者、下劣族の女と通ずる等を擧げたり、其目的が専ら四姓制度を維持するにありし事知るべきなり、而して四姓制度の維持は即當時社會組織の維持たりしなり。此等の罪を罰するには種々苦行的の體刑を用ひたり、或は少食を命し、或は斷食し、或は一切の飲食を熱くするあり、或は階級の特權を奪はれて下劣の姓に移さるるあり、然れども摩拏法典に命する所の刑辟は現世有形の刑罰のみならずして幽界に亘りて後生地獄の刑をも一々法典に明記したり、即是れ輪廻の境にして、其果は盡く前生行爲の結果に應ずるなり、其叙述は之を後節に譲り、直に婆羅門宗教の叙述に移らん。

第三節 婆羅門教の宗教思想

婆羅門教の宗教觀念は其基本既に優波尼沙土に大成せり、然れども優波尼沙土は哲學的考察に出でたる抽象的思索なり、而して婆羅門の宗教は即此哲學思想を極めて具象的に抽出し、特に之を日常倫常の間に適用し、以て一般國民の指導となさんとしたり、此故に思索の大本は優波尼沙土の外に出でざるも、之が外形に至りては異なる者なきにあらざる、其哲學的觀念は多くは神話的に化したり、特に其宗教道徳の思想が社會を支配するに至りて、諸家の法典特に摩拏法典に大成するに及びては、其教權を確立し、其德行上の命令は威嚴を有し全く他律的なるに至れり、以下順序之を叙せん。

一、梵天と世界の成立

優波尼沙土の思想家が到達したる宇宙の根原主義は絶言過境の梵なりき、此梵は婆羅門教にありては頗る神話的人物の性質を帯び來りて、最高神なる梵。Brahma。

唵

man (男性)となれり。其が萬有の主。Prajapatiとして又一切の個人精神に宿れる精神。Purushaとして一切に遍滿せる大精神。Mahatmanとしての特質は特に顯はれ來れり。梵は絶對言語に絶するが故に、優波尼沙土にありては、其れ等の語を用ひしが、此頃には特に唵なる音を用ひ此一音をなせるアウムの三音は、各梵の眠と其覺醒と其再び眠に歸るを表し、世界の終始梵の絶對を包括したる貴重なる神秘語なりとせり。此説は既に優波尼沙土に存じ、摩拏法典に至りては此一音能く三吠陀を表すべしと稱したり。(十一章二六五)

世界の開

法典は世界の梵天より開發するを説きて曰く、(第一章五以下)

此世界は恰も眼。Prasupitamの中にあるが如く、不可知不可測に只暗。Tamo-bhū-tmaの中にありさざる時自存。Svayam-bhū 自己の本質より諸の物を生せんと思ひて、先づ思想にて水を造り、其中に生ある種子即卵を投じたり、其より彼は自ら一切世界の父として梵天の形にて此卵の中に生れたり、次に自己の思考。Dh-yāna にて卵を二に割り、此二部より上には天と下には地と其中に氣界と及八界と八界の守護を組成したり、彼は自己の本質を分割して半は男半は女となし、

其女よりヴァライジを生し、其より一切生物、第二の祖なる摩拏を造りたり、其より梵天は大精神より意。Manasを取り、次に我慢。Ahaikāra、次に五唯。Tan-mātrās 來り、此より五大、三徳及感覺出で、感覺の世界成れり。

此の如く世界は梵天の意志によりて其より分出して成立せり、此成立の間には喜憂、闇、三徳の配合に依りて一切の生物群類各其處を得、婆羅門は梵天の口より、刹帝利は其腕より、毘舍は其腰より、首陀は其足より出でて一切の秩序を立てたり、其初の人類たりしは即摩拏なり、此本源の摩拏他の六摩拏を作り、相次きて人類を生みたり、人類を生むは古代思想にては即世界成立の始に外ならざるなり。

世界の四時期

世界の成立は梵天の慾より出でたり、然らば其結果なる世界は必ずや善なる能はざるべし、優波尼沙土の哲學にては無差別より差別の生ずるを絶對的に惡となし吠檀多哲學は之に據りて全然無宇宙論を唱へたり、然れども通俗的なる婆羅門教にては一種の分出論を以て世界の成立を説くを以て、之を以て絶對原始の惡となさず、世界は其始には甚しく惡しきにはあらざりしも、後漸次惡に赴くと教へたり、世界の始終に四時期ありて、毎時期惡を増長す、四時とは一にクリタ時代 Krita yuga

クリタ時代

二にトレタ時代 Treta y. 三にドワーバラ時代 Dvāpara y. 四にカリ時代 Kali y. 是なり、此名稱は皆養の目の名に取りて其善惡の度を表したるなり。
第一クリタは即事物生成の時代なり、群類皆信神有徳にして、羅刹、龍神、夜叉、捷陀婆の類世に存せず、吠陀は尙未だ三に分れず、地は豊沃にして人は勞せずして食を得、善人のみ昌へ、世に老衰悲痛の苦なく、暴力もなく、嫉妬もなく、恐怖もなく、一切の人は皆信者瑜祇なりき、四姓各其職を盡し、崇拜儀式習慣各其法を守り、世は純樂至幸なりき、此の如き者即婆羅門教理想の状態なりとす、四姓の別、習慣儀式の一致の如きもの其理想なりしを思へば、此頃婆羅門教が如何に固陋の弊に走りつつありしを知るに足るべし。

トレタ時代

第二のトレタ時代に至りて、正義は其四分之一を減し、祭禮茲に始まり、人は各其信神の應報を求めて諸種の儀式を作るに至れり。

ドワーバラ時代

第三ドワーバラ期には正義其半を減じ、吠陀四に分れ、之を學ぶ者甚多からず、多くは其一部に通ずるのみ、儀式習慣に異同を生じ、人には憂徳秀てて情に走り易く、善人も時には惡運に遭遇するを免れず。

カリ時代

現時は第四のカリ即最惡なる争闘時代にあり、正義は僅に其四分之一を止め、世に不信の人多く、祭祀崇拜地に落ち、罪惡不運飢餓貧困世に横梁するは今の時の状態なり。

厭世觀

婆羅門教は疑もなく現世を以て最惡なりとなす多苦觀なり、假令世界は絶對的惡にあらざるも、其成立して三徳相分るるは即惡の生ずる所以にして、亦實に世界は漸を以て惡に歸して今日に至れり、此種の信仰は之を諸處の國民信仰に發見し得べし、支那人の黄金時代は太古にありて今の世を不満足とせり、猶太人はエデンの樂園を創世の始に夢みて現世の罪惡を觀せり、波斯人はオルムツト善神のみ力ありし始を想ひて今のアーマン惡神存する時代を慨せり、思ふに古代の人民は世苦の重きを感じて茲に宗教心を發し、希望を將來に置かず却て理想を過去に取りたり、是れ實に宗教的翹望が未來の淨樂を憶念しながら、之を轉倒し爲に未來淨樂の境を世界の經過に望まず、空望を過境の上界のみに馳せしなり、此錯誤は永く宗教の痼疾となり今日に至りても尙除き難きを致せり。

二 罪障と輪廻

九八

世界の成立は悪なり、一切が其本源なる梵天に歸入する迄は到底悪の悪たる所以の消滅すべきにわらず、世界的生存は即罪障に外ならず、世苦の多きも輪廻轉生も皆此が爲に來る、此故に此苦境を脱せんと欲する者は即此世界を脱せざるべからず。

世は最悪の世なり、生は罪障に成れり、然らば現世にありて奚ぞ純樂を冀ふべけんや、印度人は深く此觀想に沈みたるを以て種々慘烈の苦行も敢て辭せず、吠陀時代の快濶なる氣象は何れにか夢散し、炎熱溽暑身に迫り、淫雨時に月に亘るの間に靜坐默考して愈其多苦觀を長し、世を病熱惡夢と觀し、自己の罪障を思ひ、宿命果應の抗し難きを悲みたり、故に印度の諺に、

自己か蒔きたる種子は善きも悪しきも之を食はざるべからず、
といひ、又

人の頭蓋には其宿命を刻せり、

といへり、此の如きの宿命の信仰ありしを以て、此頃既に占星術の出づるあり、摩拏

の法典(三章一六二)に占星者が祭祀に與るを禁じたるも、一般の信仰は容易に之を去るべくもわらず、紀元前五世紀頃には占星術は嚴然一科の學をなすに至れり。宿命とは即人々がなしたる行爲の果報に外ならず、自らは何れの時何事をなして此命あるやを知らざるも、過去無始以來の果報は免るべくもわらず、吾人の罪障は無始の積集なり、此罪障と此果報の爲に吾人は永く諸の生を享けて輪轉生死し來れり、吾人人類の悲むべき命運も四姓賦性の別あるも、又一切群類が諸種の苦を嘗めつつあるも皆罪障の果報賞罰にして、輪廻の一階級のみ、前生の因は現世の果となり、現世は即未來世の因となる、賞罰果報は三世に亘りて盡くる事なし。婆羅門の徒は此の如く厚く罪障の深さを觀し、之に依りて輪廻の教を立て、以て其宗義の中心となし、又世の道徳を維くの大本となしたり。

世界萬物の差別あるは喜憂閻三徳のなす處にして、輪廻の諸境界にありて諸の特性差別あるは、此三徳の支配の下にあり、善行の者には喜徳秀てて優れる生を享け、悪人は憂に蔽はれて下劣に生る、摩拏法典に曰く、

人は各其行爲に應じて、或は痴、或は瞋、或は疑、或は畸形に生る、自己の罪を償はざり

し者は、生れて治すべからざるの表號を有せり。(十一章五二)
ヤジニヤブルキヤ法典に曰く、

精神を知り、清淨柔和にして正行を修し、吠陀に通ずる人は喜。Sattvaの徳を有する人にして天に生る、善をなすを喜ばず、心堅固ならず肉慾に耽る人は憂。Rajasの徳を有する人にして、人と生る、睡眠を貪り残忍の行をなし、貪慾にして神を信せざる等の人は闇。Tamasの徳を有する人にして、畜類に生る。(三章一三八—九)

此の如く輪廻生死の諸境界は其行爲に應ずるの性を有すと信じたるより、婆羅門教にては諸の行爲を諸の動物等に配合して死後來世の運命を教へたり、例せば果物を盗みたる者は猿となり、馬を盗みし者は虎となり、米を盗みしは鼠に生れ、最下族の女と通ずる者は餓鬼となる等詳細の記述をなしたり(摩拏十二章、動物の外植物に生るるもあり、師の寢床を犯したるは草となり、或は死に當るの罪を犯したる者は永切の間然るべき地獄に落つと、地獄即ナラカ ナラカ Naraka は法典の四章八八以下に二十一地獄を擧げたり、罪の輕重性質に隨て罪人を苦責するの所たり、佛教の地獄に存する叫喚黒繩無間、劍河等の地獄既に此に記載あり、某の時間地獄にあれば

之を出でて下劣の生を受く。
之を要するに婆羅門教に於ける輪廻の境界は行爲に應じて上中下三級あり、之を細別して九となす。

- 高等—神位
 - (喜徳)
 - 上 梵天、造化神、自在天等
 - 中 聖人、諸天、信者等
 - 下 仙人、婆羅門等
- 中等—人位
 - (憂徳)
 - 上 捷陀婆、天女等
 - 中 王者、刹帝利等
 - 下 從者、博徒、競争者等
- 下等—獸位
 - (闇徳)
 - 中 象、首陀、虎、猪等
 - 下 無生物、魚、蛇、昆蟲等

婆羅門教の輪廻説は此の如く極めて有形具象的に走りたり。
吠陀時代には僅に死後報償の信仰ありしも未だ輪廻と稱すべき觀念なかりき、婆

輪廻説の
由來

羅門教に至りて此信仰盛に、特に摩拏法典に至りては、一々輪迴生死の規定を立てたる事此の如し、此の如き變化は氣候風土の變に因るとはいへ、果して印度アーリヤ民族の思想のみに出でたるか、將他より之が種子を輸入したる事なきか、是れ古來學者の多く疑ふ所にして、又僅々五百年足らずの年月間に此の如き大變化をなしたるは最考究すべきの問題なりとす、一派の學者は此信仰を以て元ドラヴダ民族の有せし所にして、アーリヤの之に接するに及びて之を輸入するに至りしなりと斷せり、蓋吠隨の季世即七八世紀頃に當りて、アーリヤの東南に移りて土族と接するや、一般の人民は土族の崇拜せる溼婆なる神を拜するに至り、之が爲に哲學思索の上にも少なからざる影響を及ぼせしを思へば、此説は直に排すべき者にはあらざるべし、固よりアーリヤ族移住の結果風土の變よりして其氣質に變化を及ぼして事此に至りし者あるべしと雖も、亦此と同時に土族より此の如き新信仰を入れて、漸次其方向に走りしならん。

三、世界の還没と解脱

梵天より分出したる世界は其源に歸らざるべからず、苦惱に沈淪せる群類は苦の世界を脱せざるべからず。

大時期と
劫波と

世界梵天より出でてより、善退き惡進み、其度に從て四時期あり、此四期を總括して一。大時期。Mahayuga とす、此の如き大時期相次ぎて一千期に及べば世界一切は再び梵天の中に還没す、是れ即梵天が眠に入る者にして、一千の大時期は即梵天が眠より醒めて世界を現じ再び世界を自己の中に收めて眠に入る一日なり、此梵天の一日を一劫波。Kalpa と稱す、劫波の終りには萬物一切梵天に還没歸入するが故に、一切處に現象差別あるなし、此時に當りては萬物其世苦を脱して絶對に歸入せしに同じ、然れども此還没の状態は絶對にあらず、梵天再び眠より起きて世界を開展すれば、萬物は再び苦惱の現象界に入らざるべからず、世界は劫波毎に開發し劫波毎に還没し、成壞盡くる期あるなし、即是れ尙輪廻を離脱したる者にあらずして眞の解脱にあらず、眞の解脱に到達せんと欲する者は劫波成壞の外に逸脱する方法を求めざるべからず。

解脱と作
法と

眞の解脱を得るの法他あるなし、吠隨及法典の聖教に隨順して正行を講ずるある

のみ、即能く四姓の義務を履行し、神を祭り、祖先を祭りて供物を供する事を怠らず、又苦行禁欲以て世の繫縛を脱するを要す、此等の方法は即作法。Brahman に依りて解脱を得んとする者にして、聖經法典が命する所に従て此等作法をなせば、人は漸次善の果報を享けて優等の生を得天上の果を得ん。

作法の解脱は何人も之を習得し得べし、然れども其解脱は漸次上位の生活を得るにあり、未だ真正の解脱といふべからず、婆羅門は一般の教としては作法の解脱を説くの外なかりしも、其裏面には尙之を補ふに知識。Jñāna に依りての解脱を信したり、即知者たる者は作法に依りて正行を履み苦行禁欲に依りて漸次世の繫累を脱し、而して後に心を眞實實在梵天の上に凝らし、眞理を知り得ざるべからず、既に眞理に到達して世界の眞相を知り、梵天の梵天たるを了知せば、明知徹透して茲に始めて現象世界を離脱して實在の梵天に歸入すべし。

知識的解脱は眞正の解脱なり、然れども是れ獨り哲者のなし得る所にして愚者の企て及ばざる所なり、特に婆羅門教の律法にありては知識眞理の事に參與し得べきは婆羅門族のみ、他族にして之を企つるは却て正行にあらす、然らば解脱は婆羅

眞の解脱
と知識國民的宗
教として
婆羅門
教の

門の外之に達する能はざるなり、然れども婆羅門教其れ自身は社會的階級的宗教なり、一切の人の解脱幸福の如きは其期する所にあらす、普通の救済の如きは婆羅門教の宗教的意識には未だ夢想せざりし所なり、婆羅門以外の人民か解脱を得ざるも彼等は少しも之を怪まず、他族一般の人民にありては、只其階級の義務を履行して漸次之を堆積し、婆羅門に生るるの善果に依りて何れの時にか解脱究竟の目的を達すれば足れり。

第四節 懷疑と詭辨、順世學派

婆羅門教は其内面には高尚なる哲學思想を含有したるも、其宗教的道德的意識は未だ社會的又因習的の偏固なる境域を脱せざりき、此偏固なる性質は婆羅門教の全部に顯はれ、其社會的道德も、其宗教的希望も、一に此支配の下に動けり、而して其弊害の最も著しく顯はれしは、婆羅門の專横横梁にあり、摩拏法典に明なるが如く、當時の社會には婆羅門は絶對の權力を振ひて他の人民を苦め、彼等の一舉一動をして己が意に従はしめざれば止まざらんとせり、他の人民は彼等の專横に苦めら

婆羅門の
社會的
希望

れつつ進ては自由に動く能はず、又退きても其宗教に依りて自己の安立をなす能はざりき、加之婆羅門族自らも終には虚形空文に支配せられ、其信仰思想は化石の如く、一も自由の活動なく、一も中心を満足せしむるに足る者なかりき、此の如き不安落莫の人民は何物をか求めつつ頻に煩悶せり、煩悶して未だ新なる大光明を得ず、當時思想界の一部が頻に懷疑を提出し、又其果は詭辨に陥り、道徳を否定して能端なる物質主義を唱道する者を出だせり。

優波尼沙土の哲學思想は既に考察の自由を養へり、懷疑の風潮亦此間に萌せり、吠陀の時にすら梨俱二卷一二の五、八卷一〇〇の三既に因陀羅の存在を疑ふ者あり、哲學時代には迦比羅の如き既に吠陀の三過失を數へ敢て其教權に服せざりき、其後には吠陀を無意義の蒐集なりと罵詈せる者あり、又摩拏の法典二の二に、

見解。Heu-cāstraを以て正法の二根 Gruti, Smṛti を容れざる者は、正統者は之を無信家 Nāstika にして吠陀を誹謗する者として破門 Vāhishkāryahすべし、といへるが如き、當時吠陀の教權に對して懷疑的風潮の如何に盛なりしかを見るべし。

自由思想
と懷疑論

拘除黎

ブ
ラ
ハ
ナ
迦
葉

新
婆
迦
學
派

新
婆
迦
の
感
覺
主
義

懷疑主義は吠陀及婆羅門の教權を否定せんとせり、此自由思想の風潮は詭辨に一時の通れ場を求めぬ佛も曾て貶せし拘除黎 Gosāla は續命論派即阿時縛迦派 Ajivika の創唱者として、吾人の生命は只天然の原因にて維持せらるるのみにして、吾なるものに特別の力あるにあらず、生命去れば賢も愚も共に苦惱を解脱すべしと論じたり、此種の詭辯主義は思想界の一面に横流し、詭辨を以て行爲の善惡應報なきを論ずるブ
ラ
ハ
ナ
迦
葉 Pūrāna Kācyapa あり、聖人覺者の敢て尊ぶに足らざるを主張せしサトヤカ Satyaka あり、此道徳否定の物質主義を最極端明白に主張したるは新婆迦 Carvāka が順世 Lokayata 學派の現世物質主義なり。

新婆迦の學説は古代の哲學者フリハスプチ Brihaspati に出づ、其説は一切の教權を用ひず、聖教なる者を拒絶し、只吾人が直接に見知する外に信すべき者あるなしとせり、此故に推理に依りて得し所の者は何等の効力あるなく、普遍命題にて事物を斷定するが如きは戲想界の虚談のみ、又事物の間に必然の關係を認め、或は内面的知覺に依りて事物の關係を云ふが如きは、吾人の直接に感覺する以外の論談にして決して信するに足らず。

所婆迦は直接知識の外一切を拒絶せり、此を以て世界には可見可觸の物質即四大の外に一物あるなし、此等四大相集まりて一切をなし、吾人の身體をなし、感覺知識此に依て始めて能くすべし、身體滅すれば吾人の感覺なし、感覺の外に精神ありとなすが如きは愚論のみ、四大此世界をなし諸の現象を呈するも、物質の外に何等の原因能力あるにあらず、彼等が自然に發動し自由に變遷するのみ。

世界此の如し、然らば人間は其感覺の欲する處に従て快樂を獵するあるのみ、身體のあらん限り其欲する處を行ふは、吾人究竟の目的にして、世界以外快樂以外に何等の理想界あるべきにあらず。

所婆迦は感覺主義、物質主義、自然無因論、快樂主義を主張せり、彼が派は歌て曰く、
天あるなし、解脱あるなし、精神あるなし、他界あるなし、行爲の應報あるなし。
諸の儀式は知力度量なき人が生計の方便のみ。
若し犠牲を供して其供物天上に上るならば、何故に人は其父を犠牲に供せざるか。
若し供物が死し逝きし祖先の腹を充たすならば、何故に旅人は糧食を齎らすか。

若し地上の供物天上に達するならば、何故に屋下の食は屋上の人を養はざるか。
生命のあらん限り、安樂歡樂を盡せ、汝の友より財を借り來りて美食に飽け。
其快樂主義の極端なる驚くに堪えたり、婆羅門が教權を握れる時に當りて此の如き學派の出づる、寧ろ怪むに堪えたりと雖も、是れ形式的宗教の反動のみ、徒に高遠なる唯心論、古典の外を知らざる教權主義、酷薄嚴厲なる階級制度、殘忍にして虚飾的なる供犠祭祀、慘烈忌むべき禁欲苦行は此の如きの反動を惹起せしなり。

第四章 佛教の革新時代

第一節 宗教改革の氣運

社會事物
の不振

印度の社會的事務宗教道徳は此の如くにして、紀元前五六百年の頃には全く硬化化石の極に達せり、一切の事物は婆羅門の支配左右する所となり、信仰の教柄も社會の主權も婆羅門の占むる所となり了れり、而も彼等自らも亦精神なく活氣なき僧侶の一團となり、徒に威力を弄び只管形式定規に拘泥して自らをも社會をも毒害しつゝあるを悟らず、彼等は用なき犠牲を供えて神の好意を買はんとし、慘烈なる苦行に己の身を苦惱し、獨り自ら尊しとして他を瞰下蔑視したり、社會の事物總て是れ慨嘆すべき事のみ。

加之、思想界には詭辯論物質主義横行して光明の出路あるなし、區々たる言論思想を棄てて大慈悲を衆民の上に垂れ、大勇猛を起して稜苦與樂の大法音を宣布すべきは正に是れ此時なり、此時に當りて如何なる救済の大音出づべきか。

宗教革新
の眞相

凡そ宗教の革新起るや、一見すれば、在來の腐敗宗教に反對して全く新しき路を取

るに似たりと雖も、其内部の關係を觀し來れば、新宗教は却て古宗教の眞正の繼承者にして、其蒙蔽汚穢の外形腐敗壞亂の垢汚を除き、其内部の清淨なる實質を開發するにあるを見ん。

遊世修行

婆羅門は世俗的權威を弄したり、然れども其隱道修行をなす者に至りては、至心道を求むる清淨なる求道者なりき、其妻子を捨て、其財貨を捨て、乞食として四方を周遊し道を求むるの點に於て、彼等は頗る人の同情、少くとも憐愍を惹くに足る者あり、此を以て婆羅門の專横と其虚儀空文に飽ける人心は一轉して彼等の隱遁的生活に同情を表せん、此に於て世の不安を醫するに急に、時世の非を見るに忍びざる宗教的人物は其種姓の如何を問はず相率ひて婆羅門の教權以外に良心思想の自由なる生活をなさんか爲隱遁的生活に其煩惱を滅して清淨恬澹の生を送らんとしたり、隱遁者即沙門 Samana 若くは牟尼 Muni の生活は婆羅門の外に看過すべからざる勢力となれり、婆羅門の隱遁生活は新精神にて行はるるに至れり。

教團生活
と沙門

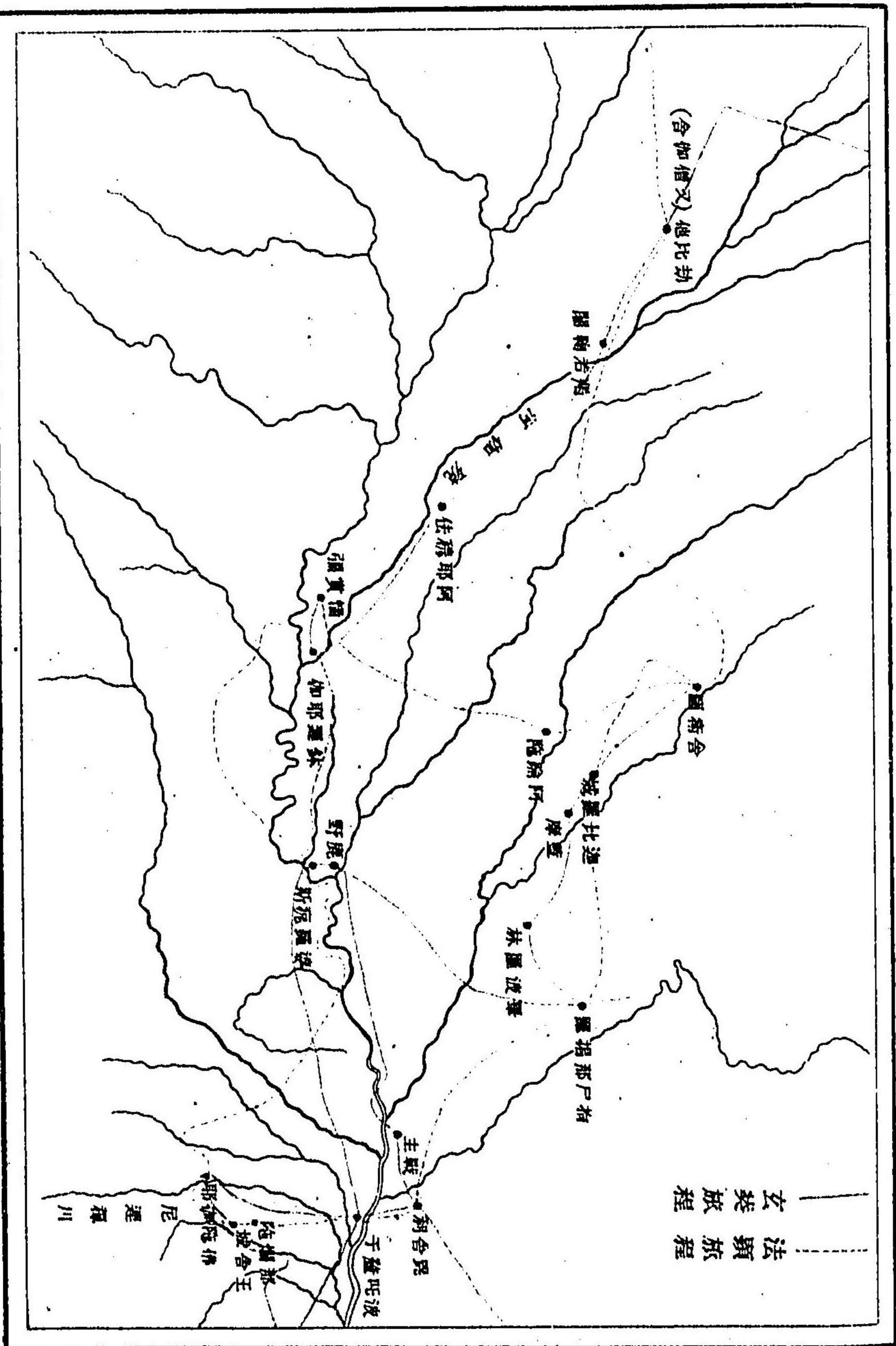
沙門生活と共に發達せしは教團の生活なり、哲學時代にありて教師か自説に依りて弟子を集めし風は、今沙門にして有徳なる者の周圍に幾多の弟子を集め、處々に

佛、善
那、佛、善

即、善、那、教
即、善、那、教

沙門淨行士の團體を作り出だし、當時の婆羅門的儀式習慣に不満にして光明路を求めんとするも、單獨にては之を能せざる人々は、各有徳の沙門を求めて之が教化に依りて共に沙門の行を修せんとしたり、而して其中心たる沙門は弟子の尊敬する所となり、或は一切智を得たる覺者即佛 Buddha と稱せられ、或は一切世苦を超越せし勝者即善那 Jina と稱せられ、幾多の沙門之を圍繞して婆羅門教權以外に教團を作りぬ、此の如き覺者勝者及其教團に就きては事實の今日に傳はれる者は多からずと雖も、釋迦に就て教を乞ひし跋伽仙人、阿羅藍及鬱頭藍の如きは蓋し此種の隱者なりしならん、當時の教界刷新の氣運は此の如き形式にて動きつつありしなり。

○閣伊那 Jaina 派の開祖なる若提族の遁世者 Nirgrantha Jñatiputra と稱せられし跋伽摩那 Vardhamana は蓋し此種善那の大なる者なりしなり、彼は毘舍利近郊の刹帝利族に生れ、二十八歳にして悟る所あり、斷然妻子家財を捨てて出家し、十二年の間四方に周遊して乞食生活の中に道を求め、終に萬有知識 Kevala を曉得して善那となりき、此善那も亦多く其徒を得て三十年の間諸方を教化し、恒河下流地方に



行旅之徒玄及顯法二羌地聖之教佛

一個の勢力をなし、其流派後世には大に發達せり。
蓋し當時恒河地方は割合に刹帝利の多き地にして、婆羅門に不満なる者多く、且哲學的思想の盛なる地なりしかば、淨行士の教團も多く此間に出でしなり。
新なる光明の希望は隠々として印度を動かしつつありき、此時勢を負ひ遁世淨行と教團感化との方法に依り、幾多の耆那[○]特に跋[○]陀[○]摩[○]那[○]より偉大なる感化を及ぼせしは、同じく恒河中流の刹帝利族に出でて佛[○]陀[○]となりし釋[○]迦[○]族の牟尼其人なりとす。

第二節 佛[○]陀[○]の一生

新氣運の寵兒たる釋迦族の佛[○]陀[○]は、紀元前六世紀の末に、恒河中流の一國迦[○]比[○]羅[○]城[○] Kapilavasthu の城主淨[○]飯[○]王[○] Suddhodana の長子として生れぬ。

迦比羅城は、雪山北に聳ね恒河南を流るる所、幾多の河流が注ぎ來りて土地を豊饒にする所にあり、西印度補[○]多[○]羅[○]に國[○]せし釋[○]迦[○] Saikya 族の一族東して此豊沃の地を占め、方三四十里の中を支配しぬ、國土固より大ならずと雖も、釋迦族元來の倨傲性

悉達太子

は國土財寶の豊富に養はれて宛然たる一王國をなし其王室は華美奢侈の生活を送りき而して其王淨飯年老て嗣子なく憂慮措く能はざりし時に當りて端美の男子は后妃摩耶^{マヤ}に依りて二月八日陽春花笑ひ鳥歌ふ時藍^ニ泥^ニ Tumbini 園中無憂樹の下に生れたり父母國民の歡知るべきなり父王は此子の爲に美名を擇びて悉達^{シッタタ} Siddhattha 即功成就と命しぬ悉達の母后は早く世を去りしも其叔母の手に養育せられ一族の寵愛は此子に集り父王は特に此子の教育に意を用ひ其七歳の時より婆羅門なる毘奢蜜多羅^{ビセキダラ}に就きて吠陀以下の學を修せしめ又釋提婆^{シッタタ}に就きて諸の武術を講せしめたり太子の穎悟なる直に諸學諸術に通達して老成の人を凌ぐに至れりと傳ふ父王は又此一子を幸福にせんが爲に其歡樂の具を盡くし林苑宮殿の美を極め蓮池波靜にして微風芬香を送り來る間に美姬立て舞ひ姪女篋篋を執て歌ひ現世の快樂を盡さしめたり其長じて十七歳となるや父王は國中の美女中より太子の従妹耶輸陀羅^{ヤソダラ} Yasodharā を娶りて其妃となし太子は福德圓滿の中に夫婦和合の生を送りぬ。

此歡娛和樂の中にも太子の深奥なる情緒は一種の悲哀に動かされつつありき會

太子の悲

て田園に出でて農夫の犁下一小蟲の殺さるるを見ては憐愍に堪えずして一種悲痛の情に打れたり彼の思想は又稍自己の快樂も亦將た如何に永續すべきやを考へ始めたり其の門を出でて白髮落齒杖に倚て僂歩するの老人を見るや太子は壯年の永く頼むに足らざるを思ひ其の水腹身麻氣息奄々たる病者を見るや太子は身苦何れの時にか襲ひ來るやを期すべからざるを悲めり其の曾て人の死を送りて六親眷族棺を圍て號泣するを見るや太子は益世事の常なく人命の長からざるを悟りぬ無常の悲觀は漸次太子の胸中を占領し滅せんと欲して滅すべからざるに至れり危機は益迫りつつありき。

羅睺羅

此時に當りて妃耶輸陀羅は一子羅喉^{ラウ} Rāhula を生めり太子は益世累の重くなり行きて世苦の容易に脱し難きを思ひぬ且古來婆羅門家居して子女を設くれば世を遁るを常とす太子は愈一切の世累を捨てて此世無常の苦を脱すべき道を求めざるべからざるを思へり太子時に年廿九^十方には是れ人生沈痛の感情漸く長じ眞摯莊重の思想は終に一大決心と勇猛を起さしむるの時なりき。

太子の出家

太子が出家求道の決心は今や動かすべからずなりぬ時宛も十二月八日太子は斷

乎として心を決し、父母妻子恩愛の情を遮断し、名馬^{カニカ}乾陟^{カニカ} Kanthaka に跨り夜に乗じて宮殿を出でぬ、夜漸く明き時跋伽仙人の行道せる森林^{カニカ}に著し、此に寶冠錦衣を脱し染色の粗衣袈裟^{カニカ} Kāśya を着け一沙門となり了りぬ。

門迦族沙
門の眞學

沙門なる悉達は暫く跋伽仙に就き其教に依りて苦行せしも、其成すに足らざるを
知り、轉じて摩揭^{カニカ}國^{カニカ} Magadha の首府王舍城^{カニカ} Rājagaha 附近に來り、其處の山林に住して徒弟を集めたる數論派の教師阿羅藍迦藍^{カニカ} Alāra Kālāma に就きて道を乞ふ、仙人悉達に教ふるに煩腦生起の因を以てし、且禪定の四級を修して終に非想非々想所に到達し、眞實の解脱を得べきを教ふ、悉達此教の未だ究竟にあらざるを看破し、又去て鬱頭藍^{カニカ} Uddaka に至る、鬱頭藍の教ふる所亦阿羅藍に同しく我執を離れず、悉達即之を去て摩揭^{カニカ}國中を遍歴し東北の方尼連禪^{カニカ} Neranjara 河畔に出で苦行林^{カニカ} Druvelā に入りて獨居修行す、同處苦行の比丘五人亦悉達に就て行を修す、此の如くする事幾年、沙門悉達一日悟る所あり、從來の無益なる禁欲を捨てて尼連禪の水に浴して其氣力を爽快にし、一枚女が乳糜に體力を回復し、此より五比丘に別れて獨り尼連禪の流を渡り、今の伽耶^{カニカ} Gāyā に到り、其畢波羅^{カニカ} Pippala 樹即後世の所

沙門の獨
立修行

樹下の成
菩提佛陀

謂菩提樹^{カニカ} Bodhi-druma 下に端坐思惟し、眞正覺を得る迄は此坐を去らじと決定せり、彼は樹下思惟の間幾多の健闘に依りて心内の魔を破滅し、二月八日朝明星東に現はるる頃豁然大悟し無上眞正道を得て眞理の大光明を洞觀し、一沙門は佛陀となりしを自覺しぬ、方に是れ佛陀が生れて三十五歳の時なりき。
異常の謙抑と異常の抱負は偉人の常に有する所なり、修行六年常に虚飾欲望を遏絶し一心眞正道を求めたりし一沙門は、今や絶対眞理の覺者となれり、一切の世苦眼底に映し解脱の大道を手に把持し得たる佛陀は、到底其慈愍の涙を抑えて自己の悟得を自己一人に止むる能はず、蠢々世間に苦惱せる衆生の爲に此大法を宣布して之を救濟せんとの熱意は炎燄の如く揚がり來ぬ、此に於て捨行淨行の沙門は化して救濟弘法の佛陀となれり。
佛陀の傳記後世に傳はる者は多く此後を傳へず、此より後は即佛陀か傳道の事業に入る。

第三節 佛陀の傳道、佛教教團の成立

覺者佛の自覺は一沙門をして其所證の菩提を宣布し、其と共に解脱滅苦の眞樂を共にせんと決心せしめぬ。即佛は先づ鹿野園 Migadaya に到り、彼が先に苦行林に修行を共にせし五比丘を見て之に所信を公にし、世は苦惱なり、吾人は此苦惱の原因を滅して苦樂の上に超越する中道。即入の正道に依りて眞正安樂の道に入るべきを説きぬ。苦集滅道四諦の直截徹透なる教と佛の眞摯熱誠なる態度とは大に彼等感動し、憍陳如 Kondarins 先づ佛に歸し、佛弟子として沙門となりぬ。他の四人亦次で佛弟子となる。是を佛が最初の說法即轉法輪 Dhammacakka-pavattana とし、五人の弟子は佛教最初の沙門となれり。

佛尙鹿野園に止まり、夏期多雨の候此に安居して法を説き、男女老若貴賤を擇ばずして之に解脱の道を傳へぬ。之を佛教最初の雨安居 Vassa とす。時に長者の子耶舍 Yasa 佛に歸して出家沙門となりてより、其父母眷屬亦佛に歸し、在家世俗佛弟子となりぬ。是に於て佛教教團に始めて在俗の弟子あり、此に次て耶舍の友にして佛弟子となる者六十人、教團は頓に膨脹の運に向へり。佛が衆生に法樂を頒たんと慈悲心は駭々として進めり、即六十弟子をして諸方に

周歴して衆民を教化せしめんとし、之を送て説て曰く、
弟子、余は一切の繫縛を離脱せり、汝等亦然り、弟子、行け、而して衆生の福利の爲に、衆生の歡喜の爲に、世界を憐愍する爲に、人天の幸福歡樂の爲に、諸處を歴遊せよ、弟子よ、始も中も終も尊き法を説け、聖果の完全淨潔なる道を説け、世塵を離れたる人はあれど、彼等若し法音に接せずんば滅せん、彼等をして法を聽かしめよ、
と、此の如く六十人を四方に派して後佛陀は自ら苦行林に行きぬ、此處に事火外道の長老迦葉 Kassapa を化し、彼をして事火の具を尼連禪の河水に投せしむ、迦葉の二弟同じく佛に歸し、三人が率ひし處の事火外道の徒千有餘人亦盡く佛弟子となる。
佛は其徒弟を率ひて王舍城に向ひ郊外の竹林に止住す、王舍の國王頻毘沙羅 Bimbisara 從者臣下と共に之に詣し、其法を聽て眞心隨喜之が弟子となる、佛陀が王舍城竹林に於ける說法は、實に法本無我、三事生染の二點にあり、身は元生滅の法にして五蘊の集散離合に外ならず、一切の法に我あるなく、又我處あるなく、既に我あるなし、然れども吾人は苦あり樂あり、是れ情塵、識の三事が相合し、百般の事物に就き

て染着し、此集合染着生滅連續河水の流れ去て而も盡きざるが如くなるが故に果報ありと、此教は實に佛教の大本を宣布せし者なり、頻毘沙羅王は此説法の後、佛并に佛弟子の爲に竹林に家宅を建築して之に贈りぬ、是れ即竹林精舍。 *Veivana vi-hāra* にして、數千の佛弟子は此が爲に雨露の害を凌ぐを得たり。

舍利弗及目捷連

此時に當りて、外道の師舍利弗 *Sāriputta* 及目捷連 *Moggallāna* も亦佛の弟子阿説示

王舍城民の不平

Assaji に法を聽きて佛に隨喜し、其弟子二百五十人と共に佛子となる、此よりして王舍城の人民にして佛子となる者日に多く、弟子等日に市に出でて食を乞ひ、捨行乞食の沙門市に充滿し、市城の繁華頓に衰滅するに至りぬ、此に於て市民の佛陀と其弟子の乞食とに對し、不滿不平を鳴らす者少なからず、弟子等之を告ぐるも佛は笑て之を斥けぬ。

給孤獨長者と祇園精舍

此時舍衛城の長者給孤獨 *Anāthapindika* 夙に慈悲の情に富み、常に孤獨を惠めり、佛の慈風を仰て竹林に來り、法を聽き大に之に信隨す、即佛の爲に舍衛城に一精舍を築かん事を乞ひ、舍利弗と共に北に歸り、國王波斯匿 *Pasenadi* 太子祇 *Jeta* の園を購ひ、精舍を建築して之を佛に奉ず、即祇園精舍 *Jeta-vana-vihāra* とす。

佛陀の歸郷

佛成道五年、其教團既に成熟せり、父王其子を見んと欲す、佛即郷國に歸りて眷屬を見て法を説かんとす、親族故舊或は佛の乞食となりて舊の悉達にあらざるを見て之を喜ばず、或は頻に之か還家を促すあり、然れども佛は泰然として法を説き、自己の教系が過去七佛の教に出でしを明にし、過去佛の教に依りて熱意教化を勉む、佛の異母弟阿難 *Ananda*、從弟提婆達多 *Devadatta*、其他優波離 *Upāli*、阿那律 *Anuruddha* 等此時佛に歸して出家す、佛亦其子羅喉羅を度して僧となす。

父王の死

後父王死し、其妃即佛の養母波闍提 *Pajāpati* 及耶輸陀羅其他の婦人皆佛に歸して出家す、佛教此に初めて比丘尼 *Bhikkhuni* あり。

教團の膨脹と敵

此より後、佛は其弟子と共に諸方を教化し、其足跡は印度の西部及南部には及ばざりしも、殆ど恒河の平原を周遍し、至る所諸種の人民を其教團に誘化せり、此より教團益擴張して其勢力既に看過すべからざるに及びては、教團の中不平分裂なき能はず、教團の外之に抗し之を非難する者なきにあらず、目捷連が阿難陀の殊遇に對して不平を抱くあり、提婆は後教團を脱して闍伊那に投し、頻毘沙羅王の子阿闍世 *Ajātasatta* と結びて佛教に反抗せり、同じく闍伊那の徒にして定命論者たる拘睢黎

も常に詭辨を以て佛に抗し、佛も亦常に之を排斥したり、目捷連も終に外道の爲に殺されぬ。

佛の入滅

佛陀は教化四十餘年にして齡既に八十に及べり王舍城より竹林に至りて此處に一夏を過ごせしが其健康の既に終に近きを悟り、即毘舍利 Vesālī に弟子を集めて最後の説法をなし、此より東北拘尸那羅 Kusinara に旅しぬ、佛陀は其尸羅伐底 Hirāṇyavati 河畔の沙羅 Sala 樹林に病床を設く、佛は此に老翁須跋達 Subhadda を度し、弟子に少小戒律を棄て一に佛の遺法に依て自ら處せよと遺誡し、終に八十歳の二月八日を以て無餘涅槃に入りぬ、是れ實に紀元前五世紀の半にして印度は今や其一大明星を失へり、然れども其遺業は此よりして大に世を照らさんどす。

佛の興起の如何

佛敎の有力なる敎團と其の宏大の感化は佛陀が五十年の傳道に依りて成立しぬ、而して印度の宗敎界は驟雨一過、氣清爽の狀を呈しぬ、佛が一生の傳道は實に古今の壯觀なりき、然れども傳説が傳ふる儘にては、其一生が單純なりしが如く、其實如何なりしやは吾人之を知るに由なし、何れの時如何にして佛の精神は其が弟子に

佛の婆羅門敎に對する態度

説けるが如き状態となりしや、如何なる路を取りて自己の信解と其傳道が進み行きしや、又印度國民の此に對する態度、印度諸學派の佛陀が思想に對する批評は如何なりしか、此等の問題は吾人の材料のみにては到底明にするに由なきを知らん、此等につきては吾人は終に何等を知る能はざるべし。

只佛が婆羅門敎に對して特に反抗の態度なかりしは事實なるが如し、婆羅門敎にては幾多の異論即自由研究を容るるの風あり、婆羅門敎は一派として一定の組織敎權を有せず、ルーテルが反抗せし時代の法王政府とは全く趣を異にせり、幾多の思想は同じく婆羅門敎の中にありて種々の異説を立てたり、然らば大體の面貌を國敎に同じし世を厭ひ之を脱するの法を講じたる佛陀が、獨り敢て國敎に反抗するの態度を取らざりしや必せり。

又佛陀が出發點は全く自己内心の不滿を醫するにあり、真理に依りて自ら満足を求むるにあり、其が法を説きて人に傳へしも全く自得の妙理を人に頒たんと欲する一片の慈悲心に出づ、自ら一派を立てんとか敎祖たらんとかいふ如き野心的希望を抱きしにあらざるは、其が布敎の跡に見るも明なり、然らば假令其敎が其實は

佛の傳道の心

其結果が示せる如く國教に反對なりしにせよ、佛自身に特に反抗の意志ありしに
 わらざるなり、彼は時勢の子なりき、不識の間時勢の必要に驅られて宗教の刷新を
 行ひ、此刷新は自ら化して一新宗教の觀を呈するに至りしなり、彼の三明經に於け
 る佛と婆羅門との問答に見るも、其間に反目の事なかりしを見るに足る、滅後尙然
 り、況や佛の生時に於てをや。

但彼が當時の犠牲と苦行に反對せしは掩ふべからず、此點に於て佛は力を盡し
 口を極めて、無用の苦行と殘忍の供犠を攻撃したり、此に特に記すべきは佛が吠陀
 を稱せずして菩提。Bodhiを稱せし事是なり、二者は同じく世界の真理に到達せり
 となせる知識なり、然れども吠陀は即古典證に基き婆羅門が有せし知識なり、佛は
 は之に依らずして自家内心所得の真理を菩提と稱し、而して此菩提に達したる自
 己は佛。Buddhaと稱したり、此一事は彼が外面にも既に婆羅門教に異なる處な
 りとす、蓋し彼が内心所證の真理を確信せし結果自ら菩提に到達したる佛なり
 と信せしならん、而して是れ實に彼が刷新洗滌の大業を成せし最大根源たらん、然
 れども此を以て直に彼が國教に反抗せし意志ありしとなすべからず、此語は實に

菩提と達

數論派の既に用ふる所にして彼は神我最初の屬性を覺。Buddhiとせり、又シヤタ
 バタアラマナにも自己の最大真理を悟得せし人を稱して波提佛。Prati-buddha
 と稱せり、又摩拏法典(四章二〇四)にも賢人を稱して佛。Buddhaと稱せり、佛は吠陀に依
 頼せずして自得の菩提を希求せり、然れども是れ特に吠陀に反抗せんとすの意志に
 出でしにあらず。

佛は此の如く自己の教理を以て特に在來の宗教に反抗せんとせず、故に自己の
 教理を稱して法即達。Dhammaと稱せり、凡そ達磨とは元如法隨順の義にして此
 れ殆ど聖教と稱し宗義と稱するに同じく、在來の教權を稱するに同じき者なり、然
 らば釋迦自らも自ら得たる所を以て、新しき者在來に背反する者となせしにあ
 らざるや知るべきのみ。

然れども佛は此達磨を以て婆羅門の徒が思惟する如く一部に内秘なる者とは
 なさず、否彼が牢たる確信と燃ゆる如き慈悲の熱情は一切の差別を無視し、一切の
 人類に此法を宣布せんとしたり、即此に至ては佛は在來國教の四姓の別に關せ
 ず、一切の人は菩提の道に入るべしとなしたり、其れ實に佛が印度アリア民族

平等の傳

の國民的宗教たる婆羅門教を超脱して一大宇内宗教をなしたる原因なりとす。然れども彼が一生涯の說法に四姓の非を鳴らせし事なし、彼は五比丘に對しては瞿曇の俗姓を稱する勿れといひき、而も此は彼が自ら世間を出離したる佛陀なりとせしが爲のみ、敢て四姓に反對せんとにはあらず、彼は刹帝利にして法を説きたり、然れども此事は古來全くなき處の破天荒の事實にあらず、彼は斯くして四姓を破らんと欲せしにはあらず、佛施は法教上自ら四民平等 Catudissa を實行せり、然れども其四民平等の目的とする所は社會的平等の爲にあらずして、只平等自由なる教團僧伽を設立せしのみ。

佛施の傳道は平民的平等なりき、至る所一切人民に說法し、各其地方の俗語を用ひ、又平易解し易き譬喩、說法を以て其法を説きたり、佛施は其慈悲の進る所自然に平民主義を實行し、其結果自ら國教の貴族的なるに反對するに至れり。

此至誠眞摯なる教化傳法者は自ら佛施と自覺せしのみならず、實に又宏大なる教團の導師となり、世尊薄伽梵 Bhagavat と稱せられ、衆生の教主、眞理の宣布者と仰

佛施と其門弟子

がれぬ、此を以て其の滅に入るや、弟子は殆ど渡海に船を失ひしの感を抱きて悲嘆しぬ、佛弟子が佛に對する關係は尋常一様師弟の關係にあらずなり、其入滅は亦尋常一様の悲嘆にあらずなり、是れ後世佛を以て眞如其物となし、佛の身を以て一時眞理の化現なりとなすに至りし源なりとす。

第四節 佛教の教理

苦○集○滅○道○の四聖諦は佛教教理并に其感化の大本なり、佛教の開祖は只管世事の無常にして人心常に悲哀多きを觀此無常悲哀を蟬脱せんとして之が方法を求めて佛施となり、其直觀の悟得と救済の大慈は發して一代佛教となりしなり、故に佛教の教理は哲學の爲にあらずして解脱の爲なり、然れども佛施が此解脱を求むる道に當りて考察せし所は、宇宙の眞體を發揮せんとするに至り、其が思想の道路は當時の哲學特に佛施が曾て師事せし數論派哲學の理論的にして時には煩瑣詭辯の路をたどりしを忘るべからず、佛施は時勢を一轉したれども亦時代の子たるを失はざりしが故なり。

四聖諦と其思想

一、苦諦

一切苦なり

淨世の事物一として苦。Dukkha ならざるなし、生は苦なり、老は苦なり、病は苦なり、死は苦なり、悪む者に會し、愛する者に別離し、欲する所常に得難き何れか苦惱にあらざらん、人は自己の快樂を欲して外物に執着す、而も吾は常に吾にあらす、老病死の苦は常に來る、外物に常なく集合離散捕捉すべからず、一切は無常。Anicca にして一切皆人を苦惱せしむ、幼者忽に老ひ、生者終に死し、昨の友は今の仇となり、父母妻子も終には別れざるべからず、樂と見る所の者は變じて苦となり、一切の事物は變轉暫くも止らず、歡樂常に消え易うして苦惱長恨の種常に一切を纏綿す、生々死々流轉變易常に苦に成り、苦の前に苦あり、苦の後に苦來る、一切の存在は無常にして世は際限なき生死大海。Samsara なり、生死大海にありては何人も無常の悲哀を免るる能はず、人も天も沙門も婆羅門も乃至畜生昆蟲に至る迄皆此渦中にあらざるはなし。

生死大海

一切無常なり

全世界は焔に焼かれ、全世界は煙に包まれ、全世界は火の上にあり、全世界は震動

せり、Bhikkhū Saṃyutta 一卷

此の如きの中にありて誰か安樂を希ひ得べけんや。

佛教は非常に無常の苦を悲嘆せり、然れども佛教は單に悲嘆懊惱する憂鬱精神にわらず、此悲哀は即一躍して常樂寂靜の理想界を希求するの階段なり、而して是れ又他の一切衆生の同じく此苦界に沈淪せる者を憐みて同じく度脱せしめんとする大慈悲心の源泉なり、佛自身の慈悲も此に出で、又佛教が後來の普遍布教の努力も亦此に出でにき、一切を苦と觀し、此一切に同情し、一切を憐愍するは佛教の心髓源泉なりとす。

佛教の向上的精神

二、集諦

苦の成立

世界の存在は苦なり、吾人は之を脱せざるべからず、之を脱し之を滅するには先づ之が成立の因を探らざるべからず、成立の因を集。Samudaya といふ、即是れ人の苦の成立原因にして、從て又現象世界の成立を説明する者なり、然れども佛の集諦は宇宙論の興味に起りし者にわらず、其目的常に人生の實際を離れざるを忘るべか

成立の順序、生、有、取

渴愛

受

觸、六入

名色

識

らず、其順序の理論に合せざる、其説明の循環的にして徹透ならざる皆此が爲なり
 生存其れ自らは苦なり、老病死一切の苦は生あるが爲なり、生あるは變轉生滅の事
 物即有。Bhava あるが爲なり、有あるは有に執着し取。Dadāna あるが爲なり、執着は
 即事物に對して愛欲あり、得ざるを得得たるを失はざらんと欲するが爲なり、即渴
 愛。Paṇha あるに因る、渴愛は吾人苦惱の最大動原にして、此あるが爲に樂を欲して
 而も得ず、常に外物を欲望して此が爲に惡をなし、業を積ましむ、渴愛は即感覺あり
 て外物を感受するに起る、故に渴愛を生せしむるは感覺即受。Vedanā なり、受は外
 界と交通するに生ず、即觸。Phassa より生ず、觸あるは感覺及理會の機關即六入。Aṅ-
 gāṅga āyatana あるが爲なり、此六入あるは身體組織具備して人格生ずるに因る、
 神と體即名色。Nāma-rūpa は其因なり、身體は地水火風空より成りて其形體を具す
 と雖も、而も意識の之に入り之を統轄し活動するなくんば、人格を具し神を有し名
 色をなさず、識と名色と相待て生をなす、故に名色の因は識。Viññāna なり、識は身體
 の生死以外に永續して前生後生を一貫する所以なり、然らば識は如何にして此く
 生死に亘るか。

業

行

一切法

無人格
無我

識の永續するは、吾人が種々の行動をなして種々の果を生すべき業。Kamma の因
 を積集するが故にして、此因盡きざる限は其果滅せず、因果連續止むなく諸の因果
 積集し、諸の因果連續し、其集合離散の間に一定の化合組織を形成すれば、即此に識
 を生ず、佛敎は此化合組織を名けて行。Sankhara といふ、此行の組織解體せずして
 其業因の力永續する限は、其中に生じたる識も亦永續して生死に亘る、故に識と行
 とは生死の變に滅せずと雖も、本體あるにあらす、只因果の秩序法。Dhamma に支
 配せられて業因が活動集散する經過あるのみ、佛敎には一般に常住不變の本體あ
 るを認めず、只轉化經過あるのみ、宇宙の現象は法にして體にあらざるなり、只轉
 化經過の間にありて吾人をして常住の本體あるが如くに思惟せしむるは、外界の
 現象には物質の外形即色の暫留し、内界の現象には心意の統一即識の暫く一貫す
 るあるが爲のみ、而も其の同じく一貫するも、只其變化轉々の際に一時の組織、行の
 一小部分を見て此く思惟するのみ、吾人が一定の個人格。Satta ありとするも、其を
 大觀すれば、此も亦常住にはあらざるなり、是れ恰も地球の表面其實は大圓弧をな
 すも、其一部に就きて見れば直線なるに同じ、佛者は又之を一燈穗の形同じくして

燃ゆるも而も火常に同じからず、一炎一焔變轉止むなきに譬へたり、此に於て佛教に無我 *Anatta* の教あり、法本無我とは佛陀が其四諦の說法に次きて演述したる所なりき。

無明

識ありて名色あり、受あり、諸の心活動ありと雖も、不變の本體なる識ありて活動の主宰たるにあらず、故に不變の個人格あるなし、一切は生滅の連續經過のみ、一切法に我なし、我なきに我ありと思惟するは、諸迷妄の源にして、知識上の謬見も道德上の我執惡行も亦此を根原として出づ。

一切法無我なり、然るに衆生何が故に其識の一貫を認め之に依て行動し、又生死の間に其業因果を連續するか、是れ一に此無我の眞理を悟らず四諦の眞理を知らざるが爲なり、一言にして云へば無明 *Avijja* なり、無明は即一切迷妄の源泉、一切苦惱の依て出づる所なり、生死大海の波瀾は皆無明の揚ぐる所なり。

吾人は此に於て佛教の無明を現象世界生死大海の第一原因となすの甚だ婆羅門哲學の迷妄論に似たるを見る、然れども二者は其根底を異にせるを忘るべからず、佛教が吾人人類の生老病死苦惱の原因を尋ねて之が第一原因を無明に歸せしは、

無明論と迷妄論と

全く實行上の趣向より出で又其解釋も道德的なりしなり、佛教の無明論は形而上論の爲に起りしにあらず、理論的解釋の爲にあらず、從て其解釋は理論上に缺點ある事は彼の婆羅門哲學の比にあらざるなり、後世佛教の形而上論は此に依りて彼の婆羅門哲學に於けると同じき宇宙論を構成せしも、其は原始佛教の必しも主眼とする所にあらず、此故に佛は無明を以て只四諦の眞理を知らざるの無知となし、其が宇宙論的に何れの時に如何にして起りしやといふが如きは、之を問ふを要せずとて直に之を無始と斷しぬ。

無始の無明は行を生じ、識を生じ、名色を生じ、六入を生じ、觸受、渴愛を生じ、取を生じ、有を生じ、此に生ありて衆生は苦惱の生死大海に沈淪す。

此の如き者即苦界成立の因縁 *Paticcasamuppāda* なり、又之を成立の根底 *Nidāna* と稱す。

苦界成立の因由既に明なり、此苦惱を滅し、苦界を解脱するは一に其源泉を杜絶するあるのみ、即無明を打破するは解脱の第一關門なり。

無明の解脱

三、滅諦

苦と熱と

印度は熱國なり、故に熱と苦とは常に聯想し、涼と靜安とは常に關聯せり、此故に佛は浮世の欲望を渴愛と稱し、執着動亂の心を熱に比せり、佛曾て曰く、

熱ある所には涼あり、三種の火あり、愛憎暗愚の火あり、故に火を滅するニッパイヤ涅槃 Nib-

bhāna を求めざるべからず、Buddhavyansa

涅槃滅火

無明を打破し、浮世の慾火を滅し、智慧の凉水に滅火涅槃の清涼靜安なる状態に到達すれば、萬法因果の紛々たる支配を離れ、其苦惱を脱す、解脱涅槃は人をして憂苦無常妄見無明の苦を脱せしめ、自ら解脱の安樂を覺知し、渴愛の動亂する事なく、生死に入らず、自然に人の道を行ひ、博く衆生を愍みて無上満足の新生涯に入る、此解脱涅槃の教を滅諦 Nirodha とす。

阿羅漢

眞に苦を滅し盡したる者は心火再び燃えず、此故に其生命未だ盡きず業果未だ滅せず、行の化合組織未だ散せずと雖も、無上安樂の人は既に生命を度脱せしに同じ、此種の人はい即聖者にして阿羅漢 Arhat なり、是れ即佛教徒理想の状態なり。

聖者靜安の狀態

聖者は生の中にあるも生死を超越し、身體の中に生命を維持するも行の支配を脱

涅槃は彼岸にあらす

涅槃の後の世の佛敎の

せり故に其理想到達は必しも身體死滅の時を待つを要せざるなり、涅槃とは絶無の謂にあらす、只慾火を消滅すれば足れり、眞理を考察して無明を斷じ、淨行を修して慾心を絶つは其理想なり、虚無の思想の如きは原始の佛者中に絶えてあるなし、涅槃は慾心滅盡、行識消滅の靜安 Santi 境なり、萬法萬行の煩惱なき状態なるが故に之を萬法萬行滅盡の境といふべく、即是れ現象世界を超越したる理想境なり。佛敎は此涅槃の理想境を立つと雖も、個人格若くは我を此世界より彼岸に到達せしめ、彼岸にありて快樂を享受せしめんとするにあらす、涅槃に就きて佛敎は慾火滅盡の外何等の屬性を説明するを欲せざりしなり、聖者が其死後如何にして理想境に生存するや否やと問ふが如きは吾人が靜安正覺に到るに要なし、恰も箭に傷けられし者が其射手の誰たるを問ふを要せず、只其傷を醫するに着手すれば足れるが如く、慾火の中に世苦を受くる人類四諦の教を知らず又直に苦惱を滅盡するの方を講せずして、如何にして彼岸の状態を問ふべけんや。

佛陀は聖者死後の状態に答へざりき、然れども其中には自ら無我の教に依りて聖者が死後に永續するを否定するの傾向ありしは蔽べからず、只此問題の明白なる

答を得ざりしは、人人の信仰に自由を與へたと同時に、其疑惑を氷結する能はず、特に佛陀世尊の死後には、佛陀が正覺は其色身の死後如何に成り行きしやとの問題は、佛教教團の中に少なからざる思想の動搖を與へ、此は又同時に佛教宗義の發達を促したり、佛陀が何等の屬性を附着せざりし涅槃の境界は、佛徒後來の哲學思想を刺激して活潑なる思想の運動を促し、其中には高遠なる哲理的見解を生ずるに至りぬ、佛陀が明白なる言語上の断定を與へざりしは、旺盛なる萌芽を種植せし所以なりき。

只其れ聖者の身髓は死し去る、彼の行識と我とは涅槃に滅し去る、而も其菩提は滅せず、菩提の彼岸は宏大崇高恒河の沙の如く大海の水の如し、吾人何を言辭を以て之が有無を斷し、之が屬性を論すべけんや、行識の支配にある吾人は到底其理性理會を以て之を把持すべきにあらず、是れ佛滅後の直弟が信仰にして又佛陀自らの信ずる所なりしならん。

原始の佛教は涅槃に就きては汲て盡きざる大海の茫漠を見せ、後世をして其中に千萬種の差別産物を發見するに委せしなり。

中道即八正道

四、道諦

涅槃の靜安に到るの方法即道。Maggaは即佛教の倫理的教理なり。

佛陀は苦を滅するの道を苦樂の外に超越したる中道。Majjhima patipadaに發見し、最初の説法にて之を宣説し、之を八正道。Atthaṅgiko maggoとして説けり、八正道を擧ぐれば、

- 正。見。 Sammāditṭhi 即見解信念
- 正。思。 Sammāsaṅkappa 即意志
- 正。語。 Sammāvācā 即言語言説
- 正。業。 Sammākammaṇṭa 即行動
- 正。命。 Sammā-ājīva 即生活
- 正。精。進。 Sammāvāyama 即勤勉力行
- 正。念。 Sammāsati 即思想考察
- 正。定。 Sammāsamādhi 即止住忍耐

戒定慧

戒の消極的命令

一に世累と欲望を脱して静安の路を目途として此八道を正しく行ふは佛教道徳の大本なり、佛教の煩瑣的傾向は又道に就きて數名目を列擧して、四念處、四意斷、五根等の名目を作れりと雖も、要は正道を踏み、理想境に到達すべき經過並に方法を分類したる者にして、之を叙述するには佛陀が最後の説法に従て止得即戒。[三]定。Samādhi 智慧。Pañña の三項に分つを便とす。

此三者は相助けて涅槃に達すべし、手手を洗ひ足足を洗ふが如く、止得は智慧に依て完く、智慧は止得に依りて淨く、定あれば止得自ら出で、止得完ければ、智慧生ず、此の如くにして解脱の境に達す。

止得は行者の當に履むべき正行なり、佛陀は第一に五戒として一切諸人止得の條文を説けり、曰く

生物を殺す勿れ、

他人の財産に手を置く勿れ、

他人の妻に觸るる勿れ、

偽を語る勿れ、

殺生戒と慈悲

道徳修練の目的

興奮劑を飲む勿れ、

出家沙門に對して佛の禁誡せる所は甚多く、世累を脱し捨行修行する者の爲に多くの禁條を設けたり、佛陀が人の正行を獎勵するに當りて常に禁條を以て之を命令したるは、消極的の命令に依て積極的の道徳に進ましめん爲なり、生物を殺さざる者は生物をして死せざらしめんとし、武器を執て殘忍の事をあさず、心常に柔軟にして一切生類を憐愍し、一切衆生の幸福を企圖せん、此の如く消極的の命令は積極的の命令の如く一善事を命するに止らず、衆善を其中に胚胎せり。

佛陀が説法傳道の動源は博愛慈悲にありき、而して生類を殺す勿れの一禁誡は即其大慈悲の發表なり、其慈悲の目的とする所は同じく解脱の樂果に到るにあり、何となれば慈悲の心は私利我慾を消滅して心を柔軟温厚にし、博く衆を愛すれば忍耐献身の徳自ら出で來り、仇に對するにも忍容の態度を取るに至らん。

佛教にありて止得を勵み道徳を修練するは、人と人との間に平和の交誼を増進するの目的にあらざして、自ら誠め自ら修めて聖者の地に達するを目的とす、集諦に於て無我と斷じたる自己は道諦にありては一切修練の真髓なり、道徳の修練は此

自己を督勵し、自己を修養拂淨して自己を定に止住するを要す、自ら其意を淨うせん爲には先づ意を一處に止住して外界の擾亂を遮斷し、自己心内欲望情慾の悪魔と健闘し、之を平定して一の不滿動亂なからしむべし、此定を修せんが爲には或は樹下林中に入りて結跏趺坐して想を現境以上に馳せ冥想沈思す、其方法種々あり、其の身體を壓迫し精神を抽象恍惚の境に遊ばしむるの極は、時に幻覺を惹起して光明等を眼にする事あり、佛陀自らも或は淨居天の出現を見、明星の躍出を見し事あるに似たり、然れども其要は定に住し禪ニヤナ Jhānaを修し、心を淨ふして無我寂靜の境に入るにあり、此の如く定住修養其意を淨うせば以て惡を止め善を得て一切の煩惱を解脱し、而して一切の眞理を洞觀し眞實智慧に達すべし。

此くして一切智に到達するに漸あり、先づ人我の念を脱し、外境の念を脱し、無限の中に入り、終に無に入る、是れ禪定の四級にして、自力此修養を経て解脱智を得たる者を辟支佛。 Paccekabuddha とす、此境を得て而も衆生を度し世尊如來として世を化する者は即眞の佛陀なり。

自淨其意は一に自己内心の勤勇に出づ、然れども此勤勇を督勵するは過去現在幾

多の聖者佛陀を範とせざるべからず、佛陀も元は人のみ而も止得、禪定、智慧に依りて無明を打破して佛陀となり、其一切智に依りて他の無明を打破せんとす、即佛陀は先づ解脱境を得たる人にして、吾人は之を師と仰かざるべからず、故に佛者は之を尊崇して世尊とし人天の師と稱せり、世尊佛陀の此人中に出現する事過去以來再三に止らず、佛陀は父王に説くに己の既に釋迦種に屬せずして佛陀の一として過去七佛に列するを説けり、而して其の菩提樹下に坐するや過去の一佛亦此處に於て成道せりと信せし者の如し、過去に幾多の佛ありしと同しく將來亦多くの佛と成り、此の如くにして一切衆生終に皆佛果を得るの時あらん、此時に當りて生死の現象世界は終に如何なり了るべきか、是れ佛者の問ふを要せずとなせし所に於て、要は人々自ら其行を修するを以て足れりとす。

諸惡莫作 諸善奉行 自淨其志 是諸佛教

是れ佛陀が過去七佛の共に教へし所と信じて常に衆に教へし所なり。

第五節 佛教教團の戒律

戒律の性質

佛教の教團は其初五比丘の歸佛よりして、佛が五十年教化の終には恒河流域の國王長者乞食賤民男女僧侶を包める弘大なる教團組織をなしぬ、此教團の組織を規定し、其團衆の行狀を命令したる者即教團 Saṅgha の戒律 Vinaya なり、戒律の源泉は一に佛隨の命令にあり、佛隨か其教團成立發達の際に規定命令せし所は即教團の戒律となりて存じぬ。

佛教教團の組織

佛教の教團は信念を同じくして共に淨行修徳世苦を脱せんとする者の和合教團即僧伽 Saṅgha なりき、故に佛隨は之が先覺導師なるも必しも教團の頭領たる資格を有せず、又團衆各諸方を巡回して乞食し説法する間に十分の統轄行はるべくもあらず、團衆は其の佛隨に歸依して之が説法訓戒を信奉するの外は只自己内心の自由に依りて自ら處するあるのみ。

入團

佛教の教團は總ての點にて自由なり、佛隨に歸依して之に入らんと欲する者は直に之に入るを得べし、一切の解脱を求むる者を化するは佛教の精神なればなり、但畸形なる者、負債ある者、兵士たりし者、父母の許なき者は之を許さず、佛教教團に入

沙彌戒

るに二段の階段あり、家を出で佛に歸して沙彌戒 Pabbajjā を受くれば團衆候補たる沙彌 Samanera となり、後數年得道して眞の沙門比丘 Samana, Bhikkhu となる

具足戒、沙門比丘

には具足戒 Upasampadā を受く、此等の受戒式は何等の儀式なく、只佛隨自身若くは長老、受戒の人を召し團衆相集れる所にて其資格を質して之が歸敬を受け、教團の戒條を授くるのみ、比丘は即一切世間の繫累を脱したる者にして父母妻子と絶縁し、女に交らず、盜まらず、殺さず、神通力ありと自稱せざるの四戒を持して乞食修行す。

退團

佛教教團は入團の自由なると共に其退團亦自由にして、教團を退かんと欲する者は直に退き、而も尙俗人として教團の教を受け、或は再び之に入團するを得べし。

比丘には所有なし

比丘は一切の世縁を絶ち、又財産を貯へず、外面を飾らず、只身體を蔽ふ染衣一着と食を乞ふべき鉢一箇と及衣を縫ふべき針等は常に之を身邊に携へて遊行す、故に乞食して他の法施を受くるにも衣食及病時の直接必需品の外は之を受けず、金銀を受くが如きは大禁なりき、故に富者にして教團に多くの法施をなさんとする者は金銀を施さずして教團の爲に家屋精舎を建築し、或は其衣食沐浴の料を施した

乞食

り而して適法の法施は如何なる者も之を受け之を用ふるは又比丘の義務なり。比丘の乞食は日出より正午迄の外に之をなさず、正午歸り來りて食事をなす外は食事せず、水と飯の外は食はず、酒を飲まず、只法施の淨肉は之を食ふ。

比丘の居住遊行

比丘の居住遊行には獨居を許さざるにあらざるも、多くは幾人か團體として互に徳行を磨き危急疾病相救ふの用に供す、新入の比丘は必ず長老に従て遊行し、之に師事す、教團にありては固より階級の別あるなしと雖も、而も長く教團にありて徳行の實ある者は自ら長老として他比丘を監督す、教團の比丘は各分業して洒掃食事等の事を分掌す、教團の生活は單純粗朴にして、早朝晨起後は佛の法を誦し、乞食に出でて歸れば、各教法を談す、決して戯言し無益の談をなさず、比丘は常時は乞食說法して遊行するを法とすれども、只夏期三個月は多雨にして河水多く氾濫して道路通せず、又草木鬱長し諸蟲多く爬出するを以て遊行せず、一處に止住して法を復誦して道を講す、之を雨安居 *Vassa* と稱す。

雨安居

日常の生活

教團の儀禮

佛教は總ての儀式を排斥して起れり、故に内心の信念に必要ならざる者は教團に於て一切之を行はず、只新月満月の日には此日を神聖の精進日として、團衆相會して長老は此時波提木 *Patimokkha* 即解脱戒を誦し團衆に非行あれば之を讒悔せしむ、此會合は佛教の團結を固くし徳行を淨うするに力ある者なりき、雨安居の終には又此と同様の會を催し、衆の前に罪過を讒悔し、自ら内心を放恣す、之を自恣即鉢婆刺 *Pavāraṇā* と稱す。

比丘尼

佛教教團には又女性を容れて比丘尼 *Bhikkhuni* となせり、比丘尼の生活は比丘と大差なし、然れども比丘尼は常に比丘を敬し之に服従せざるべからず、故に比丘尼の八敬法は比丘尼の比丘より具足戒を受け、比丘問へば必ず答ふべき等の事を規定し、比丘尼は全く比丘に従屬せり、思ふに比丘尼の數は甚多からず、佛教中に殆ど何等の影響をも及ぼさざりしなるべし。

在家の信者

佛教の本意は出家にあり、然れども若し全く世俗の人と杜絶せんには、佛教は多くの人を化する能はず、佛は既に鹿野苑說法の時に、在家にして佛に歸するを許し、清淨士即優婆塞 *Dāsaka* と清淨女即優婆夷 *Dāsikā* とを制定し之に戒律を與へたり、是れ即佛教教團の歸依者と見るべき者なり、其が清淨士女となるには一定の法あるにわらず、只比丘の前に歸依を表すれば足れり、又彼等の行狀に就きては特別

の監督あるなく、従て之を破門する事の法あるなし、只悪人の施物は團衆之を受けざるのみ、其清淨なる者には比丘其施物を受け、或は其招に應じ之と食卓を共にし、若くは之に説法す。

雨安居の供養をなし多くの施物をなすは多く此俗人の信者にあり、佛教は此に依りて其活氣の養源を得たりき、然れども佛教が特別に此世俗の信者を感化するの方を奨励せざりしは、後世佛教をして煩瑣詭辨の弊に陥らしめ其衰亡の因をなしぬ。

第六節 佛滅後の佛教教團

佛法僧

佛陀入滅するや、其遺誠は弟子等をして些少の律則に拘泥する事なく、自ら自己の光明として佛の遺法に依れといふにありき、此を以て釋迦牟尼を慈母とし嚴師と仰ぎし幾百の遺弟は佛の滅後は、其安心信仰の根底を生けりし佛陀以外に求めざるべからず、此に於て團衆は佛陀の死を眞の消滅にあらずとして佛陀を崇拜し、其説法を集めて之を順奉し、又教團を以て此等宗教的根底の依て立ち依て活動する

佛陀人格の崇拜

所以の大本となしたり、此に於て佛教に佛法僧三寶^{三寶} ^{Tri-ratna} の名あり、佛教徒安立の大本となりぬ。

佛陀の崇拜に就きては、佛滅後間もなき佛教教團にありては、佛陀生時の感化記憶尙團衆の中に留存する者あり、敢て新なる方法を以て之が崇拜を始むるの要なかりき、其後に及びて佛の偶像遺物を崇拜するの事起り、又佛陀の本性に就きて諸の哲學的考察、宗教的信念を養成したりと雖も、滅後の直弟間には未だ此の如き傾向なかりき、彼等は彼等の胸中に存する佛陀の人格を崇拜せしのみ。

遺法の纂集

此を以て彼等の第一に着手せしは佛が遺法の纂集なり、彼等は佛陀説法の光明の消滅と共に其遺法に留意して、自家安立の地となさざるべからざるに至れり、此に於て彼等は、大迦葉の歸來を待ちて佛を火葬し終り、其年の雨期安居の時に當りて遺法の合誦を行ひたり、即五百の大衆は王舍城附近竹林精舎の西南毗波羅^{毗波羅} ^{Vaihara} 山の七葉窟 ^{Sattapani} に會し、摩揭陀國王阿闍世の施與を受けて此業を始めたり、即佛世在の説法并に規律を合誦し以て其遺法を明にせんとしたり。

達磨と毘那耶

傳へいふ、此結集に當りて迦葉は經部に、優波離は律部に、阿難陀は論部に首座とし

て三藏を結果（まは）したりといへり、然れども此時に當りて三藏の目ありしとは信じ難し、三藏の目は古にはなかりし處なり、只此時には律と法の二部を合誦せしなり、而して此合誦の結果として佛教の教權として上座語 Theravāda の名の下に保存せられたり、此上座たる者は先の三人の外五分律に載する所に依れば憍陳如、富闍那、曇彌、陀婆迦葉、跋陀迦葉、阿免樓陀ありしといふ、蓋し諸高弟之が指道をなししならん。

長老及上座の組織

蓋し佛陀が生存の時よりして、其教團の膨脹に従て其徒弟の間に高低の別生じ來りしは數の避くべからざる所なり、或は年齢に於て或は知慧德行に於て某々の弟子か佛の優遇を受るの事實も亦拒むべからざるに似たり。

此に於て佛の滅後に當りて數百の徒弟は其が崇敬したる所の佛陀を失ひし後の事なれば、高弟の中の某々を崇敬し合誦の首座と仰ぎたり、特に既に組織的に比丘の僧伽をなし之を以て團衆安立の本源となせる教團は其が長者として仰ぐ所なるべからず、此に於て上座 Upari なる名目出で來り、僧伽は高弟をして各其長所に従て上座と仰ぎ、一種の共和的貴族制をなすに至りしなるべし、然れども其組織

教團の外護の組織

は極めて共和的なりしや疑なく、決して教主階級等の事なかりしなり。滅後に至るも此僧伽の勢力は少しも衰退するなく、加ふるに外護の王者長者に乏しからず、僧伽は教法と共に繁榮傳播せり、教法の傳播に従て、其教團修道院の處々に立つに従ては又各國に其上座を要し、佛教教會の組織は希臘の共和的都府が相并て存せしが如き狀を呈せしならん、西城記に諸國に住せし長老を擧げたるも、今日諸方に傳ふる教主の傳統が各相異なるも此が爲ならんのみ。

滅後百年の戒律に關する異論

此の如くにして自由の風ある佛教教團も諸處に上座のあるありて甚しき離背なくして百餘年を経しに、百餘年にして終に戒律に就きて異論を生ずるに至れり、蓋し滅後より此頃に至る迄の間、佛教の文學傳説漸次増大し來り、諸處の長老各其傳説意見を持し、又其間僧侶の品行も昔の如く嚴正ならざるより、破綻は終に戒律の解釋に就きて寬嚴を異にするに依りて異地方僧侶の爭議に破裂したり。

諸長老は戒律の異議を定めんが爲に、七百の僧を毘舍利に會して之を議し、嚴密の議決を以て戒律の寬容なる解釋を異論と決議せり、然れども僧伽の大多數は此長老の議決に服せずして獨立の會合を開き異議を立つ、之を大合誦 Mahā-saṅgīti と

毘舍利に於ける大衆會議

稱す。

佛教の教團は此の如くにして二部に分れ、上座と大衆とは互に其異見を容れざるに至れり、此爭議と分裂に就きては一方上座の傳説のみを存するを以て、事の真相は十分に明ならずと雖も、佛滅後年處を経るに從て、正統派と自由派との分裂を生せしに由るや疑なし、此會議の結果は甚重大にして、滅後寛容を容れ來りし佛教の教會に一定の固形を與へ、幾分か自由なりし佛教を轉して正統の定説を立てしより、此に服せざる者の別派運動となり、固定分派の基を立てたり、何れの宗教にありても其教祖の大目的は熱情なる救世利民の外に一派一定の宗教を立つる等の意志ある事なく、從て其が教團は圓轉自由にして活氣を帶ぶるも、其教團成立して年月を経るに從て、所謂正統なる者と異議なる者とを生じ、一定固形の宗派を形成するに至る、恰も小兒が成生するに從て化骨の結果身體の組織鞏固となるに似たり、今の毘舍利の會議は基督教のニカヤ會議と同しく佛教成長の一轉機にてありしなり。

蓋し滅後より此時に至る迄の佛教は盛に其教理教條を形成せしの時代にして、多

宗義確立の始

くの經文傳説は此間に生み出たされしが如し、所謂南方佛教の大體は此前後に形成せられつつ、後の阿育アユクの時に大成を告げしなり、此を以て佛の在世には未だ佛教なる宗教なかりしといふべく、其滅後に漸々一派の宗教をなしし者が、此會議に於て一定の宗義を立てしといふも不可なきなり。

第七節 佛滅後の印度と希臘文明

印度の列國非其興廢

佛の時に當て印度は大小列國林立の狀を呈しぬ、此の如きの間に處しては列國の間に詭計權謀の交際行はれ、興廢存亡の頻繁なりしは固より其數なり。

佛の故國たる迦比羅城の運命に就きては明瞭の事實傳はらずと雖も、佛の生時既に滅亡せし者の如し、西域記に傳ふる所にては舍衛國の王毘盧遮迦 *Vishākhā* は事に依りて迦比羅城を攻め、終に之を亡ぼし、其多數の人民を殺戮せし者の如し、或は此事を以て佛が厭世の原因となせども、單に臆測に過ぎず、迦比羅城が佛の生時に既に滅亡せしは確實なり。

北方にて舍衛國が他國を吞併せると共に、南方に在りて摩揭陀國は漸次其國勢を

歴山大王
の侵入

強盛にし、佛の生時より既に恒河の北方に住せし閼者。Vajji 種族と干戈を交へ、終には之を併呑し、此より兵を四方に交へ、阿闍世王の雄畧は終に王舎城、憍薩彌の諸國をも降したり、此の如く摩揭陀國は印度の中央に覇權を握り、殆ど世界王即轉輸王の實を得たり、摩揭陀は國勢の興隆に従て都を毘舍利に移し、又次に波吒釐子^{Paṭaliputra}に移し、其王統亦幾度か變遷したり、阿闍世の後にはススナーガの王統之に代はり、此王統は又難陀^{Nanda}王統の代はる所となり、終にチャンドラグプタに及べり、傳説が此等王統の歴代に就きて傳ふる所は事實としては信すべからず、只此三王統が相次ぎしは事實なる者の如し。

印度國內には權勢の争闘紛々たる時に當りて、霹靂の一撃は西天より印度の天に轟き來れり。

三百二十七年に當りて強勢勇猛なる歴山大王の軍は突然信度河上に現はれぬ、此不思議の恐怖に打たれしパンジヤフの諸王はボロスを首將として之を防戦したるも、西方の大軍は難なく信度の上流を横りて印度に入り來り、信度上流の諸方を平定したり、然れども軍狀止むを得ず、彼は軍政と外交に依りて其新領地の守備を安

チャンドラ
グプタ
の王統

全にしたる後侵入後二年を経て軍を率ひて西に歸れり、恰も是れ驟雨一過の狀。

歴山の印度に在るに當りて印度諸方の無頼の徒乃至策士等は此處に集り或は大
王の東進に資し或は亂國の中に縦横して此間に奇利を博せんと欲したり、其一人
たるチャンドラグプタなるものも亦策を大王に獻せんとせしも、事に依て東に遁
れ、國內の恐慌亂動に乗じ無頼の徒を嘯合して一軍勢を作るに至る、彼は終に三百
十六年摩揭陀の都城波吒釐子を陥れ、難陀統に代はりて、其王となれり、瓦解に近か
りし中印度の勢力は此に一刷新を得たり、彼は此に勢力の大本を固めて後再び西
に進み、歴山が遣せし暗將を追放し、西印度を屈服して偉大の王國を樹立せり、即此
を摩利耶^{Maurya}王統の始となす、此時歴山は既に死し其領土は諸將の分割する
所となりしが、其中スリアを得し一人セロイコス^{Selucus}は再び其印度の領土を回復せん
とせしも、チャンドラグプタの勢力既に此地に樹立せられしを以て之と戦ふの不
利を知り、乃此と和し五百の象と領土とを交換し、其女をチャンドラグプタに嫁し
三百六年使臣メガステネース^{Megasthenes}を其都城に派遣したり、此に於て印度全土は全く此
王の治下に歸して太平隆盛の端を開きぬ、其行政の緻密善良にして厚生利民の業

の擧れるは希臘の使臣をして嘆美せしめ、其國勢の強大なる六十萬の歩兵と三萬の騎兵を有したりといふ。

チャンドラグプタ王は二十四年の後に死し、其子頻頭沙羅^{頻頭沙羅}之を嗣きしが二十八年にして死し、其死後四年は王位承繼に就きて諸子の争ありしも其子阿育位に即きぬ(二六〇)此王の治世は佛教に取りて最重要の時代となれり。

希臘人は其本國との關係を絶ちたる後永く印度の西北バクトリアの地に國を建てて常に印度と交通したり、其使臣はメガステス以後相次て印度に派遣せられ、其美人は多く印度の朝廷に入り、其美術家は遠く恒河の邊に來りて其製作を今日にも殘せり、其が印度に希臘の文明を輸入せしも固より其所なり、印度人は常に希臘人を呼てヤワナ Yavana と稱し、其婦人ヤワニ Yavani は印度に於て宮女として屢戯曲にも畫かれたり。

印度人は其天文等の學術を希臘人に受け、又其彫刻に至りては希臘の優雅沈靜の風に依りて大に振起し、佛教の建築と相合して多くの製作を出したり、希臘の文明は實に印度に於ける宗教建築特に彫刻の最大刺戟となり其遺物の存せる者最も

希臘人の交通と希臘の文明

希臘彫刻の影響

ハンジャフに多く、東に至るに従て少しと雖も、其影響は東パトナに及び南グジャラトに及べり。

希臘人と印度人との交通は此の如く希臘の文明を印度に波及したるの後其使臣并に歴史家が親しく印度の事物に接して之が記録を遺せしは事は今日に於て吾人に莫大の利益を與へ、當時印度の狀態其他歴史上の疑問に光明を與ふる事少しとせず。

希臘人との交通は又印度と羅馬との交通を促し、印度の王たりしポロスは使臣を羅馬の新帝王ケイサルに送りし事あり、此に依りて羅馬貨幣の印度に入りしもあり、希臘使臣の記録に依りてチャンドラグプタの頃より阿育王の時代に於ける印度宗教の狀態を推測するに、佛教徒は婆羅門と平和に相對立せし者の如く、婆羅門と佛徒即釋子沙門 Sakyaputrasamana とは常に并べ稱せられぬ、又先に婆隨摩那の開きし闍伊那派は發達して其中の一派なる尼乾^{ニ乾}隨 Niggantha 即遁世者なる名は使臣の記録に散見せり。

希臘使臣の記録

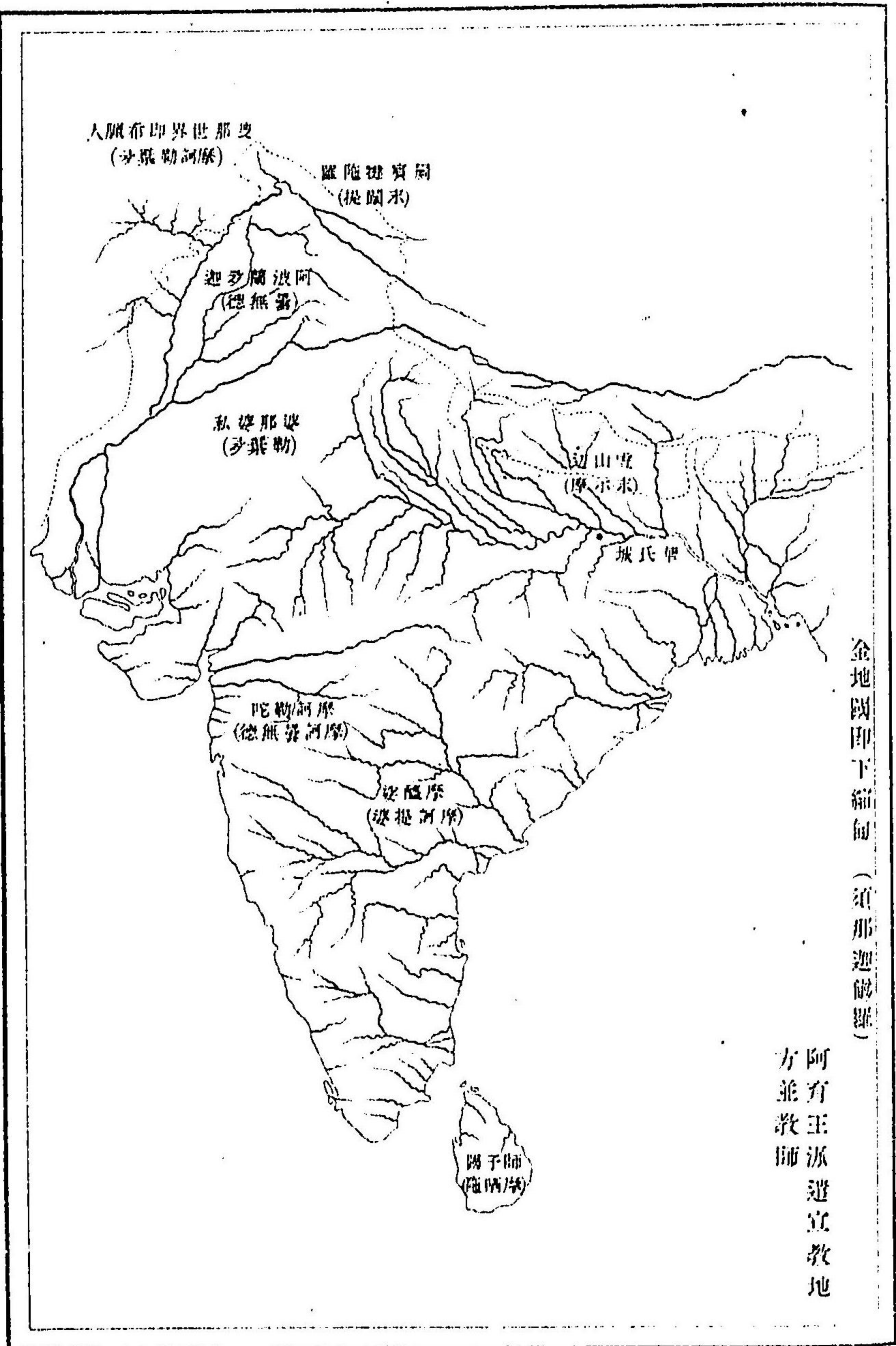
羅馬との交通

第八節 阿育王と佛教

賢明の王阿育^{Asoka}は父王の大帝國を嗣て印度全土の王となれり、其後來の事蹟に考ふるに王は仁慈博愛にして人道を重んじ徳義を好みし人なるや明なり、此を以て即位の後間もなく彼は其性情と最も適合したる佛教に歸し佛が平等博愛の宗教を奉じて益其心情を濃にしたり。

王の事蹟に就きては諸方の傳説種々の事實を傳ふと雖も、多くは信憑するに足る者にあらず、然るに幸に王が當時發布したる法令は刻して岩面、柱面、窟内にあり、其今日に存する者岩面十四、柱面十一、窟内十七の多きに達し、王の信仰事蹟は幸に此中に見る事を得べし、故に今細事に就きて荒誕の説を唱ふる一切の傳説を棄て、一に此不朽の遺物に依りて王の治世と其教法に對する關係を記述せん。

王の領地は今日印度の諸地方に散布せる其刻文が示すがごとく、又刻文の文字が示すが如く、**デツカン**を除くの外全印度を掩有したり、蓋し父祖の餘威に依り王自らも諸方を征服して此大帝國をなすに至りしなり、此外國外の諸種族國民にして幣貢を献し或は隣交を修したる者甚多く、印度振古未曾有の強勢なる狀を呈した



阿育王の性情

第八節 阿育王と佛教

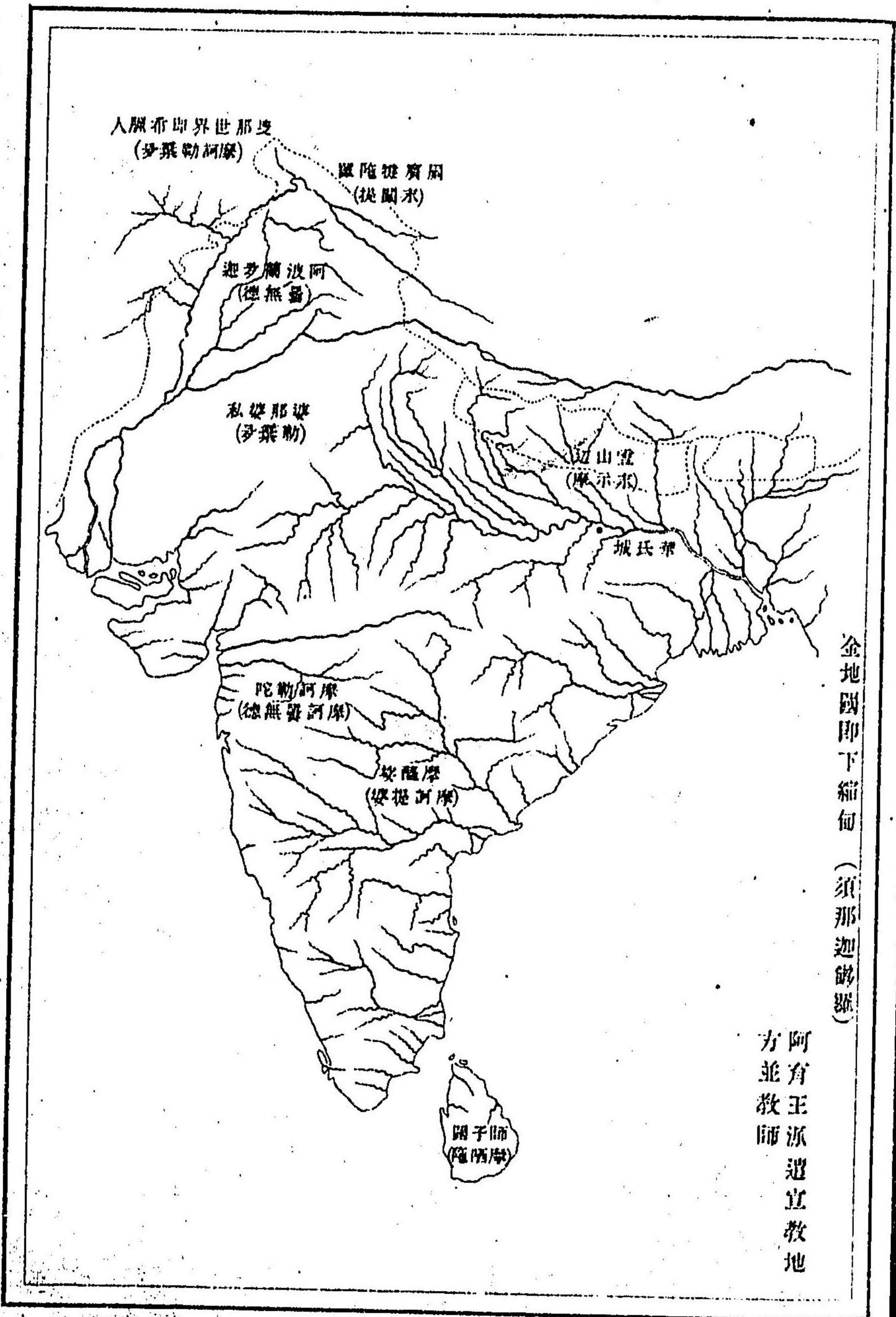
一五六

賢明の王阿育。Ashoka は父王の大帝國を嗣て印度全土の王となれり、其後來の事蹟に考ふるに王は仁慈博愛にして人道を重んじ徳義を好みし人なるや明なり、此を以て即位の後間もなく彼は其性情と最も適合したる佛教に歸し佛が平等博愛の宗教を奉じて益其心情を濃にしたり。

王の事蹟に就きては諸方の傳説種々の事實を傳ふと雖も、多くは信憑するに足る者にあらず、然るに幸に王が當時發布したる法令は刻して岩面、柱面、窟内にあり、其今日に存する者岩面十四、柱面十一、窟内十七の多きに達し、王の信仰事蹟は幸に此中に見る事を得べし、故に今細事に就きて荒誕の説を唱ふる一切の傳説を棄て、一に此不朽の遺物に依りて王の治世と其教法に對する關係を記述せん。

王の領地は今日印度の諸地方に散布せる其刻文が示すがごとく、又刻文の文字が示すが如くデツカンを除くの外全印度を掩有したり、蓋し父祖の餘威に依り王自らも諸方を征服して此大帝國をなすに至りしなり、此外國外の諸種族國民にして幣貢を獻し或は辨交を修したる者甚多く、印度振古未曾有の強勢なる狀を呈した

阿育王の大帝國



金地國即下縮句 (須那迦鐵羅)

阿育王派遺宣教地方並教師

り、而して其都城は即波吒釐子なりき、此大國に君臨したる明君阿育の事蹟は主として宗教の上にありき。

吾人は進で阿育王が興教愛民の事蹟を詳述するに先ちて先づ其信仰并に精神を明にし、從て王が諸の宗教特に佛教に關する關係を發揮し、此と共に王が佛教の發達并に印度宗教史上の意義を究明するの要あるを見る。

王は常に其が宣布する所の徳教を稱して單に法即達磨。Dhammaと稱せり、此を以て王の精神信仰を明にするには王が稱して法となせし所の何たるを研究せざるべからず、王の法とは一言にして蔽へば、一般に道德的宗教即徳教に外ならず、其柱面第二刻文に

法とは、勉めて惡をなさず、勉めて善をなすにあり、即慈悲、慈善、眞理、生活の清淨にあり。

といへる者其法を説き盡して餘蘊あるなし、王の信せし所は一宗一派の宗義定理にあらず、其行はんとせし所は規定儀式の行にあらず、柔和慈愍人間らしき心情を以て博く人間生類を愛し、徳行正見を進めしめ、此に依りて世間散じ易く消へ易き

快樂を超えて、現世未來世に亘る真心の満足と自他の幸福を得んとするにありしなり、煩瑣なる哲學意見、頑迷なる儀典は其要する所にあらず、天上の神人間以外の樂世は其冀ふ所にあらず、要は人道博愛の業に依りて一切の善に近かんとするにあるのみ、此故に道を行ふは特に僧たるを要せず、世間を通るるを要せず、又一派一宗を固守して他を敵視すべからず、第七、十二法令、現世の惡を脱して未來永恒の利樂を冀ひ、徳義仁心人道を修めんとする者は即皆其徒なり、王の宗教なる者が最も弘き意義に於ての人道教にして其法臣をして教法を宣布する爲に一切宗派の中にも入らしめしが如き(第五法令)最も包括的にして最も普遍的の性質を有する事知るべきなり。

此の如き信仰精神に依りて其法を宣布せんとする阿育が其恰好の良友を佛教に發見したるは理の當然なり、婆羅門教の如きは王の精神と相容るべくもあらず、王の寛容にして又最も博愛なる決して一派を護し一派を排する事をなさざりき(第七、第十二法命柱面第六、第八法命)然れども其信仰理想最も佛教に近かりしかば王は明に佛法僧に歸命し(ハイラト刻文)又佛教の爲に種々の事業を起すに至れり。

佛教は阿育王を感化しぬ、然れども佛教が又王の偉大なる精神に感化影響せられしや洵に大なる者あり、從來の佛教は國民種族の別を眼中に置かず實に宇內的の性質を有したり、然れども亦一種の世外教なりき、彼の僧伽即教團には俗人の信者を容れざりしにあらざるも、本來僧伽の一員たる者は世間を出でたる沙門なり、即其僧伽は離欲乞士が自ら道を修するの一團體に過ぎず、佛の滅後にも其布教の事は大に振興し、或はメガステテースが記する如く醫業を以て民衆を救へる沙門ありしと雖も、而も其究竟の目途は人道といはんよりは寧ろ世外にありき、此點に於て從來の佛教は阿育王の人道教よりは偏僻なりき。

然るに阿育王の博愛人道の精神は恰も佛教と投合し、王は即此教法を以て己の教法となし、此と共に儀式雜行の無用を鳴らし、又現生を惡と觀し(第十法命)正道に依りて(柱文第七)慈悲を行ひ、惡に遠かり善に近づき以て永恒の利樂を享くるの大本は今の佛教の四諦八正道の理法并に諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意の教と契合せしなり、而して阿育王は之に加ふるに熱情活潑の慈悲心を以て汎く人道を改良せんと企圖したり、即佛教は其大本の觀念に於て阿育王を化せしと共に、其世間的熱意